琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告

2006（平成18）年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

琵琶垣内遺跡は松阪市豊原町から安楽町にかけての範囲に所在する遺跡です。櫛田川左岸のこの地は、旧参宮街道が東西に貫き、古い町並みを感じさせる歴史深い所です。古くは、縄文時代の土器を多数出土した山添遺跡をはじめ、西側の丘陵には、天王山古墳群や山添古墳群など、多数の古墳が築造され、上流の大川上遺跡では「神宮寺」と書かれた墨書土器が多数出土するなど、重要な遺跡が多く見られる地域でもあります。

琵琶垣内遺跡では、これまで3度の発掘調査が行われ、今回の発掘調査が4度目に調査になります。この報告書は、平成16年度道路改築事業（一）松阪環状線（豊原～上川）に伴い発掘調査を行った第4次調査の成果を報告したものに、第1次調査の成果を附したものです。これらの成果では、当地周辺の土地開発を示す溝が多数確認され、櫛田川左岸地域の歴史を考える上で、貴重な資料であると言えます。

今回の発掘調査の成果は、記録保存によるものです。遺跡は、現状保存が最も望ましい事ですが、我々が豊かに暮らすためには、開発は欠かせないものでもあり、そのために記録保存でしか残せない事はやむを得ない事であります。われわれに課せられた使命は、こうした成果をより多くの人々に有意義に公開し、後世の豊かな文化生活に貢献することにあると考えます。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、三重県県土整備部（三重県土木部）、松阪地方県民局建設部（松阪土木事務所）、櫛田上土地改良区など関係機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉水康夫

例　　言

1　本書は、三重県松阪市豊原町字琵琶垣内・山際・閑浄寺地内ほかに所在する、琵琶垣内遺跡の第４次発掘調査にかかる報告書である。なお、第１次調査の成果も合わせて掲載した。

2　第４次調査は、平成16年度一般地方道松坂環状線（豊原～上川）道路改良事業にに伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

3　発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。

＜平成16年度（発掘調査）＞

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ｉグループ）

技師　新名　強　　臨時技術補助員　豊田祥三

＜平成17年度（報告書作成）＞

三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ｉグループ、支援研究グループ）

主査　伊藤裕偉、技師　新名　強、主事　奥　義次・前野謙一、

臨時技術補助員　豊田祥三

4　調査にかかる諸費用は、三重県県土整備部が全額負担している。

5　発掘調査にあたっては、松阪市在住の皆様、松阪市教育委員会、および三重県県土整備部・松阪地方県民局事業推進室から多大な協力を受けたことを明記する。

6　本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、支援研究グループおよび調査研究Ｉグループが行った。報告文の執筆は新名・奥・伊藤が、遺物の写真撮影は豊田・伊藤が行った。本書の編集は伊藤が行った。

凡　　例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の 1/25,000地形図、松阪市都市計画図（1975 年・1993 年）である。

2　松阪市都市計画図は、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年４月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

3　発掘調査に関する座標は、測地成果2000に対応した新座標第Ⅵ系で表記している。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６゜36′、真北方位は西偏０゜17′34″（平成12年）である。

＜遺構類＞

4　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

5　土層図の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。

6　当報告書での遺構は、それぞれの遺跡単位で通番としている。

7　遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。

8　遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。

9　遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

ＳＢ‥‥掘立柱建物　ＳＤ‥‥溝、　ＳＦ‥‥カマド　ＳＨ‥‥竪穴住居　ＳＫ‥‥土坑

ＳＺ‥‥落ち込みなど　　pit‥‥ピット、柱穴

10　遺構は、調査時に付加した遺構番号を基本的に踏襲しているが、今回の報告にあたって変更したものもある。その異同は遺構一覧表に示した。なお、出土遺物の注記については、調査時の遺構名で基本的に実施している。

＜遺物類＞

11　当報告での遺物実測図類は実物の 1/4 を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。

12　遺物実測図は、第４次調査区と第１次調査区をそれぞれ別にまとめた。

13　当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。

14　遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号……挿図掲載番号である。

実測番号……実測段階の登録番号である。

様・質……「弥生土器」「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など……遺物の器種を示す。

グリット……調査時に設定したグリット名を記した。

遺構・層名……遺物の出土した遺構や層名を記した。「土器」、「石」などは、それぞれの取り上げ時の区分である。

法量(cm)……遺物の計測値を示す。(口）は口縁部径、(底）は底部径、(高台）は高台部径、(脚柱）は脚部上端径、(脚裾）は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴……主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土……小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調……その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度……その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12 は約半分、12/12 は全体が残っていることになる。

特記事項……遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

15　写真図版は、第４次調査区と第１次調査区をそれぞれ別にまとめた。

16　挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。

17　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続……新名…（1）
1　調査の契機
2　調査の経過と法的措置
3　発掘調査と記録の方法
4　整理作業とその方法

Ⅱ　御田川中下流域の歴史的諸環境……奥・伊藤…（4）
1　地形的環境
2　旧石器・縄文時代の遺跡概観
3　弥生時代の遺跡動向
4　古墳時代の遺跡動向
5　奈良・平安時代の遺跡動向
6　中世前期の状況

Ⅲ　第4次調査の成果……新名…（9）
1　地形及び基本層序
2　遺構
3　遺物
4　小結

Ⅳ　第1次調査の成果……伊藤・奥…(35)
1　第1次調査の経過
2　調査区の層位と遺構
3　出土遺物

Ⅴ　調査のまとめと検討……伊藤…(69)
1　時期別の遺跡変遷
2　古墳時代以前の大溝とその意義
3　古墳時代前期の土器類
4　墨書土器「下厨前」と古代の集落
5　琵琶垣内遺跡発掘調査の意義

挿　図　一　覧

第１図　遺跡位置図
第２図　琵琶垣内遺跡調査区位置図
第３図　第４次調査区位置図
第４図　第４次調査区遺構平面図（１）
第５図　第４次調査区遺構平面図（２）
第６図　第４次調査区遺構平面図（３）
第７図　第４次調査区（西部）下層遺構平面図
第８図　第４次調査区（東部）下層遺構平面図
第９図　第４次調査区周溝墓ＳＸ505平面・断面図
第10図　第４次調査区北壁土層図
第11図　第４次調査区掘立柱建物ＳＢ594平面・断面図
第12図　第４次調査区墓ＳＸ571平面・断面図
第13図　第４次調査区溝ＳＤ590・545・573・591土層図
第14図　第４次調査区出土遺物（１）
第15図　第４次調査区出土遺物（２）
第16図　第４次調査区出土遺物（３）
第17図　第４次調査区出土遺物（４）
第17図　第４次調査区出土遺物（５）
第19図　第１次調査区Ｇ１～３区平面・土層断面図
第20図　第１次調査区Ｇ４～10区全体図
第21図　第１次調査区遺構平面図（１）
第22図　第１次調査区遺構平面図（２）
第23図　第１次調査区遺構平面図（３）
第24図　第１次調査区遺構平面図（４）
第25図　第１次調査区遺構平面図（５）
第26図　第１次調査区遺構平面図（６）
第27図　第１次調査区遺構平面図（７）
第27図　第１次調査区遺構集中地点詳細図（１）
第29図　第１次調査区遺構集中地点詳細図（２）
第30図　第１次調査区遺構集中地点詳細図（３）
第31図　第１次調査区遺構集中地点詳細図（４）
第32図　第１次調査区大溝ＳＤ27・96土層図
第33図　第１次調査区出土遺物（１）縄文土器
第34図　第１次調査区出土遺物（２）
第35図　第１次調査区出土遺物（３）
第36図　第１次調査区出土遺物（４）
第37図　第１次調査区出土遺物（５）
第37図　第１次調査区出土遺物（６）
第39図　第１次調査区出土遺物（７）
第40図　第１次調査区出土遺物（７）
第41図　第１次調査区出土遺物（９）
第42図　第１次調査区出土遺物(10)

表　一　覧

第１表　第４次調査区遺構一覧（１）
第２表　第４次調査区遺構一覧（２）
第３表　第４次調査区出土遺物観察表（１）
第４表　第４次調査区出土遺物観察表（２）
第５表　第４次調査区出土遺物観察表（３）
第６表　第４次調査区出土遺物観察表（４）
第７表　第１次調査区遺構一覧（１）
第８表　第１次調査区遺構一覧（２）
第９表　第１次調査区掘立柱建物・柱列一覧
第10表　第１次調査区出土遺物観察表（１）
第11表　第１次調査区出土遺物観察表（２）
第12表　第１次調査区出土遺物観察表（３）
第13表　第１次調査区出土遺物観察表（４）
第14表　第１次調査区出土遺物観察表（５）
第15表　第１次調査区出土遺物観察表（６）
第16表　第１次調査区出土遺物観察表（７）

写　真　図　版　一　覧

写真図版１　第４次調査区　遺構（１）
写真図版２　第４次調査区　遺構（２）
写真図版３　第４次調査区　遺構（３）
写真図版４　第４次調査区　遺構（４）
写真図版５　第４次調査区　遺構（５）
写真図版６　第４次調査区　遺構（６）
写真図版７　第４次調査区　遺構（７）
写真図版８　第４次調査区　遺物（１）
写真図版９　第４次調査区　遺物（２）
写真図版10　第４次調査区　遺物（３）
写真図版11　第１次調査区　遺構（１）
写真図版12　第１次調査区　遺構（２）
写真図版13　第１次調査区　遺構（３）
写真図版14　第１次調査区　遺構（４）
写真図版15　第１次調査区　遺構（５）
写真図版16　第１次調査区　遺構（６）
写真図版17　第１次調査区　遺物（１）
写真図版17　第１次調査区　遺物（２）
写真図版19　第１次調査区　遺物（３）
写真図版20　第１次調査区　遺物（４）
写真図版21　第１次調査区　遺物（５）
写真図版22　第１次調査区　遺物（６）

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続

1　調査の契機

a　開発工事と記録保存された遺跡

ここで報告する第4次調査の記録は、平成16年度道路改築事業（一）松阪環状線（豊原～上川）に伴って実施したものである。当該道路は、旧参宮街道の交通量増加に伴い、この道路の南側に並行して建設されるものである。また、第1次調査の記録は、昭和62年県道御麻薗・豊原線改良事業に伴って実施したものである。第1次調査の記録については、第4次調査区に隣接しており、第4次調査の成果を正確に把握するためには不可欠な成果であるので、ここに併せて記載することとした。当該道路は、松阪市豊原町と同市御麻薗町を結ぶ道路である。

今回調査を行った豊原町は、行政管区としては三重県松阪市豊原町である。豊原町の東側は櫛田川によって限られており、御麻薗町は櫛田川の上流にあたる。県道御麻薗・豊原線は、豊原町を貫く主要幹線の県道鳥羽松阪線（旧国道42号線）と国道42号線を結ぶ重要な幹線である。また、県道松阪環状線（豊原～上川）は、旧参宮街道の交通量増加に伴い、建設されるもので、先述の県道御麻薗・豊原線と国道松阪・多気バイパスを結ぶものである。

ともに、両線は主要幹線を結ぶ重要な道路であり、交通渋滞の緩和等の効果が期待される。特に、現在使用されている旧参宮街道は、道幅が狭い上に、松阪市街地への短縮路とあって、交通量は多い。更に豊原町地内には松阪商業高校が所在していることから、松阪環状線の建設は、通学の安全確保という意味でも必要なものである。

b　範囲確認調査について

第4次調査の調査範囲については、三重県埋蔵文化財センターが実施した平成12年度に行われた県営ほ場整備に伴う範囲確認調査において、調査区の東半部に遺跡が存在する事が判明していた。また、調査区の西半部については、隣接地において松阪市教育委員会が実施した範囲確認調査において、遺跡の存在が明らかとなっており、当該調査区について遺跡が存在するものと判断した。また、第1次調査区については、昭和62年度に三重県埋蔵文化財センターが範囲確認調査を実施し、遺跡の存在が明らかとなった。本調査により記録保存措置が必要と判断された部分は、ここで報告する琵琶垣内遺跡のみである。ただし、琵琶垣内遺跡の第1次調査区は、当初開浄寺遺跡として発掘調査を行っていたものであるが、調査後、琵琶垣内遺跡と一連のものであると考えられることから、現在では琵琶垣内遺跡（第1次）としている。ここでは、当該事業にかかる範囲確認調査の結果を記す。

琵琶垣内遺跡は、櫛田川左岸の河岸段丘上に広がる遺跡である。南は県道鳥羽松阪線を境に、北は安楽町付近まで、西は天王山丘陵裾部まで広がるものと考えられる。今回報告する第4次調査区および第1次調査区は、琵琶垣内遺跡の南部にあたる。

琵琶垣内遺跡の範囲確認調査は、これまでに3度行われている。1度目は、第1次調査に伴い昭和60年に実施された範囲確認調査（試掘調査）で、琵琶垣内遺跡の南部4,800㎡に遺跡が存在することが判明した。2回目の範囲確認調査は、県営ほ場整備に伴い平成8年に実施された範囲確認調査で、琵琶垣内遺跡の中央部8,900㎡に遺跡が存在することが判明した。3度目は、県営ほ場整備に伴い平成12年度に実施された範囲確認調査で、県道御麻薗・豊原線西側の水田一帯を対象に行われたもので、36,000㎡について遺跡が存在することが判明した。

c　琵琶垣内遺跡発掘調査にむけての協議

第4次調査については、平成13年度に実施した範囲確認調査成果をもとに、当事業の主体者である三重県県土整備部・三重県松阪県民局建設部と当センターとで協議を行った。その結果、事業地内の内、道路建設によって改変を受ける2,317㎡（下層1,368㎡を含む、累計3,757㎡）については、現状保存が困難であることから、平成16年度に本発掘調査を実施し、記録保存することで合意した。

また、第1次調査については、昭和60年に実施した範囲確認調査成果をもとに、当事業の主体者であ

る三重県土木部・松阪土木事務所と三重県教育委員会文化課で協議を行った。その結果、事業地内の内、道路建設によって改変を受ける3,800㎡については、現状保存が困難であることから、昭和62年度に本発掘調査を実施し、記録保存することで合意した。

2　調査の経過と法的措置

a　発掘調査の経過

琵琶垣内遺跡は、これまでに１～３次の発掘調査が実施されている。第１次調査は、三重県教育委員会が、第２・３次調査は三重県埋蔵文化財センターが調査を実施している。今回の調査は、琵琶垣内遺跡としては４回目の調査にあたるので、「琵琶垣内遺跡（第４次）」として実施した。また、第１次調査については、先述の通り、「開淨寺遺跡」として発掘調査したものであるが、今後は「琵琶垣内遺跡（第１次）」として扱うものとする。

発掘調査を実施したのは、第４次調査が平成16年５月から９月にかけてである。６月７日に、現地の表土掘削を行い、順次グリッド設定を行った。発掘調査は６月24日から開始し、９月17日には調査を終了し、９月22日には全ての業務を完了した。なお、現地調査に関しては、㈱安西工業と発掘調査業務委託契約を交わし、現地調査にかかる発掘作業員や機材類の調達、土工管理、現地の国土座標測量、発掘調査記録業務などを実施した。

一方、第１次調査については、昭和62年５月７日から同年９月26日にかけて発掘調査を行い、調査は三重県教育委員会が、県土木部を通じて発掘作業員を募集し、直営で調査を行っている。

なお、遺物の洗浄・注記・接合といった出土品の１次処理、遺構図面類・記録写真類の整理などの業務については、第４次調査で平成17年度に、第１次調査については、昭和63年度に行っている。

b　発掘調査の普及・公開

当該発掘調査にかかる普及・公開事業としては、第４次調査については、調査概要を発掘調査作業員および地元住民に対して配布した。また、第１次調査においては、発掘調査の進捗にあわせて発掘調査ニュースを随時作成し、地元住民に配布した。さらに昭和62年９月に現地説明会を実施し、現地遺跡および出土遺物を広く一般に公開している。

c　文化財保護法等にかかる諸通知

第４次調査にかかる文化財保護法（以下、法）の諸通知は、以下により文化庁長官宛に行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官宛）
　平成16年４月12日付け松建第152号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官宛）
　平成16年５月13日教委第12-2-18号（県教育長報告）
・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（松阪警察署長宛）
　平成17年１月19日教委第12-4-26号（県教育長通知）

3　発掘調査と記録の方法

a　掘削の方法

範囲確認調査では、地表下約70㎝付近で黒褐色土を確認し、この層の上面で遺構を確認している。発掘調査ではその知見に従い、基本的に地表下約60㎝までを重機掘削し、その後は人力による掘削としたが、それより上位で黒褐色土を確認した場合は、随時重機掘削を停止し、人力掘削に切り替えている。

重機掘削面から約５～10㎝削り込んだところを遺構検出面として精査した。なお、第４次調査では、部分的に２層の遺構面が認められた。また遺構の重複が激しい部分については、最初に検出した遺構を上層遺構、別の遺構の底面より確認した遺構を下層遺構として扱っている。

b　地区設定

琵琶垣内遺跡では、調査が複数年にわたっているため、調査区も多岐に及んでいる。第４次調査では、第３次調査の地区名を引き継いで大地区名を付与した。第３次調査は、６地区に分かれて調査が行われていることから、大地区名を便宜的にＡ～Ｆ地区と付け、これに続く第４次調査は、大地区名をＧ地区とした。また、各地区内の小地区については、４ｍ四方のグリッドを設定し、西→東方向に数字を、北→南方向にアルファベットを付与している。

一方第１次調査については、大地区名を設定していないが、県道鳥羽松阪線から旧参宮街道の間を３分割してＧ１～Ｇ３地区、旧参宮街道から薗陽集落

までの間を7分割してＧ４～Ｇ10の小地区を設定している。

また、遺構番号については、すべて通番で付与している。さらに報告書作成段階で、第１次調査から第４次調査まで遺構番号が重複しないように、第４次調査は501から、第１次調査は21～150の間の遺構番号を改めて付与した。

c　出土遺物の回収

出土遺物は、出土年月日と層位・遺構の区別を行い、小地区単位で取り上げている。それぞれの遺物には専用のラベルを現地で入れたうえで、洗浄などの作業を行う当センターもしくは整理所へ搬送した。

d　遺構図面

遺構検出段階で、1/40の略測図を作成している。これは「遺構カード」として用いるものであり、遺構毎の出土遺物や埋土の状況を記録している。遺構カードはグリッド単位で作成している。

1/40の略測図をもとに、さらに1/100の遺構配置図を作成している。これは、調査区全体の遺構配置を早い時期に認識する必要があると考えるためである。

発掘調査終了後に、正確な全体図作成を作成した。調査区の平面図は1/20で手書き実測した。なお、第１次調査では、航空写真測量で平面実測行っている。

また、個々の遺構で、遺物出土状況などが重要と判断したものについては、1/10の個別実測図を作成した。土層図は1/20で作成した。

e　遺構写真

遺構関連の写真は、重要なものについて第４次調査では４×５版で、第１次調査では６×７版（ブローニ）撮影し、細かな記録には３５㎜版を撮影した。それぞれのフィルムは、白黒とスライドを同時に作成している。

4　整理作業とその方法

a　遺物類の整理

発掘調査現地から当センターおよび整理所へ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

第４次調査では、発掘調査を実施した平成16年から17年度にかけて、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測作業等を行った。第１次調査については昭和63年度に上記の作業を行ったが、平成17年度にも、一部再整理を行っている。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ１枚づつラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

出土遺物は、整理の結果、報告書掲載分および参考資料としての手元保管分（Ａ遺物）、報告書未掲載分（Ｂ遺物）として区別して保管している。後者については、当センターが占有する収蔵庫で保管し、前者は当センター内の収蔵スペースで保管している。

b　図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、平成17年度に報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を６×９版（ブローニー）で撮影した。遺物写真の撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。実測図の作成は平成16度に、遺物写真撮影と図版作成、および遺物の収蔵については平成17年度に実施した。

c　記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。

（新名）

Ⅱ　櫛田川中下流域の歴史的諸環境

1　地理的環境

琵琶垣内遺跡は、松阪市東部の櫛田川西岸部にあたる。ここは、櫛田川下流の広大な氾濫平野の起点となる位置で、標高はおよそ10mである。

遺跡の付近は、大きく見れば櫛田川が形成した氾濫平野面に相当する。中下流域の櫛田川氾濫平野は、西側（琵琶垣内遺跡側）と東側とでは少し様相が異なる。東側では、櫛田川のかつての本流とされる蔵川東岸に「明和台地」と呼ばれる段丘中位面が見られ、琵琶垣内遺跡付近よりも２kmほど下流部まで続いている。古代の官営施設である斎宮跡も、安定したこの台地を利用して形成されている。

それに対し西側、すなわち琵琶垣内遺跡付近では、明和台地のような明確な台地・段丘が見られず、琵琶垣内遺跡付近を起点に広大な氾濫平野が形成されている。古代後半期には湿源を持つと考えられる条里型地割も、この沖積地を中心に展開している。

このため、櫛田川下流部西岸地域のなかで、恒常的に安定した場所は、琵琶垣内遺跡付近にほぼ限定されると見てよい。当地の遺跡展開は、このような地形的環境をも含めた評価が必要である。　（伊藤）

2　旧石器・縄文時代の遺跡概観

第１次・３次調査で若干の縄文時代遺物が認められた。この機会に櫛田川下流域、とりわけ沖積地を中心にした、この時代の遺跡分布を一瞥しておきたい。まず、この地域の旧石器・縄文土器出土遺跡の立地を地形区分から大別すると、

A櫛田川本流と分流の蔵川との河川間およびその両岸に展開する沖積地の自然堤防や微高地に立地するもの

B櫛田川左岸と蔵川右岸の台地および丘陵上とその縁辺に立地するもの

に分けられる。このうちAの地域では、従来は不明であったが、近年の調査の進展によって，やっと本遺跡を含め、６遺跡を数えるようになった。この内訳は櫛田川左岸の３遺跡（山添・琵琶垣内・瀬干）、櫛田川と蔵川の河川間の２遺跡（中ノ坊・古曽通りB）、蔵川右岸の１遺跡（神殿）をさす。これらを個別に見ていくと、山添遺跡では前期・北白川下層Ⅱｃ式主体の豊富な資料があり，竪穴住居は同期の３棟、中期１棟が確認され、県内の数少ない前期遺跡の調査事例に新たな成果を加えた[1]。櫛田川・宮川・雲出川水系など、この時期の代表的な遺跡は川にへばりつくような傾向があるので、おそらく河流を間近にした立地環境で居住域を形成していたものと考えられる。

これに対し、瀬干遺跡出土の馬見塚式[2]は本遺跡同様、隣近の未知の遺跡からの二次堆積による可能性が高い。中ノ坊遺跡では後期中葉ごろの土器微量と未報告資料の中に楔形石器（サヌカイト製）や剥片（チャート製）などがある[3]。古曽通りB遺跡では晩期末・氷１式相当の浮線文土器と馬見塚式土器がわずかに出土[4]、神殿遺跡では微量の馬見塚式土器がみられる[5]。この３遺跡とも縄文時代の遺構は認められないが，遅くとも後期中葉には櫛田川・蔵川の両河川間に進出し、活動の痕跡を残したことがうかがえる。要するに、A地域はB地域の遺跡分布に比べ，縄文時代後晩期頃までは、まだ安定した生活空間にはなりえていなかったようで、このような状況は当地域に限らず、海岸線を控えた伊勢湾西岸・沖積地一般の占地傾向として共通性がある。その卑近な例が、松阪市街地東方、近鉄線以北の平地の場合、前述の瀬干遺跡以外に縄文遺物は何ら確認されていないという現状である。

次に、Bの地域に目を向けよう。櫛田川頭首工より下流左岸では流域に東面するような遺跡はまだ知られておらず、本遺跡の西方約600m、天王山丘陵西斜面に晩期末・馬見塚式期を中心とした土器棺墓６基・土壙墓14基の中谷遺跡や、早期・大川式、神宮寺式土器片出土の丸野遺跡位しか、判っていない[6]。これと対照的なのが蔵川右岸側で、旧石器時代以降、概ね各時期の遺跡が認められる。まず、旧石器ではナイフ形石器が比較的まとまったコドノA遺跡[7]があり、断片的出土の遺跡は他にもある。縄文草創期で

は神子柴系石器群を組成とするコドノB遺跡や東谷C遺跡[9]をはじめ、斎宮跡などで単独出土の有舌・木葉形尖頭器の遊離資料もセトルメントの違いを示すものとして見逃すことができない。なお、東谷C遺跡では当地域では珍しく有樋尖頭器1点が混じっている。[20]早期では神宮寺式期の集石炉2基検出のコドノB遺跡[21]があげられる。もっとも少し上へ行けば、多気町相可付近までの間に、坂倉・鴻ノ木・射原垣内・鍾突・牟山など良好な遺跡が目押しに並び、前半期押型文文化期における一連の遺跡群が形成されている。[22]

ところがそれ以降、前期を通じてめぼしい遺跡は分かっていない。対岸の山添遺跡のような下流域・微高地進出の例は県内初見である。中期も前半は稀にしか見られず、末葉頃に資料がやや増加する。斎宮池[23]・金剛坂遺跡[24]などがそれである。後期は初頭頃は乏しく、金剛坂遺跡に前葉頃の資料が比較的まとまっている。晩期は前半が欠落し、末葉の突帯文段階になってコドノA・西出遺跡[25]などに比較的良好な資料が認められるものの、大抵の遺跡では断片的にしか分かっておらず、小遺跡が著しく拡散した様相が特徴的である。[26]

なお、特殊な遺物として土器・土製品には金剛坂遺跡の環状壺形土器や西出遺跡の人面土版があり、石製品には城山遺跡に北陸特有の鍔をもつ大型石槍[27]、神殿遺跡には独鈷状石製品がある。[28]石製品の厳密な所属時期は不明であるが、前者はおよそ中期、後者は晩期後半頃と推定される。これらは、いずれも蔵川右岸側に偏在している。（奥）

3　弥生時代の遺跡動向

弥生時代になると、低地部での顕著な遺跡展開が見られる。櫛田川西岸部では、琵琶垣内遺跡の北西約2㎞に位置する村竹コノ遺跡で前期中葉頃の土器が出土しており、遺跡の形成が開始される。[29]村竹コノ遺跡は後期に最盛期を迎える大規模環濠集落であるが、おそらく前期から後期まで継続的に集落が営まれた場であろう。他にも、中後期を中心とする湧早崎遺跡や、後期の堀町遺跡[30]・草山遺跡[31]・天王山遺跡[32]など、琵琶垣内遺跡周辺では盛んな集落形成が見られる。後期後半頃になると、琵琶垣内遺跡でも人の活動が観察されるようになっている。

櫛田川東岸部では、琵琶垣内遺跡の南東約3㎞にある金剛坂遺跡で前期前葉頃から集落の形成がはじまる。その後、金剛坂遺跡をはじめ、斎宮跡古里地区（古里遺跡）[33]や馬渡遺跡・佐田西出遺跡など、重要な集落遺跡の形成が認められる。

4　古墳時代の遺跡動向

弥生時代後期の集落形成は、古墳時代前期頃で大きな画期を迎える。村竹コノ遺跡の終焉に象徴されるように、この時期に途絶する集落が多い。この時期は、琵琶垣内遺跡の中心時期のひとつである。また、櫛田川下流域にあたる瀬干遺跡ではこの時期の墳墓群が検出されている。

前期後葉以降は、櫛田川東岸の古曽浦Ｂ遺跡に精緻な井戸が見られるものの、他にはあまり目立ったものが無い。5・6世紀の須恵器を伴う集落も、琵琶垣内遺跡や天王山遺跡以外は明確ではない。

古墳では、琵琶垣内遺跡の西隣に5世紀後半から6世紀前葉頃の天王山古墳群が形成される。天王山1号墳では蛇行剣が副葬されており、やや特殊な被葬者であることを示唆する。また、6世紀後葉頃に、琵琶垣内遺跡の南方約1㎞にある山添2号墳には馬具類や捻り環頭太刀と思われる遺物がある。[34]断片的ではあるが、小規模古墳に特殊な遺物が副葬されているという点に、この地域の特徴があるように思われる。

5　奈良・平安時代の状況

律令制の施行に伴い、当地は伊勢国飯野郡として把握される。平安時代中後期に編纂された『和名類従抄』によると、飯野郡には、乳熊・兄國・黒田・長田・漕代・神戸の6郷が記載されている。[35]ただし、隣接する多気郡に櫛田郷の記載があり、誤記と考えられることから、飯野郡は櫛田郷を含めた都合7郷と考えられる。琵琶垣内遺跡付近は櫛田郷と考えるのが自然である。

飯野郡内における奈良・平安時代のまとまった遺跡には、堀町遺跡と今回報告する琵琶垣内遺跡がある。また、甘子遺跡では、湿地状の土層中から7～8世紀頃の刀形木製品や完形の土器が出土しており、[36]

何らかの祭祀遺跡と考えられる。この他には、東隣にあたる豊原西町遺跡で奈良時代の土器が出土している[27]ことが確認されるのみである。この他に、奈良時代後期から平安時代前期頃の寺院として、柳田地内には大雷寺廃寺があったとされている。平安時代中期頃の神宮寺の存在を示唆する墨書土器「神宮寺」が多量に出土した大川上遺跡[28]は、琵琶垣内遺跡の上流約２kmにある。また、多気郡境付近には大安寺に施入された中村野が存在し、王権との関係が指摘されている。[29]

飯野郡の古代を考える上で重要なのが、古代伊勢道、飯野郡条里、そして斎宮跡である。古代伊勢道は、飯野郡条里型地割と同じＥ15°Ｓを軸線とする官道で、斎宮跡地内では側溝を有する幅約９ｍの直線道として確認されている。[30] 飯野郡内の古代伊勢道推定位置は足利健亮氏が示しており、[31] 近世伊勢参宮街道とほぼ同じ位置と考えられている。この官道は琵琶垣内遺跡地内も通過しており、当地の集落形成を考えるうえで極めて重要な存在である。

斎宮跡は、琵琶垣内遺跡の東方約３kmにある。後述のように、琵琶垣内遺跡の出土土器は斎宮跡出土土器の傾向と極めて類似している。斎宮跡を、飯野郡から相対化して考察することも必要である。

6　中世前期の状況

王朝国家期を含む平安時代後期から鎌倉時代にかけて、飯野郡内でもいくつかの荘園が形成される。残された同時代史料は少ないが、後世に認められた記録類を見ると、この時期に神宮領御厨・御園が数多く形成されたものと考えられる。柳田郷地内の御厨・御園には柳田河原御厨があり、[32] 当遺跡近隣に存在していたと推測できる。この時期の遺跡は各地で断片的に見られるが、まとまったものとしては斎宮跡地内に形成された集落遺跡がある。[33]　　（伊藤）

＜註＞

（１）三重県埋蔵文化財センター『山添遺跡（第３次）発掘調査報告』（2002年）、小濱学「山添遺跡の石器」（『縄文時代の石器Ⅱ-関西の縄文前期・中期』（関西縄文文化研究会　2003年）

（２）三重県埋蔵文化財センター『瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告』（2000年）。ただし、中期とされた17の土器については弥生土器の可能性がある。

（３）三重県埋蔵文化財センター『中の坊遺跡』（1997年）

（４）三重県埋蔵文化財センター『古曽浦Ｂ遺跡・古曽浦り古墳群発掘調査報告』（2000年）

（５）昭和60年度三重県教育委員会調査。

（６）三重県埋蔵文化財センター『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』（2003年）

（７）ａ．三重県埋蔵文化財センター『コドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡（第１次）発掘調査報告』（1998年）、ｂ．森田幸伸「旧石器・縄文時代」（『明和町史』史料編　第１巻　自然・考古（明和町　2004年）

（８）三重県埋蔵文化財センター『コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告』（2000年）

（９）奥義次「河田古墳群Ｃ支群（東谷Ｃ遺跡）出土の先土器・縄文時代遺物」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会　1986年）

（10）奥義次・織笠明「東への視点と西への視点－三重県東谷Ｃ遺跡の男女貫型矢頭器から」（『長野県考古学学会誌』59・60号　1990年）

（11）註（７）ａに同じ

（12）三重県埋蔵文化財センター『大鼻遺跡』（1994年）の考察の中で触れられている。

（13）三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第２期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』（2000年）

（14）明和町教育委員会『金剛坂遺跡発掘調査報告』（1971年）

（15）三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』９　昭和53年度（1979年）。人面土版は三重の考古遺物編集委員会『図録　三重の考古遺物』（1981年）に写真が掲載されている。

（16）奥義次「三重県における凸帯文土器出土遺跡の分布相」（『Miehistory』vol.１三重歴史文化研究会　1990年）。その後、遺跡数はほぼ倍増し、県下各地で良好な土器棺墓群が検出された。しかし、当時指摘した基本的な傾向はあまり変わっていない。

（17）皇學館大学考古学研究会『明和町の遺跡』（1987年）。三叉文は刻まれていないようである。完形品でないので確かなことは言えないが、御物石器の側面観や作出法に似た部分も見受けられ、もしそうであるならば晩期に属する可能性もある。

（18）奥義次「三重県神殿遺跡出土の独全古状石製品について」（『研究紀要』第15－１号、三重県埋蔵文化財センター　2006年）

（19）平成17年度三重県埋蔵文化財センター発掘調査成果による。

（20）三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡』（2000年）

（21）松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査報告』（1986年）

（22）三重県埋蔵文化財センター『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』（2006年）

（23）柴山圭子「斎宮の弥生時代」（『斎宮歴史博物館研究紀要』15　2005年）

（24）松阪市教育委員会『山添２号墳発掘調査報告書』（1998年）

（25）京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成和名類従抄』（1966年）

（26）三重県埋蔵文化財センター『山ノ花・廿千・北上遺跡』（1996年）

（27）三重県埋蔵文化財センター『豊原西町遺跡発掘調査報告』（2006年）

（28）三重県埋蔵文化財センター『大川上遺跡発掘調査報告』（1998年）

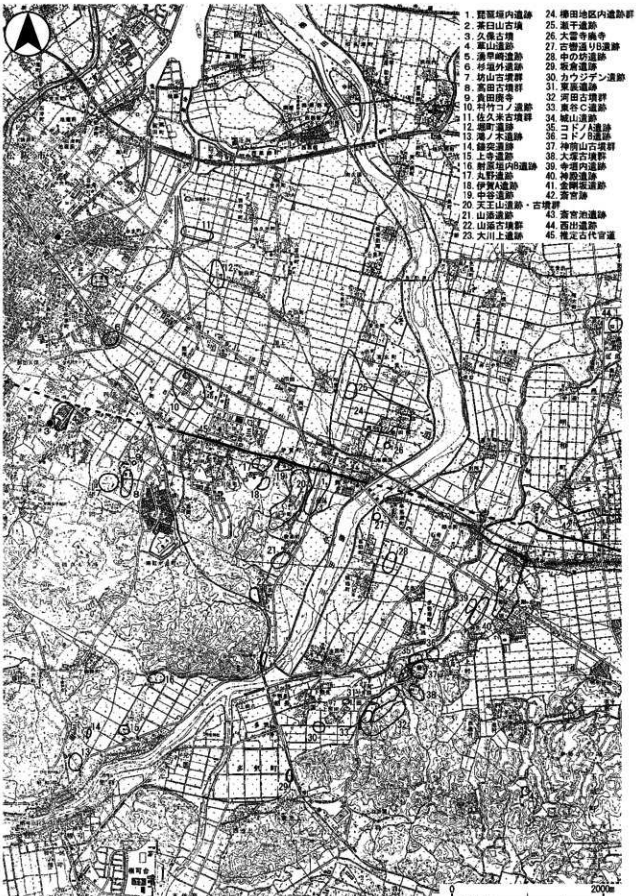
（29）山中章「伊勢国飯野郡中村野大安寺領と東寺大国庄」（『三重大史学』第２号　2002年）

（30）伊藤裕偉「斎宮跡・伊勢道・条里」（『斎宮歴史博物館研究紀要』14　2004年）

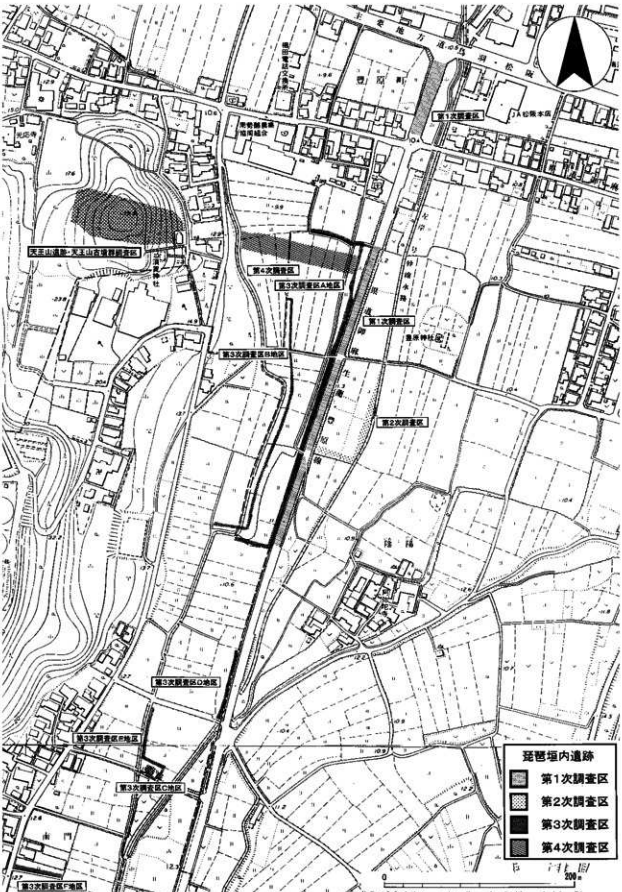
（31）足利健亮『日本古代地理研究～畿内とその周辺における土地形画の復元と考察～』（大明堂1985年）

（32）『神風鈔』（（『群書類従』第一輯）

（33）伊藤裕偉「中世の斎宮」（『明和町史』斎宮編（明和町　2005年）



第１図　遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院「松阪」「国東山」1：25,000による〕



第2図　琵琶塚内遺跡調査区位置図（1：4,000）

Ⅲ　第４次調査の成果

１　地形及び基本層序

琵琶垣内遺跡は、櫛田川左岸の低位段丘上に立地する。今回の調査区は、琵琶垣内遺跡の北西部に位置し、西側背後には天王山遺跡・天王山古墳群が所在する丘陵が控える。ここでは、弥生時代後期の集落跡や古墳時代中期から後期の古墳、飛鳥から奈良時代前期の集落跡が確認されている。

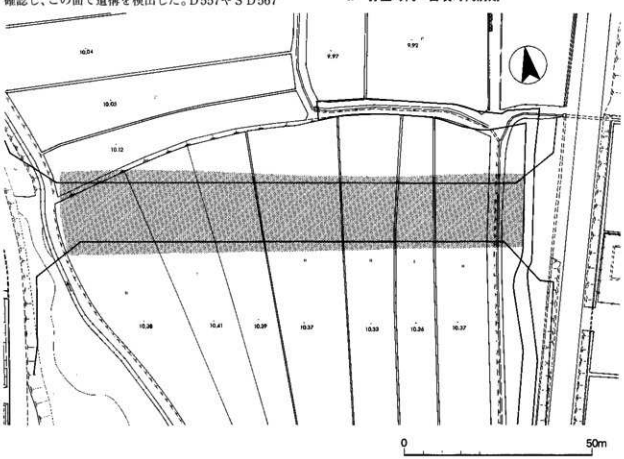
今回の調査は、天王山遺跡のある丘陵の裾から櫛田川に向けての水田部分のうち、道路建設によって改変されることになった累計3,757㎡（平面2,317㎡・下層1,440㎡）に対して調査を行った。

基本層序について、調査区西端部では近現代の盛土が他の地点に比べて30～50cm程度厚く行われており、盛土以前に削平を受けた痕跡が見られる。盛土下では黒褐色シルトの包含層が堆積し、その下で基盤層となる黒色シルト層（いわゆる「黒ボク層」）を確認し、この面で遺構を検出した。Ｄ557やＳＤ567など西側の溝群以東では、近現代の削平が激しく行われておらず、表土下に中世以降と考えられる灰色や暗灰黄色シルト層が堆積しており、その下で砂の混じる黒褐色シルト層や黒オリーブ層を確認し、この下で黒ボク層を確認している。今回の調査では、砂混じり黒褐色層の上面で確認された遺構を上層遺構、黒ボク層上面で確認した遺構を下層遺構とし、溝の底面において確認した遺構についても、下層遺構としている。

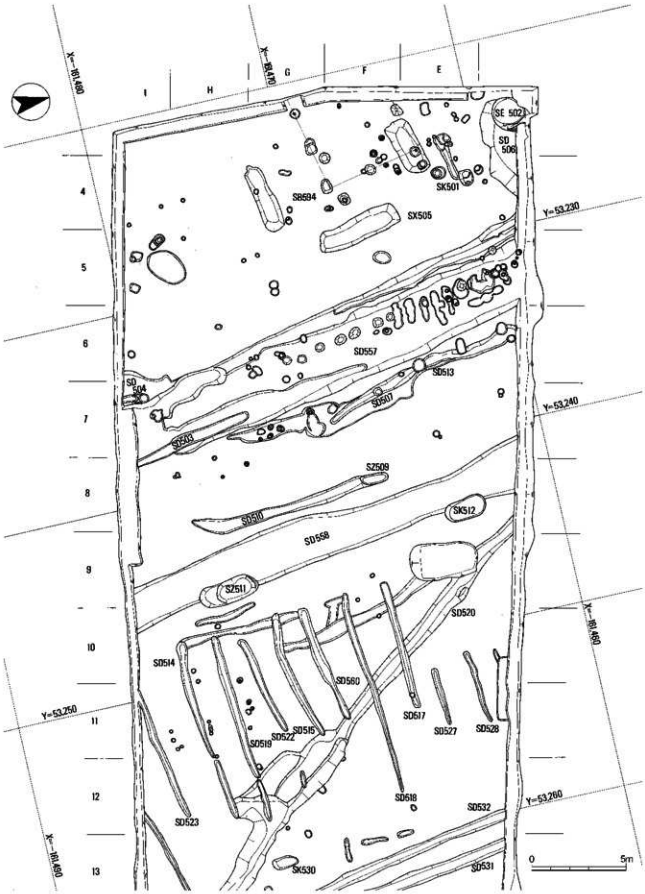
２　遺構

今回の調査では、弥生時代から中世前期の遺構を確認している。遺構の大半は溝であり、これらは概ね南側から北側に向かって流れている。ここでは遺構を４期にわけて、主要な遺構について述べる。その他の遺構については、遺構一覧表（第１・２表）を参照されたい。

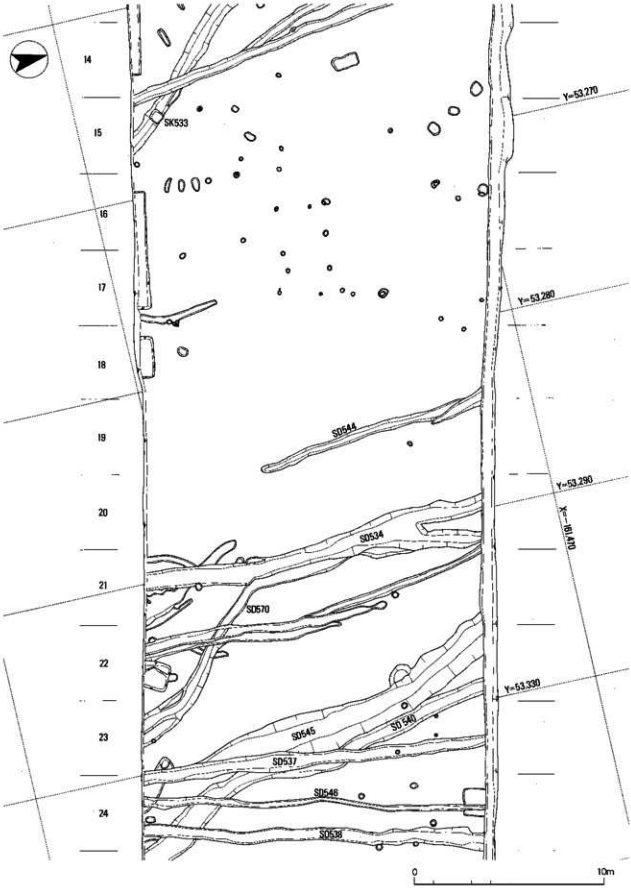
a　弥生時代～古墳時代前期



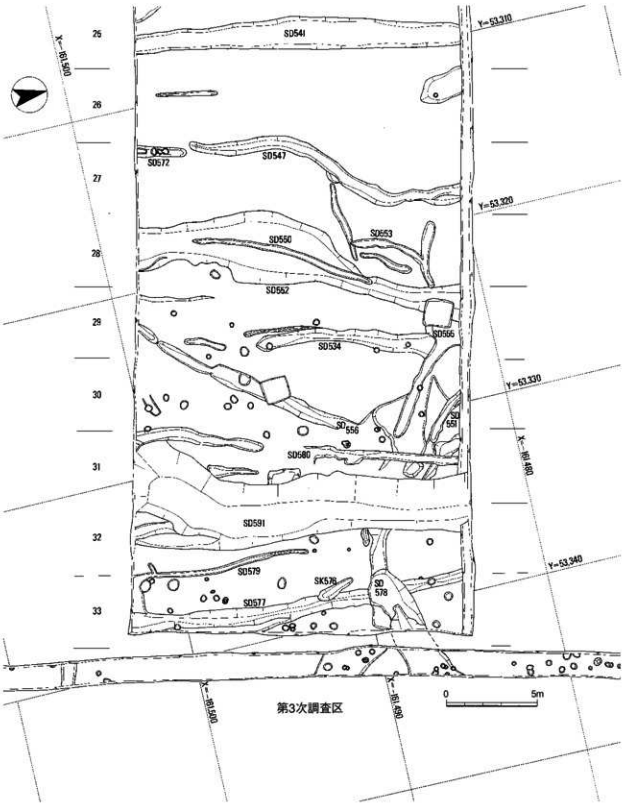
第3図　第４次調査区位置図（1：4,000）



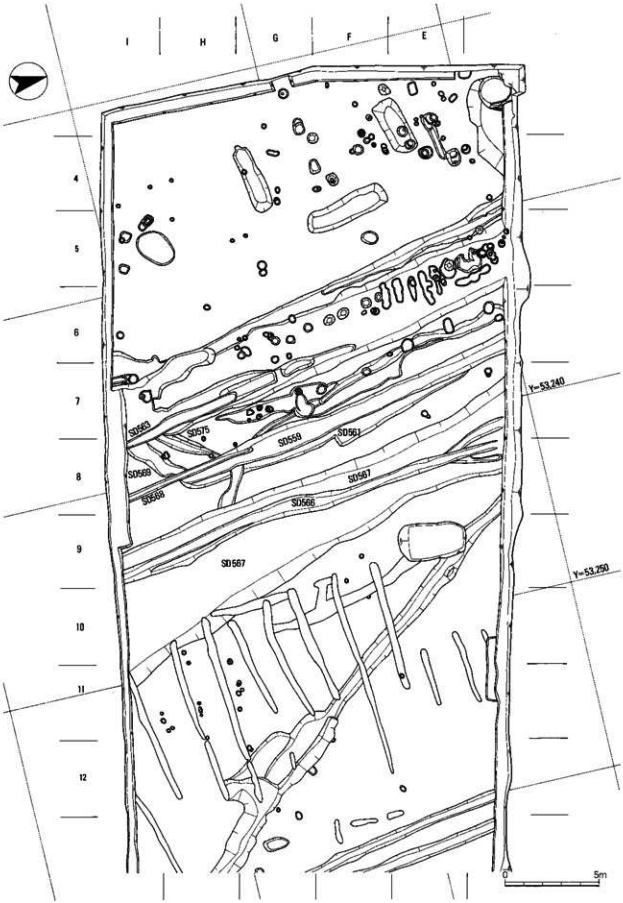
第４図　第４次調査区遺構平面図（1）（1：200）



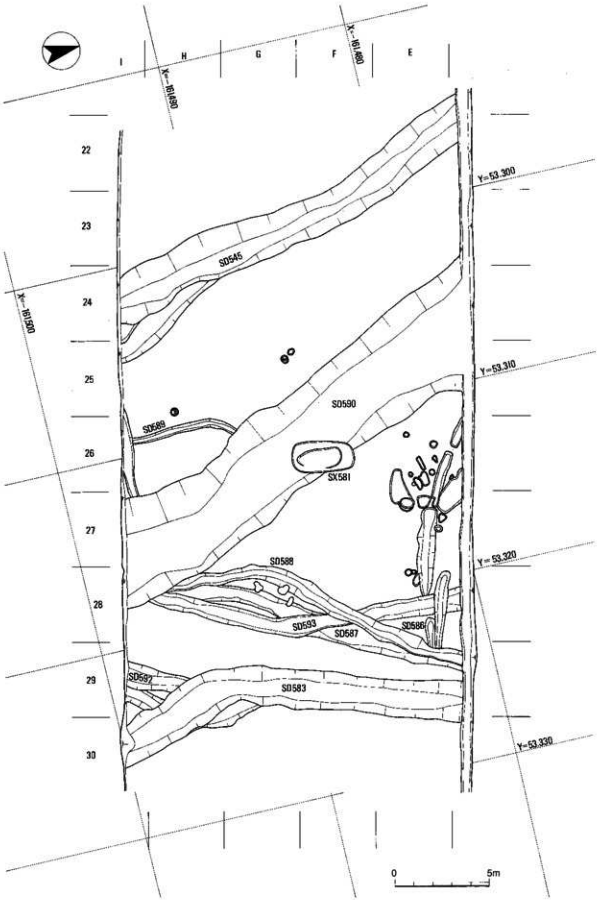
第５図　第４次調査区遺構平面図（２）（１：200）



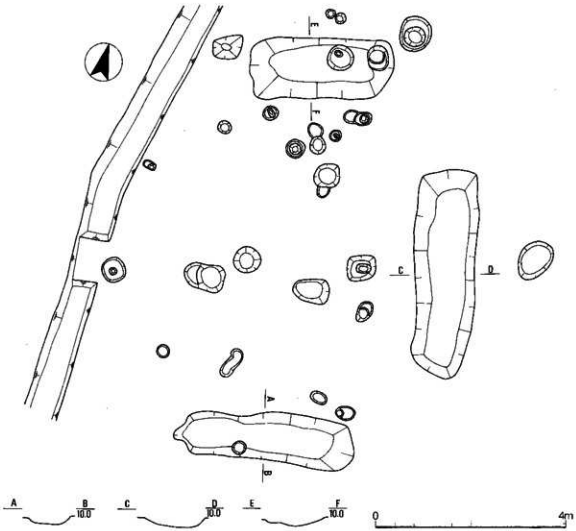
第６図　第４次調査区遺構平面図（３）（１：２００）



第７図　第４次調査区（西部）下層遺構平面図（１：200）



第８図　第４次調査区（東部）下層遺構平面図（１：200）



第9図　第４次調査区周溝墓ＳＸ505平面図・断面図（１：80）

周溝墓・土坑・溝が確認されている。出土遺物からみても、この時期の遺物は少ない。

周溝墓ＳＸ505　調査区西端に位置し、長さ3～4.5ｍ・幅１～1.3ｍの３つの溝で構成される。深さはいずれも0.2ｍ。形状から方形周溝墓と考えられる。西側の溝は調査区外に存在するか、当初より無かった可能性も考えられる。溝間の距離は、南北で内側6.7ｍ、外側９ｍ。弥生土器の小片が出土しているが、詳しい時期は決定できない。

土坑ＳＫ506　調査区北西隅に位置する土坑で、深さ６ｍ。北半部は調査区外に展開する。ＳＸ505と同じく黒色の埋土で、弥生土器片が出土している。

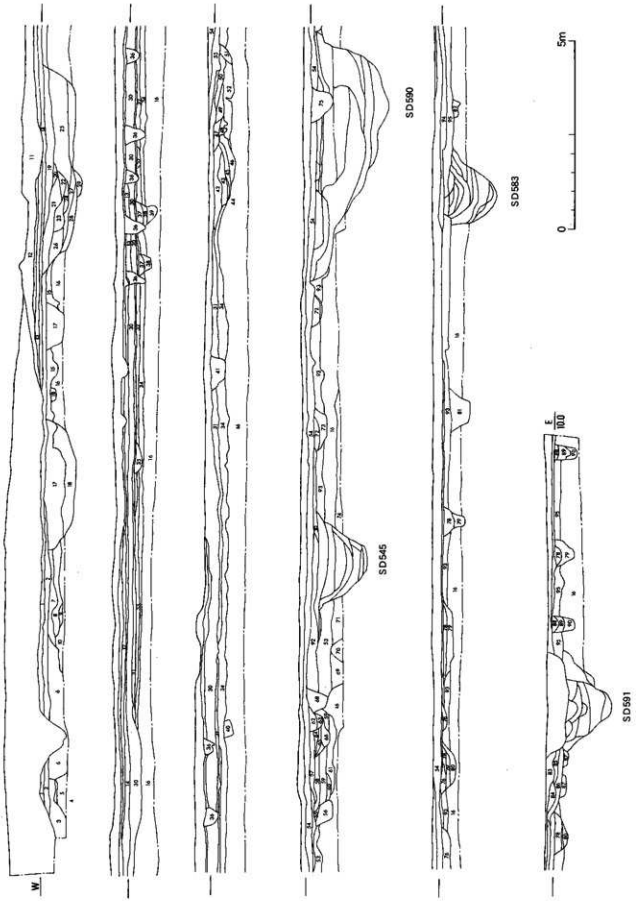
溝ＳＤ520　調査区中央部を南北に流れる溝で、幅1.2ｍ・深さ0.3ｍ。埋土から高杯(18)が出土していることや、他の溝と方向を異にしていることから弥生時代後期の溝と考えられるが、僅かに志摩式製塩土器片が上層で確認されており、奈良時代に下る可能性も考えられる。

溝ＳＤ567　下層で確認した溝で、ＳＤ558・ＳＤ566に切られる。幅は２～７ｍと安定しない。深さ１ｍ。土師器高杯（１～３）や甕（４・５）が出土しており、古墳時代前期初頭に埋没したものと考えられる。

溝ＳＤ590下層　調査区東半を南北に流れる大きな溝で、幅4.4ｍ・深さは1.8ｍ。断面は、東側の傾斜が険しく西側が緩いことから、水流は東寄りに流れていたものと考えられる。上層は後世に掘り直されている。下層の出土遺物は極めて少ないが、土師器壺（６）が出土しており、古墳時代前期に埋没したものと考えられる。

b　奈良時代

掘立柱建物や土坑、溝が確認されている。溝は調



第10図　第４次調査区北壁土層図（１：100）

査区全体にわたって多数錯綜しており、奈良時代中期の遺構が主体を占めている。

掘立柱建物ＳＢ594　桁行２間(4.4m)以上・梁行２間(5m)の掘立柱建物で、方位はＥ－12°－Ｎである。西半は調査区外に展開する。柱間は、桁行2.2ｍ・梁行2.5ｍ。堀方は隅丸方形を呈し、埋土からは奈良時代と考えられる土師器片が出土している。

土坑ＳＫ512　長径3.2ｍ・短径1.2ｍの不定形の土坑で、深さは0.2ｍ。土師器甕（136）が出土している。

溝ＳＤ557　調査区西端を南北に流れる溝で、幅4.2ｍ・深さ0.4ｍ。方位は概ねＮ－13°－Ｗである。幅が広い割に、深さは浅く一定している。底面からは、長さ1.3～1.9ｍ・幅0.3～0.8ｍの細長い土坑と直径0.5～0.6ｍ程のピットが列んで確認されている。細長い土坑は深さが0.05ｍと浅く、波板状土坑の可能性が考えられる。この遺構は、幅の割に深さが浅く、埋土の状況からも水が流れていた可能性は低いことから、溝と言うよりは道路遺構の可能性も考えられる。出土遺物は、土師器杯(38～50)・皿(54)・高杯(56)・鉢(57)・甕(58～62)・鍋(63～65)・把手(66・67)、須恵器杯(51・52)・高杯(53)などが出土している。奈良時代中期から後期の遺構と考えられる。

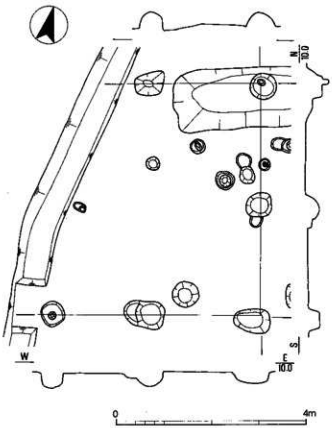
溝ＳＤ559　下層面で確認した溝で、幅0.8ｍ・深さ0.2ｍ。南北方向で流れるが、調査区南端で西方に曲がり、ＳＤ557に切られる。土師器杯（21～24）・高杯(33)・甕(25～30)・壺(31・32)、須恵器杯(34・35)・高杯(36)、土錘(37)が出土している。

溝ＳＤ569　下層で確認された溝で、ＳＤ559を切る。幅0.9ｍ・深さ0.1ｍの浅い溝で、調査区南端で西方に曲がる。ＳＤ559を切り、調査区中程で終息するＳＤ565とつながることも考えられる。埋土は砂で、土師器甕(158)・高杯(159)が出土している。

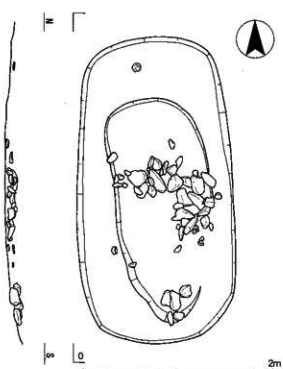
溝ＳＤ561　ＳＤ559に切られる溝で、大半部分が重複している。土師器甕(137)が出土している。

溝ＳＤ586　下層で確認された溝で、ＳＤ551に重複し、ＳＤ580に切られる。土師器杯(141)・甕(142)がが出土しており、奈良時代中期の遺構と思われる。

溝ＳＤ532　幅0.5ｍ・深さ0.3ｍの溝で、ＳＤ531に並行して走るが、調査区南端で、この溝に切られ



第11図　第４次調査区掘立柱建物
Ｓ594平面図・断面図（１：80）



第12図　第４次調査区墓ＳＸ581
平面図・断面図（１：40）

る。土師器や須恵器が出土している。

溝ＳＤ531　調査区中央部を南北に流れる溝で、幅0.8m・深さ0.5m。土師器甕(139)や須恵器甕が出土している。

溝ＳＤ540　幅0.9m・深さ0.2mの浅い溝で、ＳＤ545を切り、ＳＤ537に切られる。土師器甕（133～135)が出土している。

溝ＳＤ545　幅2.1m・深さ0.7mの溝で、断面は台形を呈する。遺物は僅かに土師器甕片とミニチュアと考えられる土台(19)が出土しているのみである。

溝ＳＤ551　幅0.5m・深さ0.1mの浅い溝で、ミニチュア土器の鉢(20)が出土したのみである。

溝ＳＤ577　調査区東端部を南北に流れる溝で、ＳＤ577・ＳＫ576に切られる。幅1.0m・深さ0.4m。土師器皿(８・９)・椀(10)・蓋(11・15)、須恵器杯蓋(14)の他に、ミニチュア土器(13・14）や勾玉形土製品(15)、鏡形土製品(16)も出土しており、祭祀が行われた可能性が考えられる。

溝ＳＤ563　ＳＤ557を切る溝で、ＳＤ503に切られる。幅1.5m・深さ0.1の浅い溝で、調査区中程で終息する。埋土は砂で、土師器片を多量に含んでいた。土師器杯(118・119)・須恵器高杯(120)が出土している。

c　平安時代

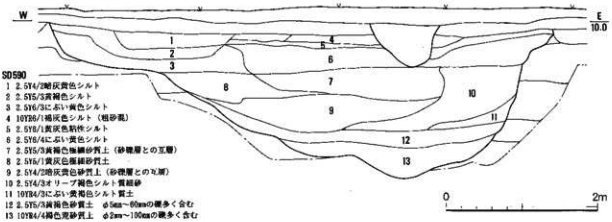
この時期は遺構・遺物ともに少ないが、井戸１基・溝３条を確認している。

井戸ＳＥ502　調査区西北端で確認された素掘の井戸で、調査区外に展開する。堀方は直径1.9mの楕円形を呈し、深さ1.9m。周囲の地盤は砂質で崩落が激しく、十分に断面を観察することができなかった。遺物は土師器皿(89)、土師質土器皿(90・91)、山茶椀(92・93)が出土している。

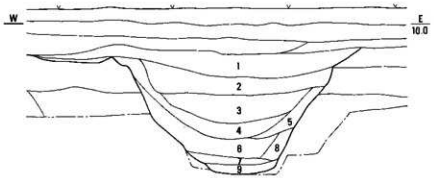
溝ＳＤ538　幅0.7m・深さ0.6mの溝で、断面は逆台形を呈し、ＳＤ537と並行する。黒色土器杯(129)や土師器杯(130)・甕(131・132)が出土している。

溝ＳＤ558　調査区西半部を南北に流れる溝で、幅2.5m・深さ0.7m。ＳＤ556・567やＳＤ511に切られる。土師器杯(67・68)・皿(69)・甕(75)、土師質土器椀(70・73)・皿(74)、山茶椀（71・72）が出土している。

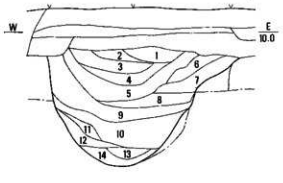
溝ＳＤ541　調査区東半部を南西から北東に流れ



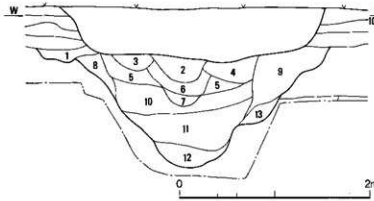
SD590
1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
2 2.5Y5/3黄褐色シルト
3 2.5Y6/3にぶい黄色シルト
4 10YR6/1暗灰色シルト（粗砂混）
5 2.5Y6/1黄灰色粘性シルト
6 2.5Y6/4にぶい黄色シルト
7 2.5Y5/3黄褐色極細砂質土（砂礫層との互層）
8 2.5Y6/1黄灰色極細砂質土
9 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土（砂礫層との互層）
10 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質細砂
11 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土
12 2.5Y5/3黄褐色砂質土　φ5mm～10mmの礫多く含む
13 10YR4/4褐色荒砂質土　φ2mm～10mmの礫多く含む



SD545
1 10YR7/1にぶい黄橙色シルト
2 10YR7/1暗白色砂礫層
3 10YR5/2灰黄褐色シルト
4 10YR3/4にぶい黄褐色シルト
5 10YR3/2黒褐色シルト質細砂
6 10YR2/2黒褐色シルト（黒褐色土含む）
7 10YR2/3黒褐色シルト
8 10YR2/2黒褐色シルト
9 10YR4/2灰黄褐色砂質土



SD583
1 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
2 10YR6/1暗白色砂礫層
3 10YR4/2灰黄褐色シルト
4 10YR3/2黒褐色砂礫層
5 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
6 10YR7/1暗白色砂礫層
7 10YR3/3暗褐色シルト
8 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
10 10YR3/2黒褐色砂質土
11 10YR2/2黒褐色砂質土　φ2mm～5mmの礫含む
12 2.5Y3/2黒褐色砂質土
13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土　φ3mm～10mmの礫含む
14 10YR4/2灰黄褐色細砂質土



SD591
1 10YR4/4褐色粗砂質土
2 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土（泥炭層）
3 10YR4/2灰黄褐色荒砂質土
4 10YR4/2灰黄褐色砂質土
5 10YR4/2にぶい黄褐色　φ1mm～6mm位の未粒形の礫含む
6 10YR4/2灰黄褐色シルト質土　φ3mmの礫含む
7 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
8 10YR3/3暗褐色粗細砂
9 10YR4/2灰黄褐色砂質土
10 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂質土
11 2.5Y4/2暗灰黄色細砂質土
12 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土

第13図　第４次調査区溝ＳＤ590・ＳＤ545・ＳＤ583・ＳＤ591土層図（１：40）

る溝で、ＳＤ538と並行する。幅1.3m・深さ0.3m。土師器杯(98～107)・皿(110)・鍋(111)、灰釉陶器椀(108)、山茶椀(109)が出土している。出土遺物は概ね平安後期のものである。

溝ＳＤ590上層　ＳＤ559に切られる溝で、幅3.7m・深さ0.4m。古墳時代前期の溝を掘り直して使用し、上部がさらに近世以降の溝に削平されている。土師器杯(７)や甕、須恵器甕などが出土している。

ｄ　鎌倉時代

遺構は墓１基の他に溝７条を確認しているが、遺物の出土はやや少なくなる。

墓ＳＸ581　調査区東半部で確認された土壙墓で、長径3.3m・短径1.6mの隅丸長方形を呈する。中央部は長径1.9m・短径1.1mの範囲で僅かに深くなり、深さは0.2m。埋土には焼土や炭を若干含むが、被熱は見られない。底面には集石が部分的に残っており、南北方向を向いていることから、墓と考えられる。土師器小皿(83・84)・山茶椀(85～88)が出土している。

溝ＳＤ537　幅0.7m・深さ0.1mの浅い溝で、土師器杯(94)、土師質土器皿(95)、山茶椀(96・97)が出土している。鎌倉時代中期の遺構と考えられる。

溝ＳＤ534　調査区中央部を南北に流れる溝で、幅1.1～2.4m・深さ0.3m。ＳＤ570に切られる。土師器把手(78)、土師質土器椀(79・82)、山茶椀(80・81)が出土している。

溝ＳＤ550　調査区東半部を南西から北東に流れる溝で、調査区内で終結する。幅0.4m・深さ0.1m。山茶椀(76・77)が出土しいる。

溝ＳＤ552　調査区東半部を南西から北東に蛇行しながら流れる溝で、幅3.9m。土師器杯・高杯・甕・甑、須恵器杯蓋・杯・高杯・壺、緑釉陶器椀、山茶椀、志摩式製塩土器など多彩な土器が出土しているが、いずれの土器も小片であった。底部でＳＤ588・589・593を確認していることから、これらの溝の上層重複部分の可能性も考えられる。

溝ＳＤ566　ＳＤ558の底面で確認された遺構で、ＳＤ566を切る。幅0.9m・深さ0.3。土師器椀(112)・皿(114)・甕(116)・把手(117)、土師質土器椀(113)、山茶椀(115)が出土している。

溝ＳＤ587　ＳＤ552の底部で確認された遺構で、ＳＤ588・593に切られる。幅0.8m・深さ0.2m。土師器杯(146・147)・山茶椀(148・149)が出土している。

溝ＳＤ588　ＳＤ552の底部で確認された遺構で、ＳＤ593を切る。幅0.8m・深さ0.5m。山茶椀(143・144)が出土している。

溝ＳＤ587　調査区東半部の南端下層面で確認された遺構で、東西方向に伸びる。幅0.4m・深さ0.1m。山茶椀(150)が出土している。

ｅ　時期不明の遺構

土坑ＳＫ521　長辺1.3m・短辺0.6mの長方形を呈する土坑で、深さは0.3m。遺物は土師器の小片を含むのみで、時期は不明である。土坑の縁辺部には焼土や炭化物を多数含み、拳大の礫も１点出土していることから、火葬墓の可能性も考えられる。

溝ＳＤ514～519・522～525・527・528　調査区中央部で確認された溝群で、東西方向に並行して伸びる。幅0.4m・深さ0.1～0.3mで、方位はＥ－２°～17°－Ｎであった。1.3～1.6m間隔で並行して列んでおり、耕作溝であると考えられる。上層は削平を受けているため、畠部分は残っていない。これらの溝からは、土師器や須恵器の小片が僅かに出土しているのみで、詳しい時期は決定できない。奈良時代以降の遺構である。

溝ＳＤ554　調査区西端で確認した溝で、幅1.2m・深さ0.5m。底面は丸い。溝は調査区南端で、東南方向に折れ曲がる。遺物は土師器片が出土しているのみである。

溝ＳＤ591　調査区西端で確認した大溝で、幅3m・深さ1.5m。断面はＶ字状を呈する。調査区南端で南西方向に折れ曲がる。遺物は全く出土していない。

その他の遺構　確認された溝の大半は、土師器や須恵器などの小片しか出土しておらず、詳しい時期決定はできない。他の遺構から考えて、奈良時代から鎌倉時代の遺構と考えられる。

遺構	性格	大地区	小地区	遺構面	計測値(m)			時期	備考
					長さ(長径)	幅(短径)	深さ		
SD501	溝	G	E3～E4	上層	－	0.4	0.1	2期～	
SD502	井戸	G	D3	上層	1.7	1.6	1.9	3期	
SD503	溝	G	G7～I7	上層		0.6	0.1	2期～	
SD504	溝	G	I7	上層	－	0.5	0.2	2期～	
SX505	方形周溝墓	G	F4～G5	上層	－	1.3	0.2	1期	
SK506	土坑	G	D3～D4	上層	－	1.2	0.3	1期	
SD507	溝	G	D6～H7	上層	－	0.8	0.1	2期～	
SZ508	不明遺構	G	F7～G7	上層	－	－	－	2期～	
SD509	溝	G	F8	上層	－	0.7	0.1	2期～	
SD510	溝	G	F8～H8	上層	－	0.5	0.1	2期～	
SK511	土坑	G	G9～H9	上層	2.1	1.0	0.1	2期～	
SK512	土坑	G	D8～E8	上層	3.2	1.2	0.2	2期	
SD513	溝	G	F6～F7	上層		0.6	0.3	2期～	
SD514	耕作溝	G	I110～I111	上層	－	0.5	0.3	2期～	
SD515	耕作溝	G	G10～G11	上層	－	0.4	0.2	2期～	
SD516	耕作溝	G	F9～F11	上層	－	0.4	0.1	2期～	
SD517	耕作溝	G	F9～E11	上層	－	0.4	0.1	2期～	
SD518	耕作溝	G	F9～E12	上層	－	0.4	0.1	2期～	
SD519	耕作溝	G	H10～G12	上層	－	0.3	0.2	2期～	
SD520	溝	G	D8～I15	上層	－	1.2	0.3	1期	志摩式製塩土器出土
SK521	土坑	G	F14	上層	1.3	0.6	0.2	2期～	焼土を多く含む。土坑墓？
SD522	耕作溝	G	G11～I110	上層	－	0.4	0.2	2期～	
SD523	耕作溝	G	I11～I112	上層		0.4	0.3	2期～	
SD524	耕作溝	G	I110～G9	上層	－	0.4	0.1	2期～	
SD525	耕作溝	G	I112	上層	－	0.4	0.1	2期～	
SD526	溝	G	D9～G10	上層	－	0.8	0.1	2期～	
SD527	耕作溝	G	E10～E11	上層	－	0.3	0.1	2期～	
SD528	耕作溝	G	D11～E10	上層	－	1.1	0.2	2期～	
SD529	溝	G	G12～H12	上層	－	1.1	0.2	2期～	
SK530	土坑	G	G13	上層	1.3	0.6	0.3	2期～	
SD531	溝	G	D13～I15	上層	－	0.8	0.4	2期	1次SD2に接続か。
SD532	溝	G	D12～I114	上層	－	0.5	0.3	2期	1次SD2に接続？
SK533	土坑	G	I15	上層	0.6	0.6	0.1	2期～	焼土含む
SD534	溝	G	D20～I21	上層	－	2.4	0.3	4期	SD570より古
SD535	溝	G	D21～G22	上層	－	0.5	0.2	2期～	
SD536	溝	G	F21～G22	上層	－	0.6	0.1	2期～	
SD537	溝	G	D23～G23	上層	－	0.7	0.1	4期	SD540より新
SD538	溝	G	D24～F24	上層	－	0.7	0.6	3期	SD545より新
SZ539	－	－	－	－	－	－	－	－	撹乱
SD540	溝	G	F22～G24	上層	－	0.9	0.2	2期	SD545より新、SD537より古
SD541	溝	G	D25～G25	上層	－	1.3	0.3	3期	
SZ542	落ち込み	G	D26～F26	上層	－	1.4	0.1	2期～	
SD543	溝	G	G22～F22	上層		0.4	0.1	2期～	
SD544	溝	G	E19～F19	上層	－	0.5	0.1	2期～	SD583と重複
SD545	溝	G	D22～F23	上層	－	2.1	0.7	2期？	ミニチュア土器出土、SD540より古
SD546	溝	G	D21～G24	上層	－	0.3	0.1	2期～	SD545より新
SD547	溝	G	D27～G27	上層	－	0.8	0.4	2期～	
SZ548	－	－	－	－	－	－	－	－	撹乱
SD549	溝	G	E28～F28	上層	－	0.4	0.1	2期～	

第1表　第４次調査区遺構一覧（１）

遺構	性格	大地区	小地区	遺構面	計測値(m)			時期	備考
					長さ(長径)	幅(短径)	深さ		
SD550	溝	G	F28～G28	上層	－	0.4	0.1	4期	
SD551	溝	G	D30～E31	上層	－	0.5	0.1	2期	ミニチュア土器出土
SD552	溝	G	D28～G30	上層	－	3.9	－	4期	志摩式須恵土器出土 SD587・588・593より新、旧：SR552
SD553	溝	G	E28～F28	上層	－	0.5	0.1	2期～	
SD554	溝	G	E29～G29	上層	－	1.0	0.3	2期～	
SR555	溝	G	D29～E31	上層	－	1.3	0.1	2期～	
SD556	溝	G	F30～G30	上層		0.9	0.1	2期～	
SD557	溝	G	D4～F7	上層	－	4.2	0.4	2期	道路状遺構？
SD558	溝	G	D7～G9	上層	－	2.5	0.7	3期	SD556と重複、旧：SR558
SD559	溝	G	D6～G8	下層	－	0.8	0.2	2期	SD556と重複、SD557より古
SD560	溝	G	G10～F11	上層	－	0.4	0.2	2期～	
SD561	溝	G	E7～G8	下層	－	0.9	0.2	2期	SD559より古
SD562	溝	G	H8	下層	－	0.5	0.1	2期～	
SD563	溝	G	F6～I7	上層	－	1.5	0.1	2期	
SD564	溝	G	F7	下層	－	0.5	0.3	2期～	
SD565	溝	G	F7	下層	－	0.3	0.3	2期～	
SD566	溝	G	D8～I9	下層		0.9	0.3	4期	
SD567	溝	G	F8～I9	下層	－	2.0	1.0	1期	旧：SR567
SD568	溝	G	G8～I8	下層	－	0.4	0.2	2期～	
SD569	溝	G	G8～I8	下層	－	0.9	0.1	2期	
SD570	溝	G	I23～H23	上層	－	0.6	0.2	2期～	
SD571	溝	G	H23～I24	上層	－	0.9	0.4	2期～	SD534より新
SD572	溝	G	H27～I27	上層	－	0.6	0.2	2期～	
SD573	溝	G	E29～I29	上層	－	2.5	1.0	2期～	
SD574	－	－	－	－	－	－	－	－	検出
SD575	溝	G	I18	下層	－	0.5	0.2	2期～	
SK576	土坑	G	F33	上層		0.6	0.1	2期～	
SD577	溝	G	F33～I33	上層	－	1.0	0.4	2期	鍋形土製品・勾玉形土製品・ミニチュア土器出土 SD578・SK576より古
SD578	溝	G	E32～F33	上層	－	2.2	0.3	2期～	1次SD21・23・28に接続する
SD579	溝	G	F32～I33	上層		0.3	0.1	2期～	
SD580	溝	G	D31～G31	上層	－	0.5	0.2	2期	
SX581	墓	G	F26	下層	3.3	1.6	0.2	4期	SD590より新
SD582	溝	G	D31～E31	上層	－	0.6	0.1	2期～	
SD583	溝	G	G29～I30	下層	－	1.2	0.5	2期～	
SD584	溝	G	D26～E27	下層	－	1.2	0.1	2期～	
SD585	溝	G	G31～I31	上層	－	0.7	0.2	2期～	
SD586	溝	G	E30～F31	上層	－	0.6	0.1	2期	
SD587	溝	G	D28～G28	下層	－	0.8	0.2	4期	
SD588	溝	G	D28～G28	下層	－	0.8	0.5	4期	
SD589	溝	G	I26	下層		0.4	0.1	4期	
SD590	大溝	G	I27～F25	下層	－	4.4	1.8	上層：3期 下層：1期	SX581より新
SD591	大溝	G	E31～I31	上層	－	3.0	1.5	2期～	
SD592	大溝	G	H29～I29	下層	－	1.1	1.0	2期～	
SD593	溝	G	D28～G28	下層	－	1.0	0.4	4期	
SB594	掘立柱建物	G	E3～G4	上層	5.0	4.4	－	2期	

第２表　第４次調査区遺構一覧（２）

3　遺物

ＳＤ567出土遺物（１～５）　１～３は高杯。１は流路下層から出土したもので、上村安生氏の伊勢湾西岸の弥生土器編年[21]Ⅴ－３様式に属する。２～３はⅣ－２～３様式に属する。４・５は台付甕の底部。

ＳＤ590出土遺物（６・７）　６は土師器ヒサゴ壺。丁寧なミガキ調整が施される。７は土層で出土した土師器椀で、底部に糸切り痕が見られる。

ＳＤ577出土遺物（８～17）　８～９は土師器皿。９の内面底部には煤が付着する。10は土師器椀で古墳時代後期のもの。11は土師器蓋で、外面にはミガキ調整はが施され、内面には暗文が見られる。都城の土器編年[22]の平城Ⅱ～Ⅲ期に属する。15は土師器杯蓋のつまみ部分。12は土師器甕、外面には煤が付着する。13・14はミニチュア土器。手捏ねで鉢の様な形を呈する。16は勾玉形土製品で調整はやや粗い。直径２㎜程度の孔を穿つ。17は鏡形土製品で勾玉形土製品と同様に調整はやや粗い。鈕の部分は欠損しており、痕跡のみが残っている。鏡面は、外側に向けて弧を描いている。

ＳＤ520出土遺物（18）　高杯の杯部。外面には横方向の、内面には縦方向のミガキ調整が施される。

ＳＤ545出土遺物（19）　台状の土製品で、ミニチュア土器と考えられる。外面には斜め方向の指オサエ・ナデ痕が残る。

ＳＤ551出土遺物（20）　手捏ねのミニチュア土器。外面には指オサエ痕が残り、口縁部や底部に黒斑が見られる。

ＳＤ559出土遺物（21～37）　21～23は土師器杯。21は外面に粘土紐痕が残り、内面には工具痕が見られる。24は口縁部が外に開き、外面体部下半から底面にかけて指オサエ痕が明瞭に残る。25～30は土師器甕。25～27は口径13～17cmとやや小ぶりのであるが、28～30は口径23cm以上と大きい。31は土師器壺で、口縁端部に面を持つ。32も土師器壺であるが、細頸で、口縁端部に刺突文が見られる。33は土師器高杯脚部で、やや歪みが見られる。34・35は須恵器杯。36は須恵器高杯で歪みが見られる。37は土錘。

ＳＤ557出土遺物（38～67）　38～50は土師器杯。いずれも粗製で、外面に粘土紐の痕跡が残るものも多い。口縁部が内彎するものと、端部を外反させるものが見られる。42は内面底部に、47は内面体部に「×」状のヘラ記号が見られる。54は土師器皿。内面底部に暗文が施される。都城の土器編年の平城Ⅱ期に属するものと考えられる。56は土師器高杯で、杯部下半に指オサエ痕が残る。57は土師器鉢。内外面ともケズリ後ミガキ調整が行われる。58～62は土師器甕。61・62は体部が球形を呈する。63～65は土師器鍋。65は外面にハケ調整がなされた後に下半はナデが行われ、内面下半にはケズリ調整が見られる。66・67は須恵器杯。66はヘラ切り後ナデ調整が行われる。67は外部底面にロクロケズリが行われる。51・52は須恵器杯。これらの土器は概ね８世紀中頃の遺物と考えられる。

ＳＤ558の出土遺物（68～75）　68は土師器杯。体部内外面にミガキの様な調整が見られる。69は土師器皿で、内面体部に放射状のミガキ、内面底部に螺旋状の暗文が施される。70・73は土師質土器椀。70は口縁は端部で外反し、底部には糸切り痕が見られる。74は土師質土器皿で、底部には糸切り痕が見られる。75は土師器甕で、体部外面には指オサエや工具ナデの痕が残る。口縁端部は肥厚し、内面が僅かに突出する。71・72は山茶椀。71は渥美産と考えられる。72は内面に炭化物が付着する。藤澤良祐氏の山茶椀編年（以下「藤澤編年」）[23]第４～５型式（１）のものと考えられる。

ＳＤ550出土遺物（76・77）　ともに山茶椀。藤澤編年第７型式のものと考えられる。

ＳＤ534出土遺物（78～82）　78は土師器鍋の把手。79・82は土師質土器椀で、82は柱状高台をもつ。80・81は山茶椀で、81は内面に使用痕が見られる。藤澤編年第７型式のもの。

ＳＸ581出土遺物（83～88）　83・84は土師器皿で、共に体部外面に指指オサエ痕が残る。85～88は山茶椀で、85・88は内面に使用痕が見られる。藤澤編年６～７型式のもの。

ＳＥ502出土遺物（89～93）　89・90は土師器皿で、89は体部外面に指指オサエ痕が残り、90は底部に糸切り痕が残り、口縁端部が外に開く。91は土師質土器皿。底部は厚く、糸切り痕が残る。92・93は山茶椀で、93は内面に使用痕が見られる。藤澤編

年第３型式のもの。

ＳＤ541出土遺物(98～111)　98～107は土師器杯、ほとんどのものに体部下半に指オサエ痕が残る。口縁端部が外反するものと、外反せず丸く収まるものがある。110は土師器皿。内外面とも体部下半に指オサエ痕が残る。111は土師器甕で、口縁端部を内側につまみ上げる。外面には煤が付着する。108は灰釉陶器。109は山茶椀で藤澤編年第７型式あたるが、混入したものと考えられる。

ＳＤ566出土遺物(112～117)　112は土師器椀、113は土師質土器椀。114は土師器皿。116は土師器甕で、体部が外面には指オサエが、内面は板ナデが施される。117は土師器鍋の把手。115は山茶椀で、内面底部には胎土目が残る。

ＳＤ563出土遺物(118～120)　118は土師器杯。底部外面には指オサエ痕が残る。119土師器杯。体部外面下半にはケズリ後にナデ調整が施される。120は須恵器高杯で杯部内面底部に「×」字状のヘラ記号が見られる。

ＳＤ552出土遺物(121～128)　121は土師器杯で、口縁端部は外反する。体部下半には指オサエ痕が残り、底部には墨書が見られる。122～125は土師器甕で、122・124は内面に炭化物のような物が付着する。126・127は須恵器杯。127は外面底部に墨書がある。一文字目は「成」で、二字目は「利」であろうか。128は山茶椀で、藤澤編年第５～６型式のものと考えられる。

ＳＤ538出土遺物(129～131)　129は黒色土器杯で、内面にはミガキ調整が施される。田中琢氏の分類[9]のＡ類にあたり、内面及び口縁部外面に黒色化した部分が見られる。130は土師器皿で、口縁端部はナデ調整によって外反し、外面体部下半には指オサエ痕が見られる。131・132は土師器甕で、共に口縁部端部が内側に折り返され、体部は球体を呈する。132は外面体部中位に煤が付着する。

ＳＫ540出土遺物(133～135)　133・134は土師器甕。135は土師器鍋で把手が付くものと思われる。

ＳＫ512出土遺物(136)　土師器甕で、外面には煤が付着している。

ＳＤ561出土遺物(137)　土師器甕で、口縁部は肥厚し、端部は外反する。摩滅が激しい。

ＳＤ580出土遺物(138)　土師器甕。口縁部は横ナデが行われるが、部分的にハケメが残る。

ＳＤ531出土遺物(139)　土師器甕で口縁端部はつまみ上げられる。

ＳＤ537出土遺物(140)　陶器捏鉢で外面には自然釉がかかる。

ＳＤ586出土遺物(141・142)　141は土師器椀で外面には粘土紐痕が残る。内面には煤が付着している。142は土師器甕で、口縁端部までハケメが残る。

ＳＤ588出土遺物(143・144)　143は陶器捏鉢で外面には自然釉がかかる。144は山茶椀で高台には砂痕が残る。藤澤編年の第６～７型式にあたる。

ＳＤ547出土遺物(145)　須恵器杯蓋で天井部はヘラ切り痕が残る。

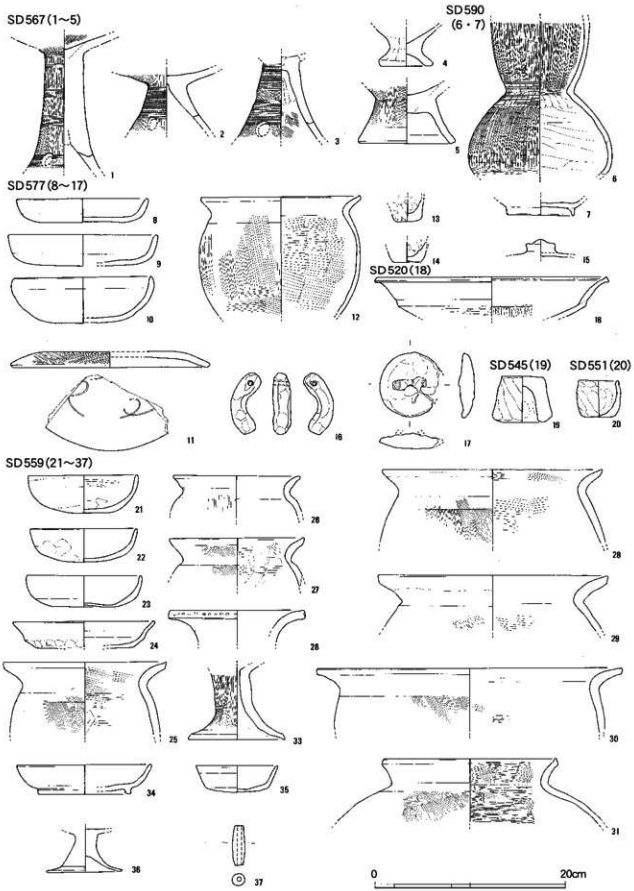
ＳＤ587出土遺物(146～149)　146・147は土師器杯。146は内面には粗いミガキ調整が施され、外面体部下半にはケズリ調整が、底面にはミガキ調整が施される。147は体部外面下半に指オサエ痕が見られ、底面はケズリ調整が施される。また、底面には線刻も見られる。148・149は山茶椀。149は内面に墨痕が見られ、高台部には籾殻痕が残る。共に藤澤編年第７型式のものと思われる。

ＳＤ589出土遺物(150)　山茶椀で、内面には使用痕が見られる。藤澤編年第６型式のもの。

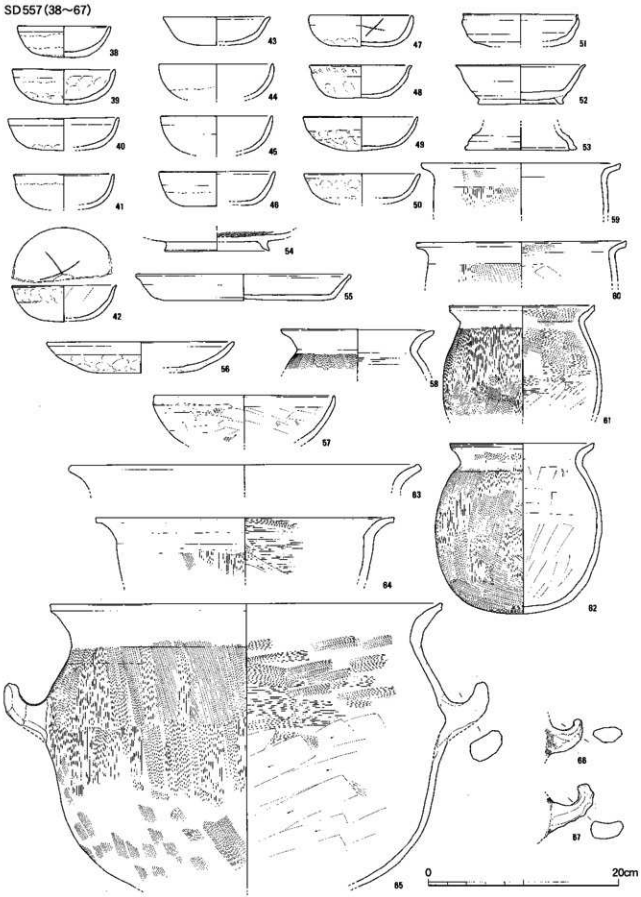
Pit出土遺物(151～157)　151は鉄釘。152は土師器の把手。153は土師器杯で、外面には粘土紐痕が残る。154は土師器皿で、内面には暗文状の痕跡が見られる。155・156は土師器甕。157は土師器甑。

ＳＤ569出土遺物(158・159)　158は土師器甕。159は土師器高杯で、脚部には縦方向の工具ナデが施される。

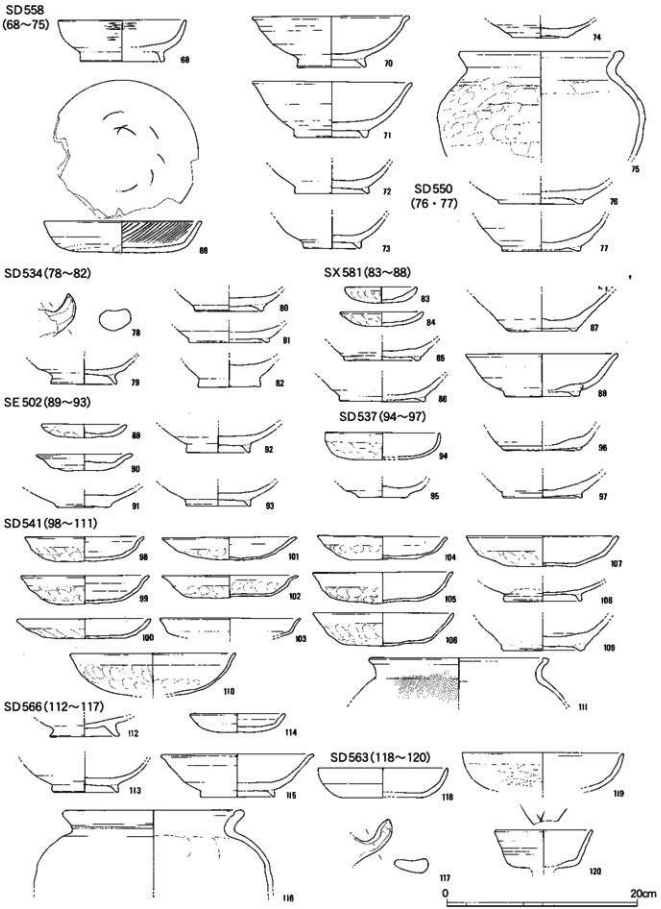
包含層出土遺物(160～194)　160は石鏃。先端部は欠損しており、全体的に風化している。161は土師器高杯の脚部。外面はミガキ調整が施され、三方透かしが見られる。162・163はＳ字状口縁台付甕。162は外面に煤が付着する。口縁部や肩部に刺突文が見られ、赤塚次郎氏の分類[10]の０類にあたる。163は脚部で、内面には炭化物が付着している。164・165は須恵器杯。166～171は土師器杯。166は口縁端部が外反し、内面に面を持つ。外面体部下半には指オサエ痕が少し残る。167は外面体部下半にケ



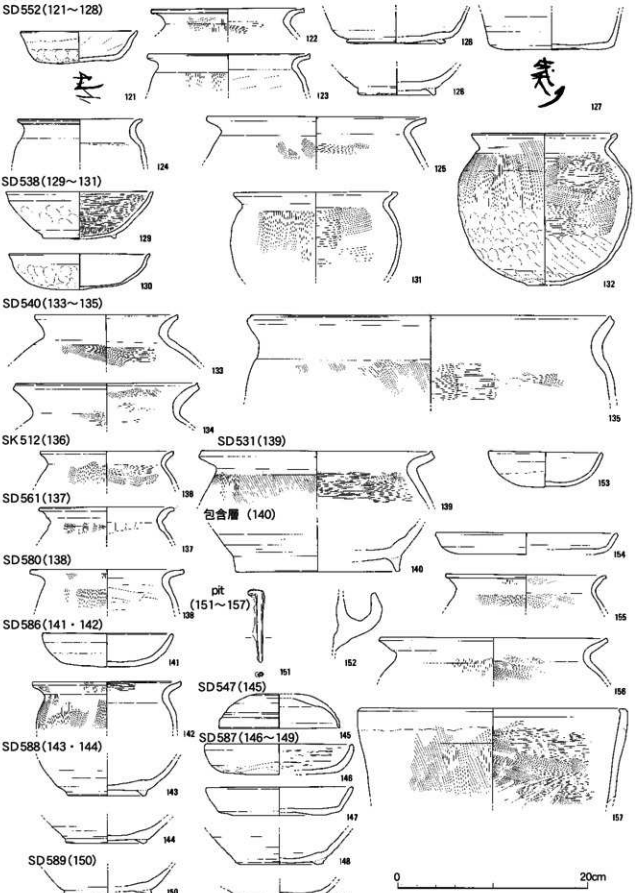
第14図　第４次調査区出土遺物（１）（１：４）



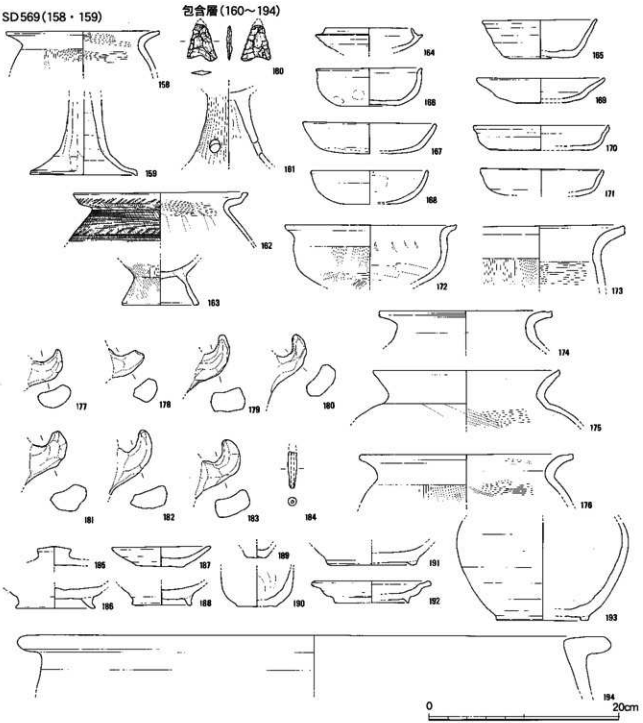
第15図　第４次調査区出土遺物（２）（１：４）



第16図　第４次調査区出土遺物（３）（１：４）



第17図　第４次調査区出土遺物（４）（１：４）



第18図　第４図調査区出土遺物（５）（１：４）

ズリが施される。168は口縁内部に工具ナデの痕跡が残る。169は器高は浅く、口縁は外に大きく開く。170は外部底面にケズリが施される。171は土師器の鉢であろうか。口縁端部が外反する。内面下半はケズリは施され、体部中位には、ケズリを行った際の工具の当たり痕が見られる。173～176は土師器甕。173は外面に煤が付着する。177～183は土師器の甑や鍋の把手。184は土錘。185は土師器杯蓋でつまみ部分。186は土師質土器皿で、底面には糸切り痕が残る。187・188は土師質土器椀で、ともに内面に炭化物が付着する。189・190は土師器鉢。189はミニチュア土器と考えられる。191は山茶椀。192は瀬戸産の小皿。194は常滑の大甕。近世のもの。

地方	発掘地点	地区・遺構	グリッド・遺構・層位	計測値(cm) 口径	器高	底径/行間	調整・技法の特徴	胎土 粗密	色調	焼成度	特記事項
1	13-2	土師器 点形	H0 SD567	－	－	－	ミガキ・転用は脚文	粗 B	にぶい黄橙 10YR6/3	良好5/12	
2	12-2	土師器 皿形	G9 SD567	－	－	－	ミガキ・上端オジ・横位黒煙文	やや粗 B	明赤褐 5YR5/6	口縁1/12	
3	13-6	土師器 鉢形	19-10 SD567	－	－	－	外：ミガキ・横黒煙跡文 内：ハケ・ナデ・ヨコ状痕	密 B	橙 2.5YR6/6	極良好7/12	
4	12-3	土師器 壺	G9 SD567	－	－	5.7	ナデ	やや粗 B	灰黄褐 10YR5/2	底部3/12	
5	14-1	土師器 甕	H0 SD567	－	－	10.2	ハケ・ナデ	粗 D	にぶい黄橙 7.5YR7/3	底部12/12	
6	35-1	土師器 ミニチュア	I127 SD980				外：ミガキ・横黒煙跡文 内：ナデ・ミガキ	密 B	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁2/12	
7	30-2	土師器 鍋	I127-28 SD980			7.2	ヨコナデ・ヘラ・底部ヘラ削り	やや粗 B	浅黄橙 10YR8/3	口縁5/12	
8	19-1	土師器 皿	E3 SD577	13.8	2.3	－	ナデ	やや粗 D	橙 5YR7/6	口縁3/12	
9	17-4	土師器 皿	B3 SD577	15.6	3.3	－	ナデ・タメ	密 B	橙 5YR7/6	口縁1/12	
10	16-3	土師器 鍋	I133 SD577	14.3	1.9	－	ナデ	やや粗 B	浅黄橙 10YR8/4	口縁1/12	
11	19-4	土師器 皿	G33 SD577	20.8	1.7	－	ナデ・ミガキ	やや粗 D	橙 7.5YR7/6	口縁2/12	
12	18-1	土師器 鍋	H33 SD577	16.8	－	－	ハケ・ナデ	やや粗 B	灰白色 10YR8/4	口縁11/12	
13	19-2	土師器 かわらけ	G33 SD577			2.6	ヘラ・ヨコナデ	やや粗 B	にぶい橙 7.5YR7/4	底部12/12	ミニチュア土師
14	2-4	土師器 鉢？	H33 SD577	－	－	－	ナデ	粗 D	にぶい橙 5YR6/4	底部3/12	ミニチュア土師
15	19-3	土師器 皿	G33 SD577	－	－	－	ナデ	密 B	橙 7.5YR7/6	縁辺12/12	
16	19-5	土師器 ふた	G33 SD577					やや粗 B	褐 2.5YR6/6	12/12	
17	2-5	土師器 鍋形	H33 SD577	－	－	－	－	粗 D	にぶい橙 5YR6/4	10/12	
18	12-1	土師器 皿形	G13 SD520	24.6	－	－	ナデ・ミガキ	やや粗 B	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁2/12	
19	30-1	土師器 ミニチュア	C23 SD945			6.2	ナデ・ヨコナデ	やや粗 B	にぶい橙 7.5YR6/4	11/12	ミニチュア土師器
20	33-1	ミニチュア 土師器	K30 SD561	4.2	3.9	3.0	オリ・ヨ	やや粗 B	橙 5YR7/6	9/12	
21	28-1	土師器 杯	F7 SD559	11.6	4.0	－	ナデ 内：工具ナデ・ミガキ？	密 B	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁10/12	PG
22	26-3	土師器 杯	I8 SD559	14.7	3.3			やや粗 B	浅黄橙 7.5YR7/4	口縁7/12	PG
23	25-3	土師器 杯	F7 SD559	12.1	3.3	－	ヨコナデ・底端・底部ヨコナデ・ケズリ	やや粗 B	橙 2.5YR6/8	口縁1/12	PG
24	34-4	土師器 杯	G7 SD559	15.0	－	－	ヨコナデ・ケズリ	やや粗 B	橙 5YR6/6	口縁3/12	
25	27-2	土師器 壺	I8 SD559	17.0			ハケ・ナデ・ケズリ	やや粗 B	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁1/12	
26	26-2	土師器 鍋	I8 SD559	13.2			ハケ・ナデ	やや粗 B	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁1/12	
27	22-6	土師器 杯	H8 SD559	14.2	－	－	ハケ・ナデ・ケズリ	粗 D	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁3/12	
28	26-1	土師器 壺	I8 SD559	23.0	－	－	ハケ・ナデ	やや粗 B	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁2/12	
29	33-2	土師器 壺	7 SD559	24.0			ハケ・ナデ	粗 B	浅黄橙 10YR8/4	口縁1/12	
30	27-1	土師器 杯	H8 SD559	32.0	－	－	ハケ・ナデ	やや粗 D	浅黄橙 10YR8/3	口縁1/12	
31	16-4	土師器 鉢	G8 SD559	18.2	－	－	ナデ・ヨコハケ・ナデ	やや粗 B	淡橙 10YR8/3	口縁1/12	
32	17-2	土師器 壺	G8-7 SD559	14.3			ナデ・横黒煙文	やや粗 B	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁2/12	
33	26-4	土師器 壺形	I8 SD559	－	－	10.1	ハケ・ナデ	やや粗 D	橙 5YR7/6	底部9/12	
34	28-6	須恵器 杯	I8 SD559	14.2	3.1	9.8	ナデ・転ヘラ・高台・底部ヘラ切り？	やや粗 B	灰 N5/0	底部12/12	
35	28-3	須恵器 杯	I8 SD559	8.6	2.8		ロクロナデ・底部ヘラケズリ	やや粗 B	灰白 N7/0	口縁3/12	
36	25-1	黒色土器 皿形	I8 SD559	－	－	8.0	ロクロナデ	やや粗 D	灰 N5/1	底部1/12	
37	26-6	上師	I8 SD559	－	－	－	－	やや粗 B	浅白橙 10YR8/3	12/12	
38	20-4	土師器 杯	F6 SD567	9.8	3.3		ナデ	密 B	浅黄橙 10YR8/4	口縁3/12	PG
39	20-7	土師器 杯	F7 SD567	10.8	3.7	－	ヨコ・ユビナデ	粗 B	橙 7.5YR7/6	口縁5/12	PG
40	20-5	土師器 杯	I8 SD567	11.6	3.4	－	ヨコナデ・ケズリ	粗 W B	浅白橙 7.5YR8/4	口縁3/12	PG
41	3-4	土師器 杯	H7 SD567	10.4			ナデ	やや粗 B	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁1/12	PG
42	32-2	土師器 杯	H8 SD567	11.0	3.9	－	ヨコ・ユビナデ、内：工具ミガキ	密 B	浅黄橙 10YR8/4	口縁1/12	内面に「×」手状ヘラ工具 PG
43	2-2	土師器 杯	G8 SD567	11.2	3.0	－	ナデ・タメ	密 B	浅白橙 10YR8/3	口縁6/12	PG
44	2-3	土師器 杯	D-7 F6	12.0			ナデ	密 B	淡白橙 7.5YR8/4	口縁2/12	PG
45	32-1	土師器 杯	H8 SD567	11.8	－	－	ナデ	やや密 B	灰白 10YR8/2	口縁10/12	PG
46	34-4	土師器 杯	F5 SD567	12.1	3.7	－	ナデ	密 D	浅灰 5Y7/3	口縁4/12	PG
47	20-6	土師器 杯	I7 SD567	11.0	3.3		ヨコ・ユビナデ	密 B	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁4/12	内面体部にヘラ状ホッキ状痕 PG
48	33-6	土師器 杯	I8 SD567	10.7	3.3		外：工具ミガキ・ヨコナデ・ナデ	やや密 B	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁7/12	PG

第3表　第４次調査区遺物観察表（１）

番号	実測番号	種別器形	グリッド番号・遺構	計測値(cm) 口径	底径	残存高	特徴・技法の特徴	胎土 焼成	色調	残存度	時期等不
49	33-5	土師器 杯	F3 SD357	12.1	3.6	—	ヨサエ・ナデ	やや密 良	淡黄橙 7.5YR6/6	口縁3/12	飛鳥
50	20-8	土師器 杯	I7 SD357	12.2	—	—	ヨサエ・ナデ	密 良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁4/12	飛鳥
51	3-6	須恵器 杯	H7 SD357	12.0	—	—	ロクロナデ・切り離し痕・ナデ	密 良	灰N3/0	口縁3/12	
52	21-1	須恵器 杯	H7 SD357	13.6	4.2	9.0	ロクロナデ・粘土紐巻上げ 底部ヘラケズリ	やや密 良	暗青灰 5B5/1	底部4/12	奈良
53	3-7	須恵器 高杯	H7 SD357	—	—	11.7	ロクロナデ	やや粗 良	暗灰 N3/0	底部3/12	
54	21-2	土師器 皿	H8 SD357	—	—	11.0	ヨコナデ・ミガキ・脚付高台ナデ 内:絞ており	密 良	橙 5.3YR6/6	底部4/12	飛鳥
55	4-3	須恵器 甕	H7 SD357	22.6	2.8	—	ナデ	やや密 良	灰白 5Y7/1	口縁4/12	
56	21-4	土師器 高杯	H8 SD357	19.6	3.3	—	ヨサエ・ナデ	密 良	橙 5YR6/8	口縁3/12	
57	21-2	土師器 杯	I7 SD357	19.0	—	—	ナデ・ケズリ・ミガキ	密 良	橙 2.5YR6/8	口縁3/12	
58	2-1	土師器 甕	D~F6 SD357	16.0			ハケ・ナデ	密 良	にぶい橙 7.5YR6/3	口縁4/12	
59	1-4	土師器 皿	D~F6 SD357	21.0	—	—	ハケ・ナデ	密 良	浅黄橙 10YR7/3	口縁3/12	
60	1-3	土師器 皿	D~F6 SD357	15.0	—	—	ハケ・工具ケズリ	密 良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁2/12	
61	31-3	土師器 甕	H6~7 SD357	15.2			ナデ・ハケメ・ケズリ	密 良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁5/12	
62	34-2	土師器 皿	D~E6 SD362	13.1	18.1	—	ハケ・工具ナデ	密 良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁6/12	
63	1-2	土師器 鍋	D~F6 SD362	37.0	—	—	ナデ	密 良	灰黄褐 10YR5/2	口縁1/12	
64	4-1	土師器 甕	H7 SD357	31.2			ハケ・ナデ・ケズリ	やや密 良	淡灰 2.5Y8/3	口縁1/12	
65	11-1	土師器 鍋	I7 SD357	41.2	—	—	外:ハケ・ナデ 内:ハケ・ケズリ	やや密 良	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁3/12	
66	21-5	土師器 杯	I7 SD357	—	—	—	ヨサエ・ハケ・ケズリ	やや密 良	灰白 7.5YR8/4	把手6/12	
67	21-6	土師器 鉢	H6~7 SD357				ヨサエ・ナデ・ハケ・ケズリ	やや密 良	橙 5YR7/6	把手6/12	
68	22-4	土師器 杯	D6 SD356	13.4	4.4	8.8	ミガキ・脚付高台ナデ	密 良	橙 5YR6/6	口縁1/12	飛鳥
69	22-3	土師器 皿	D6 SD358	16.5	3.3	—	外:ナデ・ケズリ 内:ナデ・一部放射状暗文・放射状暗文	密 良	橙 5YR6/6	口縁4/12	
70	35-2	土師器 鍋	B9 SD358	16.5	3.4	7.3	ロクロナデ・脚付高台ナデ・底部糸切り	密 良	淡黄橙 7.5YR8/4	底部12/12	奈良
71	22-1	陶器 山茶碗	C8~9 SD358	10.5~10.8	5.9	7.8	ロクロナデ・脚付高台ナデ・底部糸切り	密 良	灰白 2.5Y7/1	底部12/12	奈良
72	22-2	陶器 山茶碗	H9 SD358	—	—	7.8	ロクロナデ・底部糸切り	密 良	灰白 2.5Y7/1	底部6/12	鎌倉~室町
73	22-5	土師器 皿	C8 SD358	—	—	6.0	ロクロナデ・脚付高台ナデ	密 良	淡橙 5YR8/4	底部2/12	
74	11-2	土師器 土鍋	B9 SD358			6.0	ロクロナデ・底部糸切り	密 良	灰 10YR8/1	底部2/12	
75	14-2	土師器 皿	B9 SD358	17.3	—	—	ヨコナデ・工具ナデ 内:指ナデ	やや密 良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁3/12	外面に煤付着
76	32-6	陶器 山茶碗	C8~9 SD358	—	—	8.8	ロクロナデ・脚付高台	やや密 良	灰白 2.5Y8/1	底部3/12	鎌倉~室町
77	32-3	陶器 山茶碗	I7~8 SD358			8.2	ロクロナデ・脚付高台	やや密 良	灰白 2.5Y7/	底部3/12	鎌倉~室町
78	13-6	土師器 把手	F10 SD534	—	—	—	ヨサエ・ナデ	やや密 良	にぶい黄橙 10YR7/3	把手6/12	
79	25-2	土師器 皿	I12 SD534	—	—	7.0	ナデ・脚付高台ナデ・底部糸切り	やや粗 良	灰黄褐 10YR6/2	底部5/12	
80	24-6	陶器 山茶碗	I12 SD534			7.2	ロクロナデ・脚付高台ナデ・底部糸切り	やや密 良	灰白 2.5Y7/1	底部6/12	鎌倉~室町
81	15-3	陶器 山茶碗	F10 SD534	—	—	8.4	ロクロナデ・脚付高台ナデ・高台輪郭部	密 良	灰白 2.5Y7/1	口縁4/12	鎌倉~室町
82	16-1	土師器 皿	F20 SD534	—	—	6.4	ナデ	密 良	橙 7.5YR7/6	底部4/12	飛鳥
83	12-5	土師器 皿	I28 SX581	7.6	1.7		ヨサエ・ナデ	やや密 良	灰白 10YR8/2	口縁3/12	
84	2-6	土師器 皿	I26 SX583	8.7~9.0	1.6	—	ヨサエ・ナデ	やや密 良	淡黄橙 10YR8/3	口縁11/12	
85	8-5	陶器 山茶碗	F26 SX584	—	—	8.0	ロクロナデ・脚付高台・底部糸切り	やや密 良	灰白 N7/0	口縁4/12	内面に使用痕 鎌倉~室町
86	8-6	陶器 山茶碗	F26 SX584			9.0	ロクロナデ・脚付高台・底部糸切り	やや密 良	灰白 N7/0	口縁3/12	鎌倉~室町
87	8-1	陶器 山茶碗	F26 SX584	—	—	7.2~7.5	ロクロナデ・脚付高台・底部糸切り	密 良	灰白 N8/0	底部11/12	鎌倉~室町
88	8-2	陶器 山茶碗	F26 SX584	16.0	4.8	7.9	ロクロナデ・脚付高台・高台輪郭部	密 良	灰白 N8/0	口縁2/12	内面に使用痕 鎌倉~室町
89	7-7	土師器 皿	D3 SE302	8.9	1.5		ヨサエ・ナデ	やや粗 良	淡 2.5Y8/4	口縁4/12	
90	8-9	土師器 皿	D3 SE302	10.0	1.8		ロクロナデ・底部糸切り	やや粗 良	淡橙 10YR8/3	底部5/12	
91	8-7	土師器 土鍋	D3 SE302	5.7	—		ロクロナデ・底部糸切り	やや粗 良	灰白 10YR8/1	底部12/12	
92	8-3	陶器 山茶碗	D3 SE302	6.8	—	—	ロクロナデ・脚付高台・底部糸切り	密 良	灰白 7.5Y7/0	底部3/12	鎌倉~室町
93	8-1	陶器 山茶碗	D3 SE302	6.8			ロクロナデ・脚付高台・底部糸切り	密 良	灰白 7.5Y7/0	底部5/12	内面に使用痕 鎌倉~室町
94	34-1	土師器 皿	G23 SD337	11.8~12.3	2.9	—	ヨサエ・ナデ	やや密 良	黄灰 10YR8/2	口縁12/12	
95	16-3	土師器 皿	G23 SD337	—	—	4.9	ロクロナデ・底部糸切り	密 良	黄灰 10YR8/4	底部6/12	
96	15-2	陶器 山茶碗	G23 SD337			8.5	ロクロナデ・脚付高台ナデ・高台輪郭部	やや密 良	灰白 2.5Y7/1	底部2/12	鎌倉~室町
97	15-1	陶器 山茶碗	G23 SD337	—	—	8.4	ロクロナデ・脚付高台ナデ・底部糸切り	やや密 良	灰白 2.5Y8/1	底部7/12	鎌倉~室町

第4表　第4次調査区遺物観察表（2）

番号	実測番号	種別・器形	グリッド座標・層位	計測値(cm) 口径	器高	底径・台径	調整・技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存度	特記事項
98	20-1	土師器 杯C	G25 SD641	12.4	2.6	—	オサエ・ナデ	やや良	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁4/12	
99	3-2	土師器 杯C	G23 SD641	12.3	3.0	—	オサエ・ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口縁6/12	
100	18-4	土師器 杯C	G25 SD641	14.9	2.1	—	オサエ・ナデ	やや良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁5/12	
101	3-3	土師器 杯C	G23 SD641	14.9	2.4	—	オサエ・ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口縁6/12	
102	20-3	土師器 杯C	G23 SD641	14.1	2.4	—	オサエ・ナデ	やや良	橙 5YR8/4	口縁8/12	
103	18-6	土師器 杯C	G25 SD641	14.6	—	—	ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口縁3/12	
104	20-2	土師器 杯C	G25 SD641	13.6	2.5	—	オサエ・ナデ	やや良	橙 5YR7/8	口縁6/12	
105	18-3	土師器 杯C	G25 SD641	14.6	3.4	—	オサエ・ナデ	やや良	橙 5YR6/8	口縁6/12	
106	18-2	土師器 杯C	G25 SD641	14.7	3.5	—	オサエ・ナデ	やや良	橙 5YR7/6	口縁8/12	
107	18-5	土師器 杯C	G25 SD641	15.9	3.2	—	オサエ・ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口縁3/12	
108	25-6	灰釉陶器 椀	G23 SD641	—	—	8.2	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部ロクロケズリ	やや良	灰白 2.5Y	底部3/12	
109	24-6	須恵 山茶碗	E25 SD541	—	—	8.7	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部糸切り	やや良	灰白 2.5Y7/1	底部2/12	内面に炭少し付着 粗多
110	24-3	土師器 皿	G25 SD541	17.2	—	—	オサエ・ナデ	良	灰白 10YR8/2	口縁2/12	
111	25-1	土師器 椀	E25 SD541	18.8	—	—	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部ロクロケズリ?	やや良	灰黄褐 10YR6/2	口縁2/12	
112	30-6	土師器 甕	H9 SD566	—	—	7.4	ナデ・貼付高台ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/4	底部11/12	
113	30-3	土師器 土器 鍋	G8 SD566	—	—	7.0	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部糸切り	良	浅黄橙 7.5YR8/4	底部12/12	
114	30-5	土師器 皿	I10 SD566	10.0	2.0	—	オサエ・ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口縁4/12	
115	30-4	陶器 山茶碗	G9 SD566	16.0	4.5	7.8	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部糸切り	良	灰白 2.5Y7/1	口縁3/12	瓶子・鉢跡
116	31-1	土師器 椀	I10 SD566	10.0	—	—	オサエ・ナデ・沈線? 内に板ナデ	やや良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁2/12	
117	31-3	土師器 皿	G8 SD566	—	—	—	オサエ・ナデ	やや良	にぶい黄橙 10YR7/3	把手6/12	
118	10-4	土師器 杯C	H7 SD563	13.8	3.1	—	オサエ・ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/4	口縁2/12	煤G
119	10-8	土師器 杯C	G7 SD563	17.0	—	—	ケズリ・ナデ	やや良	橙 5YR6/8	口縁2/12	煤G
120	10-3	須恵器 高杯	H7 SD563	10.2	—	—	ロクロナデ	良	灰 5Y5/1	口縁2/12	内面杯部に「×」字状ヘラ記号
121	6-2	土師器 杯C	H28 SD652	12.2	3.3	—	オサエ・工具ナデ・工具痕	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁6/12	底部に墨書あり
122	5-2	土師器 壺	H28 SD652	16.0	—	—	ハケ・ナデ	良	橙 2.5YR6/6	口縁2/12	内面に炭化物ヲ付着
123	5-3	土師器 壺	G28 SD652	17.0	—	—	ハケ・工具ナデ	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁2/12	内面に炭化物ヲ付着
124	5-1	土師器 壺	E29 SD652	13.0	—	—	ナデ・肉・工具ナデ	良	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁3/12	
125	5-4	土師器 壺	H28 SD652	23.0	—	—	ハケ	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁1/12	
126	13-5	弥生器 杯	F28 SD662	—	—	—	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部糸切り	良	黒 N6/0	底部1/12	
127	6-3	須恵器 杯C	F28 SD662	—	—	—	ロクロナデ・ロクロケズリ	良	灰白 2.5Y7/1	底部4/12	底部外面に墨書あり「成刻?」
128	5-6	陶器 山茶碗	H28 SD652	—	—	8.2	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部糸切り 高台側面ケズリ	良	灰白 2.5Y8/1	底部4/12	瓶子・鉢跡
129	28-2	黒色土器 椀	E24 SD538	15.4	5.0	7.6	オサエ・ナデ・ミガキ・器付底台	やや良	鈍橙 5YR6/4	口縁2/12	墨色土器A類
130	24-2	土師器 皿	B24 SD538	14.8	3.8	—	オサエ・ナデ	良	浅黄橙 10YR8/3	11/12	
131	27-4	土師器 壺	G24 SD538	17.2	—	—	ハケ・ナデ	やや良	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁1/12	
132	24-1	土師器 壺	G24 SD538	15.2	—	—	オサエ・ハケ・ナデ・ケズリ	やや良	にぶい橙 7.5YR7/4	5/12	外面に煤付着
133	29-3	土師器 壺	F23 SD540	15.9	—	—	ハケ・ナデ	やや良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁1/12	
134	29-2	土師器 壺	E23 SD540	19.4	—	—	ハケ・ナデ	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁2/12	
135	29-1	土師器 鉢	F23 SD540	38.4	—	—	ハケ・ナデ	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁2/12	
136	22-7	土師器 壺	E8 SK512	14.0	—	—	ハケ・ナデ	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁2/12	外面に煤付着
137	29-4	土師器 壺	F7 SD561	—	—	—	ハケ・ナデ・ケズリ	やや良	にぶい橙 5YR7/4	口縁1/12	
138	5-5	土師器 壺	E31 SD680	16.1	—	—	ハケ・ナデ	良	橙 2.5YR6/6	口縁2/12	
139	17-1	土師器 壺	I14 SD631	24.6	—	—	ハケ・ナデ	やや良	浅黄橙 10YR8/4	口縁3/12	
140	15-5	陶器 瓶類	E23 付高台	—	—	17.4	ロクロケズリ・ロクロナデ・貼付高台ナデ	良	灰白 2.5Y7/1	底部2/12	
141	3-1	土師器 杯C	E31 SD586	13.7	3.5	—	ナデ	やや良	浅黄橙 7.5YR8/4	11/12	内面に煤が付着
142	3-8	土師器 皿	E31 SD586	15.6	—	—	ハケ・ナデ	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁4/12	
143	13-3	陶器 山茶碗	E28 SD588	—	—	8.2	ロクロナデ・貼付高台・底部糸切り	良	灰白 N8/0	底部7/12	転多・鉢跡
144	13-4	陶器 山茶碗	E28 SD588	—	—	8.6	ロクロナデ・貼付高台ナデ・底部糸切り	良	灰白 N8/0	底部5/12	転多・鉢跡
145	32-7	須恵器 杯蓋	E27 SD547	12.6	—	—	ロクロナデ・ロクロケズリ・ヘラ沈線	良	灰白 5Y7/1	口縁1/12	
146	3-9	土師器 杯C	E8 SD587	15.6	3.3	—	ナデ・ケズリ・ミガキ	良	橙 5YR7/6	口縁2/12	

第5表　第4次調査区遺物観察表（3）

番号	実測番号	遺構番号	グリッド	層位・層番号	計測値(cm) 口径	器高	底径	器種・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
147	6-1	十勝番号	D8	SD587	15.5	3.0		ナデ・オサエ・ケズリ	密	暗 2YR6/6	口縁3/12	外面武器は工具痕あり
148	4-1	胆振 山北線	G28	SD587	—	—	9.2	ロクロナデ・工具ナデ・糸切高台	密	灰白 N8/0	底部4/12	線彫・鎬技
149	4-2	胆振 山北線	G28	SD587	—	—	8.6	ロクロナデ・工具ナデ・糸切高台 回転糸切痕	やや粗	灰白 N7/0	底部6/12	内面に墨痕あり 線彫・鎬技
150	5-7	胆振 山北線	D8	SD589	—	—	9.2	ロクロナデ・工具ナデ・糸切高台 粗底面・辺り	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	内面に墨痕 動工・鎬技
151	10-6	胆振 山北線	D3	Pit1	—	—	—	—	—	—	11/12	
152	31-4	十勝番号	E15	Pit2	—	—	—	ハケ・オサエ・ナデ	やや粗	灰白 10YR8/2	把7/6/12	
153	7-4	十勝番号	G7	Pit1	12.4	3.7		工具ナデ・ケズリ	やや密	淡黄橙 10YR8/3	口縁2/12	鎬G
154	7-3	十勝番号	D3	Pit1	19.1	2.3	—	ナデ・ケズリ	やや粗	にぶい橙 10YR7/3	口縁2/12	内面に墨・文様の転写あり
155	33-3	土器溜	G33	Pit3	18.8	—	—	ハケ・ナデ	やや粗	にぶい黄 2.5YR7/4	口縁1/12	
156	7-2	十勝番号	G33	Pit3	21.0			ハケ・ナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁1/12	
157	33-1	十勝番号	G33	Pit2	28.2	—	—	ハケ・ナデ・ケズリ	やや粗	淡黄橙 10YR8/3	口縁1/12	
158	26-3	土器溜	H6	SD569	16.0	—	—	ハケ・ナデ	やや粗	にぶい橙 2.5YR7/4	口縁3/12	
159	27-3	十勝番号	I18	SD569		11.2		工具ナデ・ナデ	密	橙 5YR6/6	脚部9/12	
160	21-7	石器	I7	包含層							11/12	サヌカイト 重量:0.67g
161	31-2	竪穴	H6	包含層	—	—	—	スガキ・イヅ・鎬状沈線状	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	脚部1/12	脚部平方沈線
162	13-1	土器溜	E6	包含層	18.2	—	—	口縁部・体部刺突文・体部櫛描文・ハケ・工具ナデ・ナデ	密	灰黄褐 10YR4/2	口縁2/12	外面に煤付着
163	13-2	土器溜	H6	包含層			9.1	ハケ・工具ナデ・ナデ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	脚部6/12	内面に炭化物が付着
164	32-4	遺構外	新倉	包含層	9.0	—	—	ロクロナデ	密	灰 N5/	口縁2/12	
165	28-4	平成番号	F5	包含層	12.1	4.0	—	ロクロナデ・底部ヘラ切り	やや密	黒 N8/0	口縁1/12	
166	6-6	土器溜	E6	包含層	11.2	3.9		ナデ・指オサエ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁2/12	鎬G
167	35-3	土器溜	遺構外	包含層	14.0	3.2	—	ナデ・ケズリ	密	黄橙 7.5YR7/8	口縁2/12	
168	7-5	土器溜	遺構外	包含層	12.5	3.6	—	工具ナデ・ナデ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁3/12	鎬G
169	32-3	土器溜	遺構外	包含層	13.1			ナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁3/12	
170	25-5	十勝番号	F29	包含層	14.2	2.6	—	ナデ・外部底面ケズリ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁2/12	
171	23-4	土器溜	F10	包含層	13.0	—	—	横撫・口唇	密	明褐 7.5YR5/6	口縁3/12	
172	25-2	土器溜	F6	包含層	18.0			ハケ・ナデ・ケズリ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁2/12	内面に工具痕残る
173	25-1	十勝番号	F8	包含層	—	—	—	ハケ・ナデ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁1/12	外面に煤付き
174	17-3	土器溜	G6	包含層	18.1	—	—	ナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁2/12	
175	10-1	土器溜	D13	包含層	19.1			ハケ・ナデ	やや粗	黄灰褐 10YR6/4	口縁1/12	
176	7-1	十勝番号	包含層		22.1	—	—	ハケ・ナデ	やや粗	にぶい橙 10YR7/4	口縁2/12	
177	9-2	土器溜	包含層		—	—	—	ナデ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	把7/6/12	
178	6-7	平成番号	I7	包含層				ナデ・指オサエ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	把7/6/12	
179	9-3	平成番号	I16	包含層				ナデ	やや密	淡黄橙 7.5YR8/4	把6/6/12	
180	10-7	土器溜	K	包含層	—	—	—	ハケ・ナデ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	把7/6/12	
181	23-6	土器溜	F6	包含層	—	—	—	ハケ・ナデ	密	にぶい橙 7.5YR6/3	把7/6/12	
182	28-3	十勝番号	U29	包含層				ナデ	やや密	淡黄橙 10YR8/3	把6/6/12	
183	9-4	土器溜	包含層		—	—	—	ナデ	やや粗	淡黄橙 7.5YR8/3	把7/6/12	
184	12-4	土器溜	H32	包含層	—	—	—	ナデ	やや密	にぶい橙 10YR7/3	10/12	重量:3.06g
185	23-3	十勝番号	遺構外					ナデ	密	橙 7.5YR6/6	脚4/10/12	
186	8-10	土器溜	遺構外		10.1	2.2	—	ロクロナデ・底部ヘラ切り	やや粗	淡黄橙 7.5YR8/3	口縁3/12	
187	6-5	土器溜	E32	包含層	—	—	8.3	ロクロナデ・糸切高台	密	にぶい黄橙 10YR7/2	底部10/12	内面に炭化物付着
188	8-8	十勝番号	I10	包含層			6.2	ロクロナデ・糸切ヘラ・外周底面ヘラ切り	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	底部6/12	内面に炭化物付着
189	15-7	土器溜	F33	包含層	—	—	1.7	ナデ・指オサエ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	底部6/12	エンボッサ土器
190	16-2	土器溜	F33	包含層			3.5	ナデ・指押しの形痕	密	橙 5YR7/6	底部4/12	
191	10-2	胆振 山北線	D3	包含層			9.1	ロクロナデ・糸切ヘラ・底面ヘラ切り	やや粗	灰白 2.5Y8/1	底部2/12	線彫状
192	15-1	土器溜	G24	包含層	12.5	2.3	7.8	ロクロナデ・糸切・底面ヘラ切ケズリ・角田底痕	密	灰白 2.5Y8/2	口縁1/12	内面に黒化・白斑あり 鎬G
193	6-4	胆振	E13	包含層	—	—	9.7	ロクロナデ・糸切高台	密	灰白 N7/0	底部3/12	
194	9-1	胆振	遺構外	包含層	60.1			ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗	淡黄橙 7.5YR8/4	口縁1/12	注口

第6表　第４次調査区遺物観察表（４）

4　小結

今回の調査で確認された遺構は、概ね４期に区分することが出来る。

第１期　主として弥生時代後期～古墳時代前期である。遺構は方形周溝墓１基と溝３条のみで、遺物量も極めて少ない。しかし、第１次調査では、この時期の大溝が確認され、多くの遺物も出土している。また、西側の天王山遺跡では、弥生後期の集落も存在していることから、琵琶垣内遺跡周辺にはこの時期の遺構が広範囲で広がっていたものと考えられる。また、方形周溝墓は詳しい時期は決定できないが、形状からみて中期に遡る可能性も考えられる。

第２期　奈良時代中期を中心とした時期で、土坑１基・溝12条が確認されている。この時期は、多数の溝が掘削された時期である。このうち、調査区東半の溝ＳＤ577・ＳＤ551・ＳＤ545からミニチュア土器が出土していることは注目される。特に東端部に存在するＳＤ577では、鏡形土製品や勾玉形土製品が出土しており、周辺では何らかの祭祀が行われていた可能性が高いと考えられる。ただ、こうした土製模造品は、古墳時代後期が主体と考えられる。ＳＤ577でも後期の土師器が僅かに出土していることから、土製品も古墳時代後期まで遡る可能性が考えられる。鏡形と勾玉形土製品の出土は、松阪市草山遺跡[4]や伊賀市中出向遺跡[7]の例が知られる。前者は５世紀末に比定されるが、後者は５世紀後半から奈良時代の間とやや時期幅がある。事例が少ない為、詳しい時期は決定できないが、当遺跡のものについても、古墳時代後期から奈良時代の間としておきたい。

また２～３期にあたる掘立柱建物と、道路状遺構と考えられるＳＤ557の関係も注目される。天王山遺跡のある西側の丘陵には７世紀後半から８世紀前半の集落跡が営まれ、多数の掘立柱建物が確認されている。時期はやや後出するものの、こうした集落が丘陵縁辺部にも存在しており、この丘陵沿いに道や溝が走っていたものと考えられる。

第３期　３期は平安時代後期から末期で、遺構数はやや少なくなり、井戸１基・溝４条が確認されている。遺構は調査区西端と中央部で確認されており、井戸は丘陵縁辺の集落に伴うものであろう。

第４期　４期は鎌倉時代で、藤澤編年の第５～７型式にあたり、墓１基・溝９条を確認している。第３期・第４期も第２期に引き続き、溝が多数掘削されている。遺構はＳＤ566を除き、調査区中央から東半部に見られる。

墓についてはＳＸ581の他、時期不明であるがＳＫ521が火葬墓になる可能性が考えられる。両者は大きく離れており位置関係に関連性は見受けられないことから、それぞれ単体でつくられたものであろう。

今回の調査区の特色は、遺構の大半が溝であったことである。溝は概ね丘陵裾方向に沿って南から北に向って流れる西偏する溝と、調査区方向とほぼ直交する東偏する溝が見られるが、いずれも方位に統一性は見られない。遺跡周辺の条里方向は、N－15°－Eであり[4]、これらの溝群は条里方向に合致せず、地形に沿って掘削されたものと考えられる。

また、これらの溝群は、ＳＤ557からＳＤ567にかけての西側の溝群と、ＳＤ554以東側の溝群に分かれる。掘立柱建物のある調査区西端は、丘陵裾部にあたり地盤の安定した集落縁辺であったと考えられ、西側の溝群は、丘陵裾に沿って流れる溝と考えられる。また、西側の溝群と東側の溝群の間には、大きな溝は見られない。耕作溝があることから畑地や平坦地として利用されて場所であろう。

これまでの調査では、古墳時代前期の大溝が確認されているが、今回の調査ではこの時期の遺構や遺物は少なく、大半は奈良時代以降のものである。この調査区だけでは判断できないが、これらの溝群については、周辺の土地開発を含めて考える必要があり、当地域が、奈良時代以降に積極的に開発された可能性が考えられよう。　　（新名）

【註】

（１）上村安生「１　伊勢・伊賀地域」（『弥生土器の様式と編年（東海編）』木耳社　2003年）

（２）都城の土器編年については、次の文献を参照した。古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）

（３）田中琢「古代・中世窯業の地域的特色（４）畿内」（『日本の考古学Ⅳ　河出書房　1967年）

（４）藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994年）

（５）弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里』（東京堂出版　1979年）

（６）「草山遺跡発掘調査月報No.６」（松阪市教育委員会　1983年）　榎本義誠『草山遺跡発掘調査報告書（松阪市教育委員会　1986年）』

（７）筒井正明「西山遺跡・中出向遺跡・岡所遺跡」（『平成八年度県営農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター　1997年）

Ⅳ　琵琶垣内遺跡第１次調査の成果

１　第１次調査の経過

琵琶垣内遺跡第１次調査は、県道御麻生薗豊原線道路改良工事に伴い、昭和62年度に実施されたものである。調査時の遺跡名は「開浄寺遺跡」と呼称されたが、後に琵琶垣内遺跡の一角として把握されるに至り、改称された。第１次発掘調査は、昭和62年５月７日から同年９月26日まで実施した。最終調査面積は3,800㎡である。

２　調査区の層位と遺構

a　調査区の位置と層位

調査区は、総延長550ｍにおよぶ長大なものである（第２図）。調査区は、県道鳥羽松阪線から旧参宮街道にかけての調査区（Ｇ１～３区）と、豊原神社西部から除陽集落北西部にかけての調査区（Ｇ４～10区）に大きく分かれる（第19・20図）。Ｇ３区とＧ５区間には、調査が実施されなかった区域が存在している。Ｇ４・５区は、前章で見た第４次調査区にほど近い位置である。調査前の標高は、北端のＧ１～３区で9.6ｍ前後、南端のＧ10区で10.6ｍほどであり、南から北に向かって緩やかな傾斜となっていた。

調査地は黒色土（黒ボク）を最上部の基盤層としている（第20図）。調査区内を縦断するように数条の溝が確認でき、とくに北部のＧ１～３区ではそれが錯綜する状況となっている。

b　遺構の状況

第１次調査区で確認された遺構は、古墳時代以前と、奈良・平安時代以降のものに大別できる。おおよその状況は遺構一覧表（第７～９表）に示した。

ここで報告する遺構は、調査時の記録類が基礎になっている。そのため、記録が不備な箇所に関しては、遺構一覧表にその旨を記載しているので参考にされたい。

弥生時代以前　調査区内からは、縄文時代から弥生時代後期にかけての遺物が出土しているが、明確な遺構は伴わない。遺跡が形成されている時期とは言い難い。

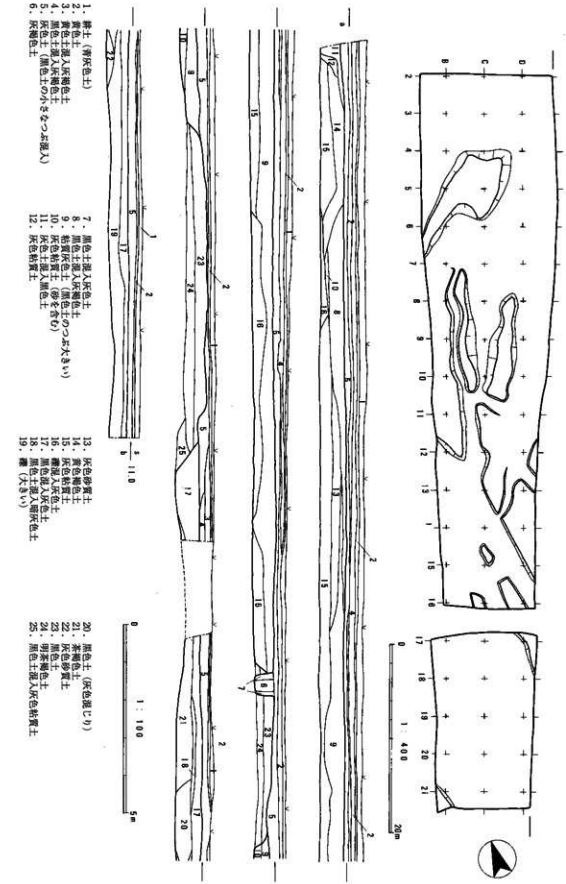
古墳時代前期　遺構基盤層となる黒色土を開削して流れるＳＤ28～30・96・97がこの時期の中心となる遺構である（第19図参照）。これらの大溝は、やや蛇行しているために自然流路のように見えるが、遺構の断面（第32図）を見ると、整った逆台形を呈している。したがって、人工的に開削された溝と考えてよいかと思われる。そうすると、平面的に蛇行する形態としたのはなぜかという新たな疑問が生じる。

埋土中には縄文時代以降の遺物を含むが、縄文土器・弥生土器については摩滅が激しいため、直接遺構の時期を示すものとは考えにくい。ＳＤ97やその上部であるＳＺ98などから古墳時代前期前半の土器類がまとまって出土しているため、その時期には当初の機能を喪失して埋没しはじめていると考えられる。

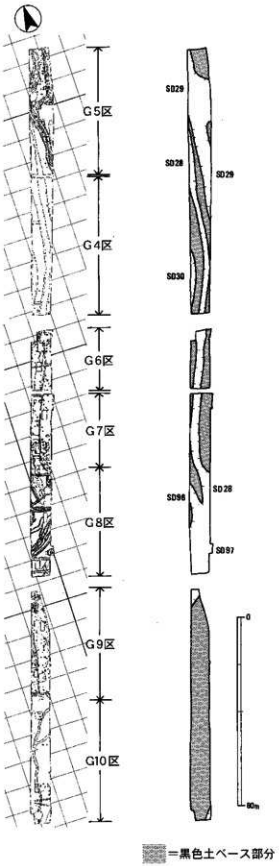
古墳時代後期　この時期には、ＳＨ69・70などの竪穴住居が建てられ、近隣は集落地として利用されている。ただし、ＳＤ29・97などには当該時期の遺物が含まれており、流路の機能はわずかに維持されていると考えられる。

奈良～平安時代前期　７世紀代の遺構・遺物は少ないが、８世紀代に入ると、竪穴住居や井戸が見られるようになる。竪穴住居は、古墳時代前期に大方埋没していたＳＤ97・28・29などの溝と重複して検出されており、８世紀代から平安時代後期末頃にかけては掘立柱建物群が確認できる。建物には顕著な規格的配列は見られない。なお、この時期の建物群は、ＳＫ51から出土している「下厨前」などの墨書土器が示すように、何らかの公的機関を構成する施設である可能性がある。

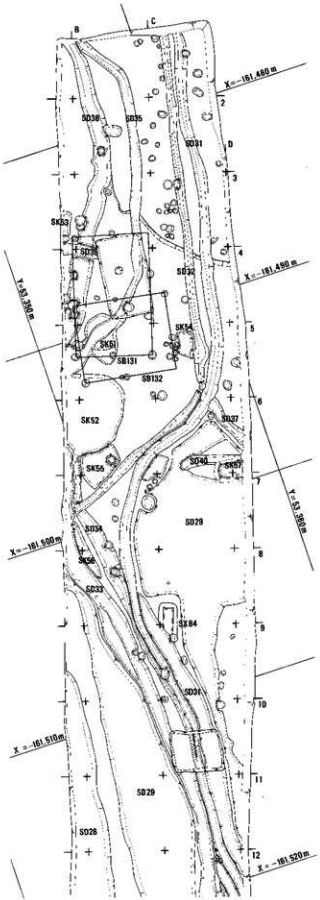
平安時代後期末～鎌倉時代　平安時代中期から後期にかけての時期は、遺構が稀薄で明確ではない。平安時代後期末の11～12世紀頃には、掘立柱建物が確認でき、集落地として継続していた形跡がある。また、遺構は明確ではないものの、旧参宮街道寄りのＧ１～３区でこの時期の土器類がややまとまって出土している。（伊藤）



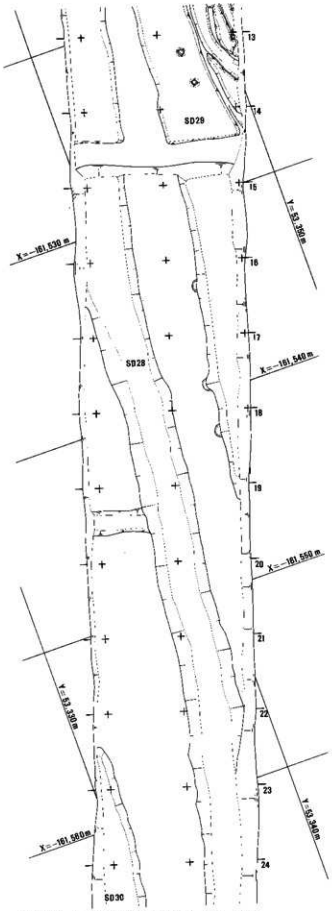
第19図　第１次調査区Ｇ１～３区　平面・土層断面図



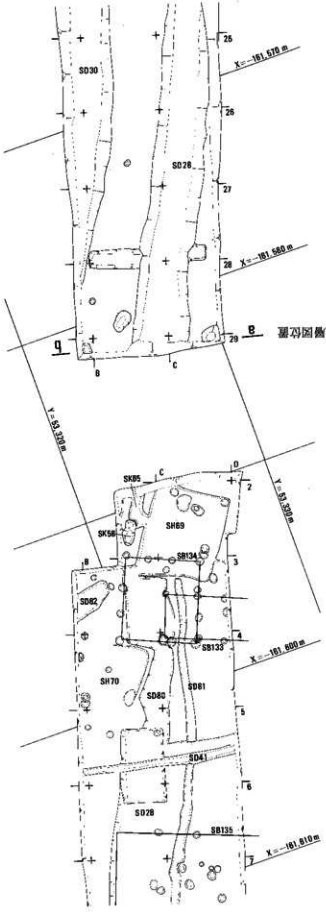
第20図　第1次調査区G4～10区全体図（1：1,600）



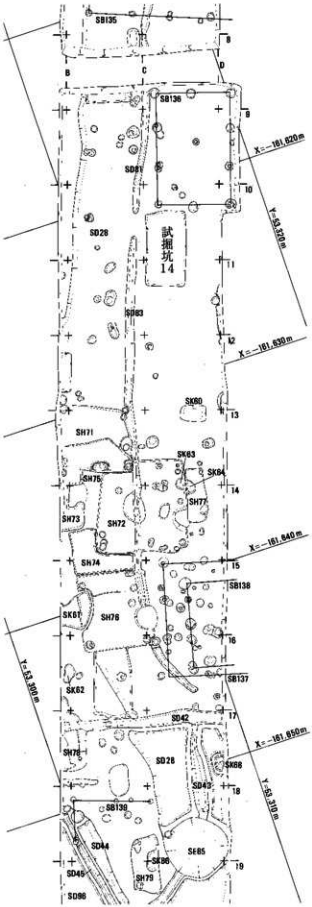
第21図　第1次調査区平面図(1)（1：200）



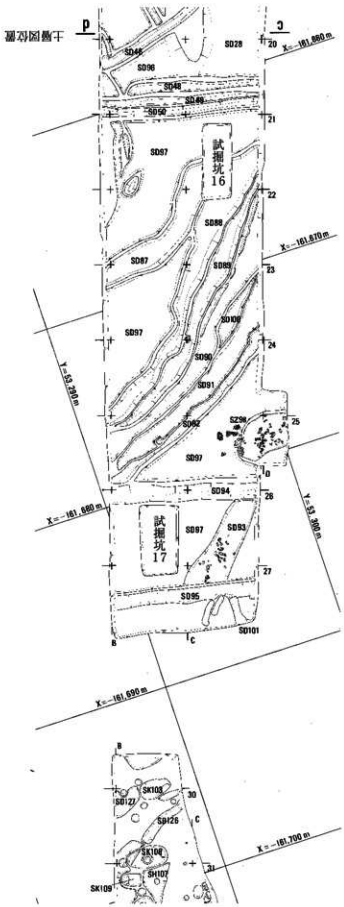
第22図　第1次調査区平面図(2)（1：200）



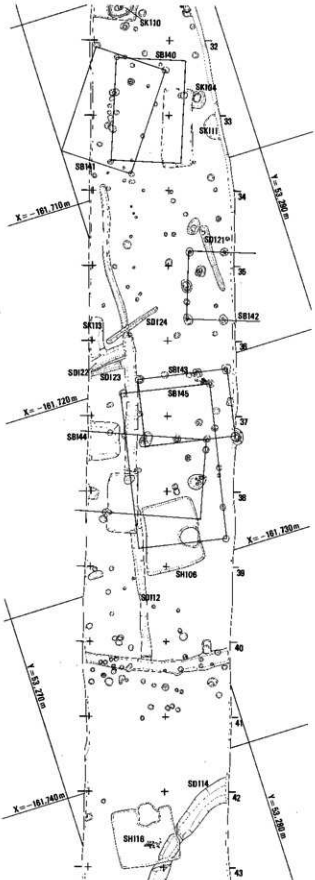
第23図　第1次調査区平面図(3)（1：200）



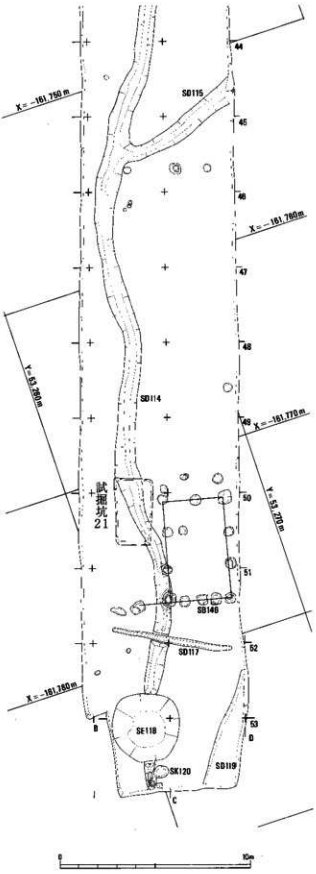
第24図　第1次調査区平面図(4)（1：200）



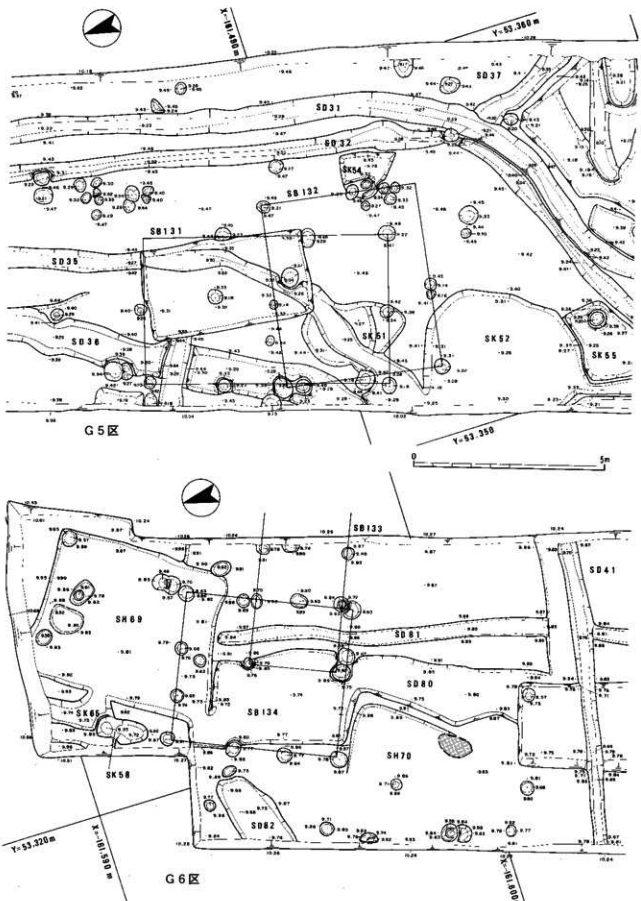
第25図　第1次調査区平面図(5)（1：200）



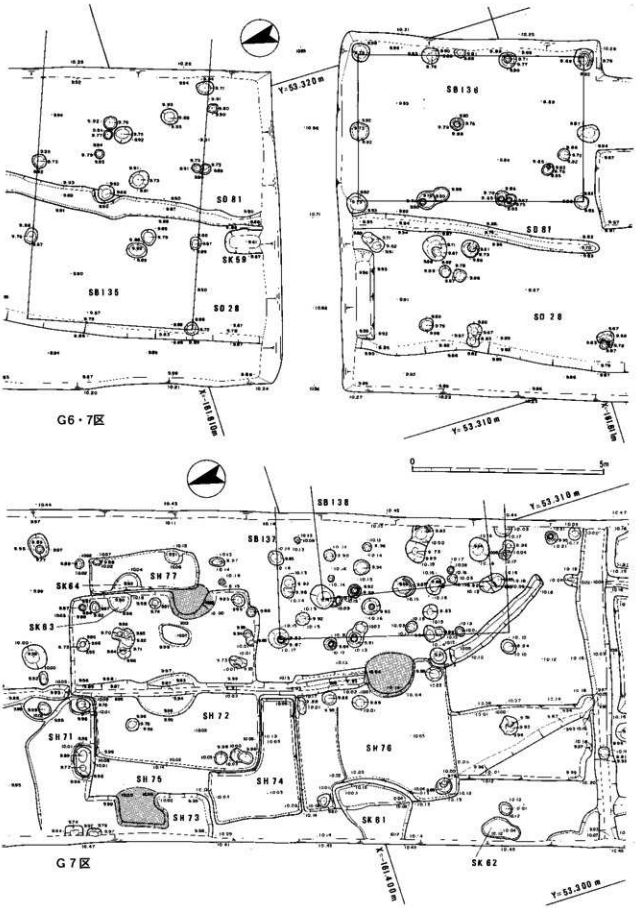
第26図　第1次調査区平面図(6)（1：200）



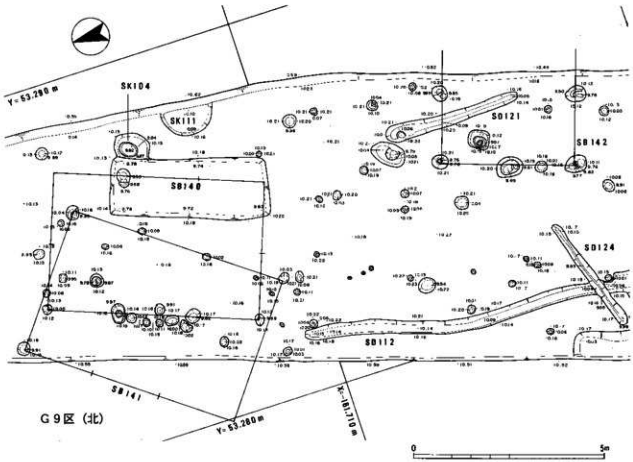
第27図　第1次調査区平面図(7)（1：200）

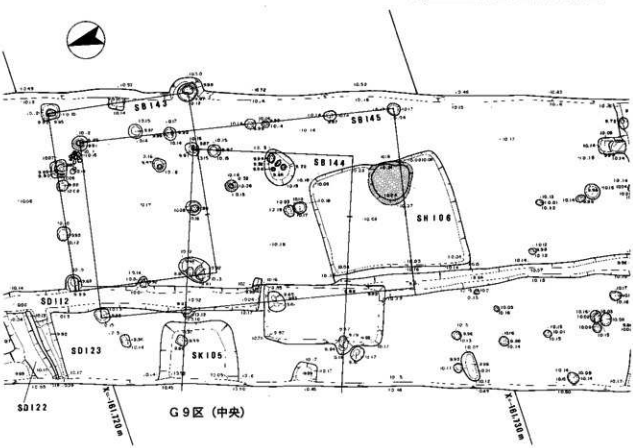


第28図　第1次調査区遺構集中地点詳細図(1)（1：100）

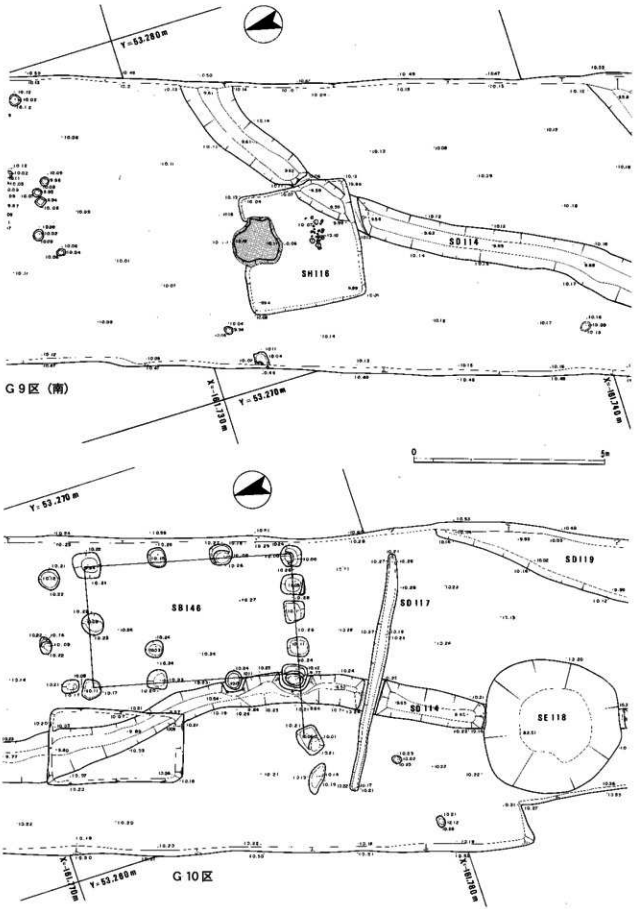


第29図　第1次調査区遺構集中地点詳細図(2)（1：100）

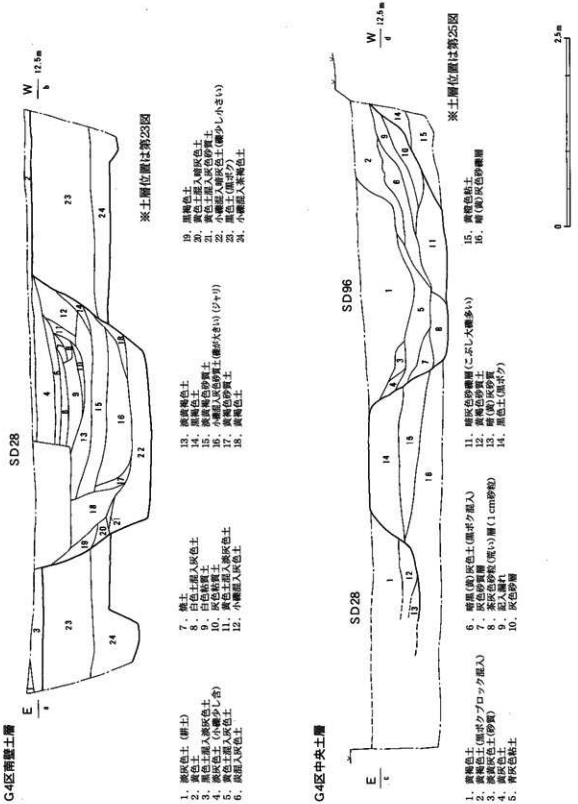




第30図　第1次調査区遺構集中地点詳細図(3)（1：100）



第31図　第1次調査区遺構集中地点詳細図(4)（1：100）



第32図　第1次調査区大溝ＳＤ28・96土層図（1：50）

遺構番号	性 格	時 期	地区	グリッド	調査時遺構名	特徴・形状・所見など
SD21	溝	[illegible]	G1~3		SD1	[illegible]
SD22	溝	[illegible]	G1~3		SD2	[illegible]
SD23	溝	[illegible]	G1~3		SD3	[illegible]
SD24	溝	[illegible]	G1~3		SD4	[illegible]
SD25	溝	[illegible]	G1~3		SD5	[illegible]
SD26	溝	[illegible]	G1~3		SD6	[illegible]
SD27	溝	[illegible]	G1~3		SD7	[illegible]
SD28	溝	[illegible]	G4		SD8	[illegible]
			G5	[illegible]	SD8	
			G6~7	[illegible]	SD8	
SD29	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD100	[illegible]
			G4		SD9	
			G5	[illegible]	SD9	
SD30	溝	[illegible]	G4		SD10	
SD31	溝	[illegible]	G5	[illegible]	SD11	
SD32	溝	[illegible]	G5	[illegible]	SD12	
SD33	溝	[illegible]	G5	[illegible]	SD13	
SD34	溝	[illegible]	G5	[illegible]	SD14	
SD35	溝	[illegible]	G6	[illegible]	SD15	
SD36	溝	[illegible]	G5	[illegible]	SD16	[illegible]
SD37	溝	[illegible]	G5	[illegible]	SD17	
SD38	溝	[illegible]	G6	[illegible]	SD18	
SD39	溝	不明	G5	[illegible]	SD19	
SD40	溝	[illegible]	G5	[illegible]	SD20	
SD41	溝	[illegible]	G6	[illegible]	SD21	[illegible]
SD42	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD22	[illegible]
SD43	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD23・SK13	
SD44	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD24	
SD45	溝	不明	G8	[illegible]	SD25	
SD46	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD26	
SD47	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD27	
SD48	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD28	[illegible]
SD49	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD29	[illegible]
SD50	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD30	
SK51	土坑	[illegible]	G5	[illegible]	SK31	
SK52	土坑	[illegible]	G5	[illegible]	SK32	[illegible]
SK53	土坑	[illegible]	G5	[illegible]	SK33	
SK54	土坑	[illegible]	G5	[illegible]	SK34	
SK55	土坑	[illegible]	G5	[illegible]	[illegible]	
SK56	土坑	[illegible]	G5	[illegible]	[illegible]	
SK57	土坑	不明	G5	[illegible]	SK40	
SK58	土坑	[illegible]	G5	[illegible]	SK41	
SK59	土坑	[illegible]	G6	[illegible]	SK42	
SK60	土坑	不明	G7	[illegible]	SK43	
SK61	土坑	[illegible]	G7	[illegible]	SK44	
SK62	土坑	[illegible]	G7	[illegible]	SK45	
SK63	土坑	不明	G7	[illegible]	SK46	[illegible]
SK64	土坑	[illegible]	G7	[illegible]	SK47	[illegible]
SK65	土坑	[illegible]	G6	[illegible]	SK48	
66	欠番					
SK67	土坑	[illegible]	G8	[illegible]	SK49	
SK68	土坑	[illegible]	G8	[illegible]	SK50	
SH69	竪穴住居	[illegible]	G6	[illegible]	[illegible]	
SH70	竪穴住居	[illegible]	G6	[illegible]	[illegible]	[illegible]
SH71	竪穴住居	[illegible]	G7	[illegible]	[illegible]	
SH72	竪穴住居	[illegible]	G7	[illegible]	[illegible]	[illegible]
SH73	竪穴住居	[illegible]	G7	[illegible]	[illegible]	
SH74	竪穴住居	[illegible]	G7	[illegible]	[illegible]	
SH75	竪穴住居	不明	G7	[illegible]	[illegible]	
SH76	竪穴住居	[illegible]	G7	[illegible]	[illegible]	
SH77	竪穴住居	[illegible]	G7	[illegible]	[illegible]	
SH78	竪穴住居	不明	G8	[illegible]	[illegible]	
SH79	竪穴住居	[illegible]	G8	[illegible]	[illegible]	
SD80	溝	[illegible]	G6	[illegible]	[illegible]	
SD81	溝	不明	G5~7	[illegible]	SD18	[illegible]
SD82	溝	[illegible]	G6	[illegible]	[illegible]	
SD83	溝	[illegible]	G7	[illegible]	SD19	
SX84	[illegible]	[illegible]	G8	[illegible]	SX61	[illegible]
SK85	[illegible]	[illegible]	G8	[illegible]	SK91	
SK86	土坑	[illegible]	G8	[illegible]	SK92	
SD87	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD101	
SD88	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD102	
SD89	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD105	
SD90	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD104	
SD91	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD103	
SD92	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD100	
SD93	溝	[illegible]	G8	[illegible]	[illegible]	[illegible]
SD94	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD108	
SD95	溝	[illegible]	G9	[illegible]	SD110	[illegible]
SD96	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD111	
SD97	[illegible]	[illegible]	G8	[illegible]	SD112	[illegible]
SZ98	[illegible]	[illegible]	G8	[illegible]	[illegible]	[illegible]
99	欠番					
SD100	溝	[illegible]	G8	[illegible]	[illegible]	
SD101	溝	[illegible]	G8	[illegible]	SD116	
SD102	溝	不明	G8	[illegible]	[illegible]	
SK103	土坑	[illegible]	G9	[illegible]	[illegible]	
SK104	土坑	[illegible]	G9	[illegible]	SK120	
SK105	土坑	[illegible]	G9	[illegible]	SK121	
SH106	竪穴住居	[illegible]	G9	[illegible]	[illegible]	[illegible]

第7表　琵琶垣内遺跡（第1次）遺構一覧（1）

遺構番号	性 格	時 期	地区	グリッド	遺物検出状況	特色・形状・計測値などの
SB 107	掘立柱建	不明	G 9	2B, 3B	SB 1 7 8	
SB 108	土坑	不明	G 9	2B, 3B	SB 1 2 4	
SB 109	土坑	不明	G 9	3B	SB 1 2 5	
SB 110	土坑	不明	G 9	3B	SB 1 2 6	
SB 111	土坑	不明	G 9	3C	SB 1 2 7	
SB 112	溝	不明	G 9	3A, 3B, 3B+3BG	SB 1 2 8	
SB 113	土坑	不明	G 9	3A, 3B, 3B, 3B	SB 1 2 9	
SD 114	溝	不明	C 1 0	4B+5AB, 4B, 4BC, 4BC	SD 1 3 0	
SD 115	溝	不明	C 1 0	4BC, 5B, 5AB	SD 1 3 1	
SB 116	掘立柱建	鎌倉～室町	G 1 0	4B, 4C	SB 1 3 7	
SD 117	溝	古墳前期～末期	C 1 0	3AB, 3BC, 3BC	SD 1 3 3	
SD 118	溝	弥生時期	C 1 0	3AB, 3BC, 3BC, 3BC	SD 1 3 4	
SD 119	溝	不明	C 1 0	3BC, 3BC, 3BC	SD 1 3 5	
SB 120	土坑	古墳前期	C 1 0	3AB, 3AB, 3BC, 3BC	SB 1 3 8	
SD 121	溝	不明	C 1 0	3BC, 3BC	SD 1 3 6	
SD 122	溝	不明	G 9	3AB, 3BB	SD 1 4 0	
SD 123	溝	不明	G 9	3AB, 3BB	SD 1 4 1	
SD 124	溝	不明	G 9	3AB, 3BB	SD 1 4 2	
SD 125	溝	古墳後期～白鳳	G 9	3BB, 3BB, 3BB	SD 1 4 3	
SD 126	溝	不明	G 9	3AB	SD 1 4 4	
SD 127	溝	不明	G 9	3AB, 3BB	SD 1 4 5	

第8表　第1次調査区遺構一覧（２）

遺構遺構名	調査次	地区	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	柱間 (M)(M)×(M)×(M)×(M)	主軸	方位 (M基準)	備　考
SB131	1次	G5	3B	4, 5		平安後期末	2(4.0)／3(6.6)	南北	N16° E	
			4A	1, 9						
			4B	3, 11						
			5A	2						
			5B	6	平安後期末					
SB132	1次	C5	4A	6			2(5.0)×2(4.4)	東西	N11° T.	
			4B	8						
			5A	1						
			5B	1, 4, 7, 8						
			5C	1						
SB133	1次	G6	3C	5, 6, 7			2(3.4)×1(2.6)	東西	N23° E	
			4C	1, 3, 5						
SB134	1次	G6	2B	1, 2			3(4.2)／3(4.8)	南北	N23° E	
			3B	3, 4						
			3C	1, 4, 9, 10						
			4B	2						
			4C	2, 4						
SB135	1次	G6	6B・C				37(6.8)／27(4.4)	東西	N21° T.	
			7B・C							
SB136	1次	G7	8C	1, 2			2(4.0)×3(6.6)	南北	N17° E	
			8D	1						
			9C	3, 6						
			9D	2, 3, 4						
			10D	1						
SB137	1次	G7	15B	1, 4, 10			17(2.6)×3(6.6)	南北？	N16° E	
			15C	3, 15						
SB138	1次	G7	15B	6, 17			?／2(4.4)	東西？	N14° T.	
			15C	12, 14						
SB139	1次	G8	18B	1,			27(4.0)×17(2.4)	？	N14° E	
			18C	1						
SB140	1次	G9	32B・C				29(3.8)×3(5.6)	南北	N21° E	
			33B							
SB141	1次	G9	32・33B				2(4.0)×3(6.6)	南北	N27° E	
SB142	1次	C9	34・35C				17(2.0)／2(4.0)	東西？	N20° T.	
SB143	1次	G9	36B	1, 3,			3(4.8)／27(3.8)	南北	N21° E	
SB144	1次	G9	37C	4, 5, 10			37(5.2)×2(4.4)	東西	N22° W	
SB145	1次	G9	36B	3			27(4.6)／4(8.2)	南北	N12° T.	
			37C	3, 9						
			38C	2, 3						
SB146	1次	C10	50C	1, 2, 4,		祭壇？	2(1.8)×3(5.4)	南北	N14° T.	
			51B	1						
			51C	1, 3, 5,						

第9表　第１次調査区掘立柱建物・柱列一覧

3　出土遺物

a　縄文時代の遺物

この時代の土器・土製品が、G４区・ＳＤ28を中心に少し出土している。これらの多くは、表面が少なからず磨耗を受けており、二次堆積によるものである。おそらく、隣接の台地縁辺部に所在する未知の縄文遺跡から水流によって運搬されてきたものと考えられる。

縄文土器は、中期末から晩期末までの幅がある。定形石器は確認されていない。

中期　口縁部の隆帯区画内に横位２列の刺突をもつもの（１）と低い隆帯上に刺突を施すもの（２）がある。いずれも末葉頃のものであろう。

後期　櫛状工具による条線文（３）、巻貝を原体とした凹線文土器（４・５）がある。前者は前葉頃、後者は宮滝式に併行する。６は小片で不明であるが、低い隆帯上に巻貝殻頂による押点を加え、その上には細い沈線、下には凹線または沈線が入る。末葉頃と推定される。

晩期　口縁部がやや外反する深鉢(7～15・18～23)、浅鉢(16)、壺(17)片などの器種に分かれる。このうち深鉢は突帯文を持たないものが目立ち、口唇の刻み目と器面の二枚貝調整に有無の違いはあるものの、大体は後葉の稲荷山式から西之山式頃に位置づけられよう。

18の器面には「二」ないし「三」の字状の刺突列が巡り、瀬戸内系・谷尻式の影響が窺える。浅鉢は波頂部片で口端が玉縁状となる。壺は口縁内外面に無文の突帯がつき、精製品である。突帯文土器には、西之山式ないし五貫森式(21・22)と後続の馬見塚式(23)がわずかに認められる。

時期不明のもの　20・24が該当する。20は口縁部でやや外反して立ち上がる、極薄手の小形深鉢片。半截竹管のような工具で平行線を引き、沈線上や沈線下部にも同一原体先端部の刺突痕が残る。当地域では他に類例を見ないものであり、晩期前半頃の異系統土器であろうか。24は両端を欠き、横状把手の一部か、不明な土製品である。横断面が半円形に近く、内面側が平坦に調整されている。おそらく後・晩期に属するものであろう。　（奥）

b　遺構出土の遺物

弥生時代以降の出土遺物については、遺構出土遺物と遺構外出土遺物に分けて記述する。

溝ＳＤ25出土遺物(25～28)　25は古墳時代後期頃の小形鉢、26は奈良時代頃の土師器杯である。27は古墳時代前期ないしは中期頃のミニチュア土器である。28は短く内彎する高杯か台付壺の脚部と考えられるが、類例がほとんど無い。なお、ここに図示した以外では鎌倉時代の土器が出土しているが、これらがこの遺構の埋土上層部なのか、あるいは上記遺物と混在していたのかどうかはよく分からない。

溝ＳＤ26出土遺物(29・30)　29は弥生時代後期の受口状口縁甕、30は弥生時代後期末から古墳時代初頭頃に見られる、やや内彎する口縁部を呈した甕である。なお、図示した遺物以外にも、奈良時代頃の遺物も出土している。

溝ＳＤ26・27出土遺物(31)　31は古墳時代前期後半に相当するＳ字状口縁台付甕（以下、「Ｓ字甕」）で、赤塚次郎氏による分類[1]ではＤ類に相当し、そのなかでも新しい部類に属する。なお、ＳＤ26・27からは、奈良時代頃の土器類も出土している。

溝ＳＤ28出土遺物(32～39)　32～36は弥生土器。32は中期後葉の細頸壺で、外面には簾状文が施されている。35・36は同じく中期後葉の甕。35は伊勢地域内でよく見られる形態であり、36は大形で、近畿地方の影響が見られるものである。37・38は古墳時代後期後半頃の土師器小形鉢である。39は奈良時代後半から平安時代初頭頃に見られる志摩式製塩土器である。なお、ＳＤ28は層位的な状況を観察すると、平安時代まで機能していたとは考えられない。そのため、39は調査時の誤認による混入と考えるべき遺物である。

溝ＳＤ29出土遺物(40～49)　大きく２時期のものが見られる。40～42は古墳時代前期初頭の土器類。41・42は受口状口縁を呈する甕である。43～45は古墳時代後期前半頃の土器類。44は土師器高杯で、脚裾部には疑似穿孔ともいえる未貫通の刺突がある。このような事例は、上ノ庄宮ノ腰遺跡（松阪市）[2]や河田宮ノ北遺跡(鈴鹿市)[3]など、旧伊勢国内各所で稀に見られる。45は口縁外面に段を持つもので、外面形は二重口縁を意識しているように見える。46は

土師器鉢で、内面には円管状工具による刺突が見られ、底部には木葉圧痕が見られる。48・49は須恵器蓋杯で、田辺昭三氏による陶邑編年[4]（以下「田辺編年」）のＴＫ47型式に併行するものである。

溝ＳＤ30出土遺物（50・51）　いずれも弥生時代中期の土器である。50は壺の体部片で、簾状文が施されている。51は甕で、口縁部外面に刺突文が見える。

溝ＳＤ93出土遺物（52～58）　この遺構からも、大きく２時期の遺物が出土している。52～56は古墳時代前期中葉頃の土器類。54～56はＳ字甕で、概ね赤塚分類のＣ類に相当する。57・58は須恵器。58は壺で、外面には沈線の間に綾杉状に刺突文が施されている。いずれも田辺編年のＴＫ23型式に併行し、古墳時代中期末から後期初頭に相当する。

落ち込みＳＺ98出土遺物（59～88）　ＳＺ98はＳＤ97の一部と考えられ、とくに古墳時代前期中葉の土器類が一括廃棄状態で出土している。

59～66は小形器台。脚部に横方向のミガキが施される66は近畿地域からの搬入品かと思われる。それ以外のものは縦方向を基調としたミガキであり、東海地域通有の手法である。65は受部口縁が小さく、長めの脚柱部を有した異質なもの。67～70は高杯。いずれも脚裾部が広がる形態で、内彎するものは見あたらない。67は小形で、椀形の杯部をなすものと考えられる。71・72は小形の鉢。71は外面に煤が付着しており、煮沸具として使用されている。

73～81は壺。73～75は東海地域に通有の形態で、口縁部外面や体部外面上半に櫛歯状工具による刺突文・横線文・波状文などを施すもの。76～79は二重口縁壺。76～78は伊勢通有の形態。77・78は同一個体かも知れない。79は頸部が直立し、口縁屈曲部が水平な擬口縁となる。これらの要素は近畿地方の影響を受けたものと考えられるが、口縁・体部のミガキ調整は縦方向を基調とした東海地域通有の手法であり、搬入品とは考えにくい。

82～88はＳ字甕。82・84は赤塚分類のＢ類に相当するが、83・85・87はＣ類、86・87はＣ類からＤ類にかけての特徴を有している。

溝ＳＤ97出土遺物（89～101）　89は小形器台、90は高杯の脚部である。91は口縁部が内彎する壺で、いわゆる瓢壺。92は小形壺で、内面にベンガラが付着する。93は壺の底部。94は壺で、口縁部内面にはヘラ描の記号ないしは絵画が見られる。95は口縁部外面に鋸歯文を施した壺で、頸部突帯上の刺突文とその下の横線文とは同一原体で施されている。これらは概ね古墳時代前期前半に相当する。

99は小形丸底壺で、古墳時代前期後半のもの。100は土師器小形鉢、101は須恵器杯身で、いずれも古墳時代後期に相当するものである。98は砂岩製の磨石で、側面にも研磨痕が見られる。所属時期は不明だが、古墳時代前期前半頃のものかと思われる。

土坑ＳＫ56出土遺物（102・103）　102は土師器小形鉢、103は土師器甑で、いずれも古墳時代後期前半頃のものである。

溝ＳＤ88出土遺物（104～106）　104・105は土師器小形鉢。106は丸底の土師器類甕。いずれも古墳時代後期前半頃のものである。

竪穴住居ＳＨ69出土遺物（107～109）　いずれも土師器で、古墳時代後期前半頃のものである。107は丸底の土師器甕で、口縁部は丸みを帯びており、布留系甕の影響が残っている。108は台付甕でＳ字甕からの伝統を引き継ぐもの。体部外面上半には棒状工具による沈線が施文風に施されている。109は甑で、台付甕と同様の手法によるものである。

竪穴住居ＳＨ70出土遺物（110～114）　いずれも古墳時代後期初頭頃のもの。110は須恵器杯身、111は須恵器長頸壺。111の長頸壺は口縁部と体部に波状文が見られる。いずれも田辺編年のＴＫ47型式に併行する。112～114は台付甕。

竪穴住居ＳＨ72出土遺物（115～118）　いずれも土師器甕類で、奈良時代前半のものと考えられる。116は体部が張らない。

竪穴住居ＳＨ73出土遺物（119・120）　119は平城京分類[5]（以下、「都城分類」）の土師器杯Ｃ、120は土師器甕で、いずれも奈良時代前半のものである。

竪穴住居ＳＨ74出土遺物（121）　奈良時代後半頃の土師器甕を図示した。

竪穴住居ＳＨ76出土遺物（122）　図示したのは土師器甑である。調整方法から、奈良時代のものと考えられる。

竪穴住居ＳＨ106出土遺物（123～127）　123は土師器杯Ａ、124は杯Ｂ、125～127は皿Ａである。斎宮

跡における編[6]年のⅠ期第３段階(以下、「斎宮Ⅰ－３」などと表記）に相当し、奈良時代前半頃のものである。

井戸ＳＥ118出土遺物(128～133)　128は須恵器杯蓋。129～132は土師器甕類で、132は底部が平底となる珍しいもの。133は須恵器横瓶である。奈良時代前半頃のものである。

井戸ＳＥ85出土遺物(134～145)　まとまった土器類が出土しており、概ね奈良時代前半頃のものである。134は須恵器杯蓋、135は須恵器壺Ｋに相当する。136は土師器杯ないしは皿で、底部には墨書があるが、小片のため内容は分からない。137は土師器の小形横瓶で、底部には円形の穿孔が見られる。須恵器横瓶を模したと考えられ、珍しい。138～144は土師器甕で、口縁部外面に面を有するが、口縁端部は上方に突出しないものである。145は土師器把手付鍋で、把手部は体部内外面の調整後に穿孔し、挿入付加するものである。

土坑ＳＫ52出土遺物(146～156)　２時期の土器が出土している。146～155は平安時代前期初頭、156は古墳時代後期前半のもの。156は土師器高杯で、杯部が椀形を呈するものである。ＳＫ52のベース土であるＳＤ29埋土にあった遺物を誤認して取り上げたものと考えられる。146～148は須恵器蓋杯。149・150は土師器杯Ａで、斎宮Ⅱ－１・２に相当する。151は土師器皿。152は須恵器短頸壺。153・154は土師器甕、155は把手付鍋である。

土坑ＳＫ58出土遺物(157)　157は土錘。ＳＫ58の出土遺物は少なく、時期比定が困難であるが、奈良時代から平安時代前期にかけての時期と判断した。

土坑ＳＫ120出土遺物(158)　土師器杯Ｇを図示した。底部外面には、方形区画内に「×」字状を描くヘラ記号が見られる。概ね奈良時代前半頃のものと考えられる。

土坑ＳＫ51・溝ＳＤ35出土遺物(159～170)　ここで示した遺物は、ＳＫ51とＳＤ35との重複地点から出土した。いずれの遺構とも判断しがたいが、後述するＳＤ35出土土器と時期的には大きな差が無い。

159～164は土師器杯Ａ、164は皿Ａである。159の底部外面には「下厨前」、160には「厨前」の墨書が見られる。いずれも斎宮Ⅰ－４頃のもので、都城編年では長岡京期前後のものと考えられる。165は高杯で脚部が短いものであり、斎宮Ⅱ－１以降とは考えにくい。杯部外面には星形のヘラ記号がある。166は須恵器四耳壺で、精緻な土器である。167～170は土師器甕類。これらの土器類は、概ね奈良時代末から長岡京期に併行するものであろう。

溝ＳＤ35出土遺物(171～183)　171・172は土師器杯Ａで、斎宮Ⅰ－４にあたる。172の底部外面には「酒」の墨書がある。173・174は土師器皿Ａ。173は斎宮Ⅰ－４、174は斎宮Ⅱ－１にあたる。174の外面には、少し見にくいが「厨前」の墨書が見られる。175は高杯であるが、杯部が杯Ａに類した形態をなす異質なもの。176～179は須恵器蓋杯類。素地粘土の特徴から、176・178は美濃須衛産の可能性がある。179・180は土師器甕、181・182は把手付鍋で、いずれも挿入付加により把手が付けられている。183は平安時代後期後葉頃（南伊勢中世Ⅰａ期[10]）の土師器甕で、他の遺物とは所属時期が大きく異なる。

溝ＳＤ36出土遺物(184・185)　184は須恵器壺Ｋで、底部外面に「キ」字状のヘラ記号がある。185は土師器甕である。概ね奈良時代中頃のものである。

溝ＳＤ31出土遺物(186～190)　186は土師器杯Ａ。内面底部・内面口縁部・外面底部の３箇所に「×」字状のヘラ記号がある。内面底部には螺旋状の暗文が見えるが、口縁部の暗文は明確でない。187も土師器杯Ａ。188は土師器皿Ａ。土師器杯類は概ね斎宮Ⅰ－２・３に併行すると見られる。189は須恵器蓋、190は土師器甕である。

溝ＳＤ31・32出土遺物(191)　ＳＤ31とＳＤ32の重複地点から出土したもの。図示したのは斎宮Ⅰ－３・４頃の土師器杯Ａである。

溝ＳＤ31・34出土遺物(192)　同じく両遺構の重複地点から出土したもの。192は土師器甕で斎宮Ⅰ－４からⅡ－１あたりの時期に相当する。

溝ＳＤ32出土遺物(193～202)　193は土師器皿Ａ。底部外面にヘラ記号がある。これと同種のヘラ記号が斎宮跡からも出土している[8]。斎宮Ⅰ－４に相当する。194は土師器高杯。195～201は土師器甕。体部の張った丸底を呈すると考えられる201は、斎宮Ⅰ－３前後の時期に見られる。202は土師器把手付鍋で、斎宮Ⅱ－１頃のものである。

溝ＳＤ32・ＳＫ54出土遺物(203・204)　２遺構の重複地点から出土したもの。203は土師器杯Ａ、204は皿Ａで、斎宮Ⅱ－１に相当する。

土坑ＳＫ54出土遺物(205)　土師質土器（ロクロ土師器）椀である。平安時代後期末（中世南伊勢Ⅰａ期）のものである。

溝ＳＤ43出土遺物(206)　土師器把手付鍋ないしは鉢である。奈良時代の範疇で把握できる。

溝ＳＤ48出土遺物(207・208)　207は須恵器杯で、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけてのもの。208は土師器甕で、奈良時代前期と考えられる。

溝ＳＤ33出土遺物(209～216)　２時期のものがあり、209・213は古墳時代中期末から後期、それ以外は奈良時代のものである。209は土師器小形鉢、213は土師器壺である。210は土師器杯Ａ、211は土師器皿Ａで、斎宮Ⅰ－２頃、都城編年では平城Ⅱ頃に併行するものであろう。212は土師器高杯の脚部、214・215は土師器甕。216は把手を欠損するものの、形態から見て把手付鍋と考えられる。

溝ＳＤ34出土遺物(217～221)　２時期のものがある。217は古墳時代後期前半の土師器台付甕。218は灰釉陶器瓶、219は須恵器杯Ａである。220は土師器杯Ａで、斎宮Ⅱ－３に相当する。221は土師器把手付鍋で、220よりはやや古い時期のものと考えられる。

溝ＳＤ21出土遺物(222・223)　２時期のものがある。222は須恵器壺で、古墳時代後期のもの。223は土師器鍋で、南伊勢中世Ⅱａ期に相当し、13世紀前半頃のものである。

Ｇ５区５Ｂグリッド pit２出土遺物(224)　土師器杯Ａで、斎宮Ⅰ－４頃のものである。

掘立柱建物ＳＢ131出土遺物(225～228)　図示したのは、ＳＢ131を構成するピットから出土した土器である。225・226は土師器杯Ａで、斎宮Ⅰ－４に相当する。226の底部外面には「厨酒」の墨書がある。先述のＳＫ51・ＳＤ35がこの遺構と重複しており、そこからの混入と考えられる。227は土師器皿で、南伊勢中世Ⅰａ期に相当し、12世紀初頭から中頃のものである。228は陶器椀（山茶椀）である。ＳＢ131の時期を示す遺物は227・228と考えてよい。

遺構外出土遺物(229～294)　遺構に伴わない遺物をここにまとめる。

229～234は試掘調査時出土の土器。234は古墳時代後期の須恵器壺の形態であるが、素地の状況は「生焼け須恵器」とも言い難いほど土師器に近い。

235～249はＧ１区、250～257はＧ２区、258～262はＧ３区出土である。弥生時代中期(263)、弥生時代後期末頃(235)のものもあるが、古墳時代後期・奈良時代・平安時代後期末から鎌倉時代中期の土器が中心である。259は奈良時代末期頃の土師器杯片で、底部外面に「仁田」の墨書がある。

263～294はＧ５区からＧ９区にかけての調査区から出土したもの。古墳時代前期(284～287)および古墳時代後期(288～291・293)のものは、Ｇ８区付近に集中する。この他では、奈良時代前後のものが万遍なく出土してる。273は須恵器杯Ｂと考えられるが、焼きが甘く、土師質を呈している。292は土製紡錘車の円盤部と考えられる。　（伊藤）

＜註＞

（１）赤塚次郎「廻間式土器」(『廻間遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター　1990年)

（２）三重県埋蔵文化財センター「宮ノ腰遺跡発掘調査報告」(1997年)

（３）三重県埋蔵文化財センター「河曲の遺跡」(2004年)

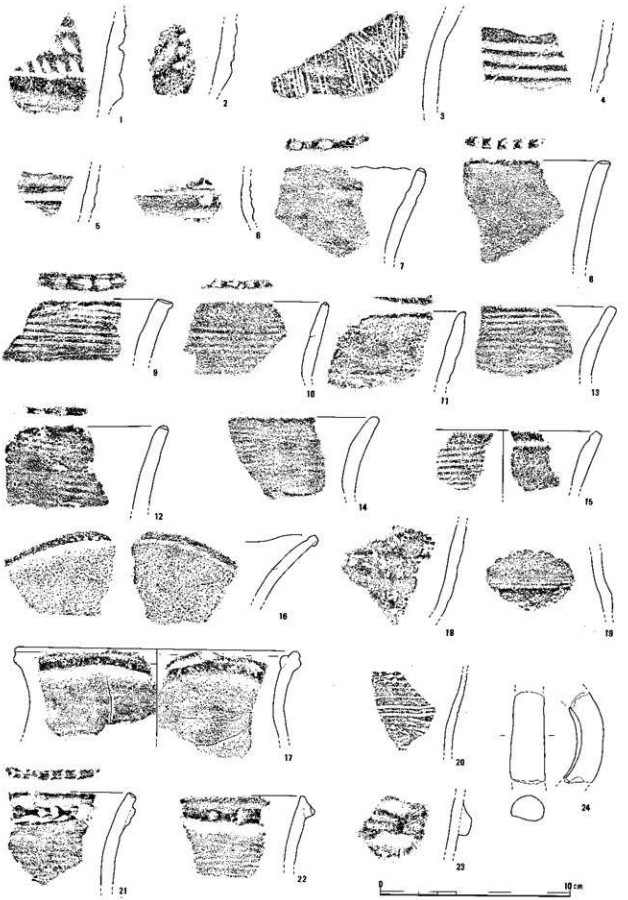
（４）田辺昭三「須恵器大成」(角川書店　1981年)

（５）都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』(1992年) を参照した。

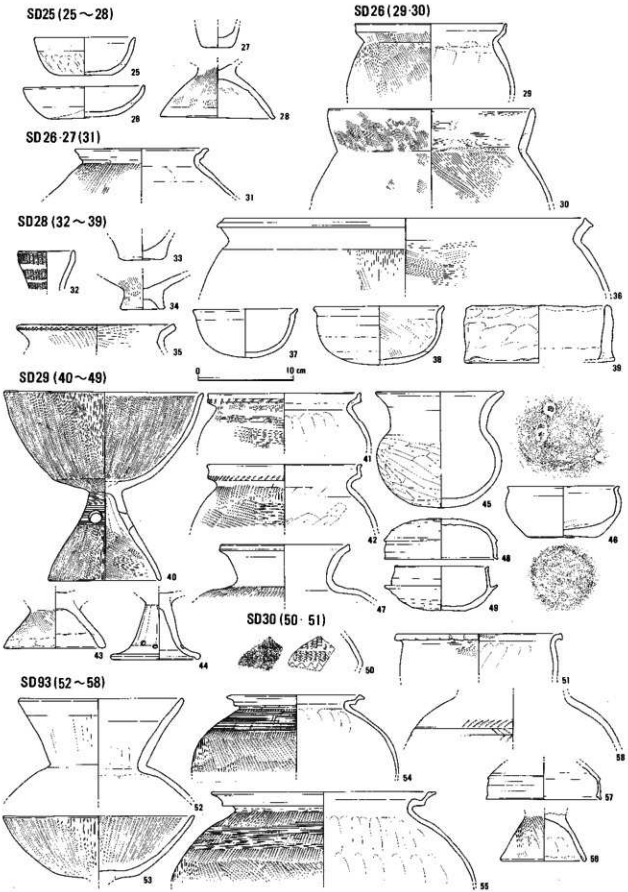
（６）斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ (2001年)

（７）中世の時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」(『関東、東海における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』静岡大学　2005年) に拠る。

（８）斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡平成14年度発掘調査概報』(『第７次調査』　2004年)

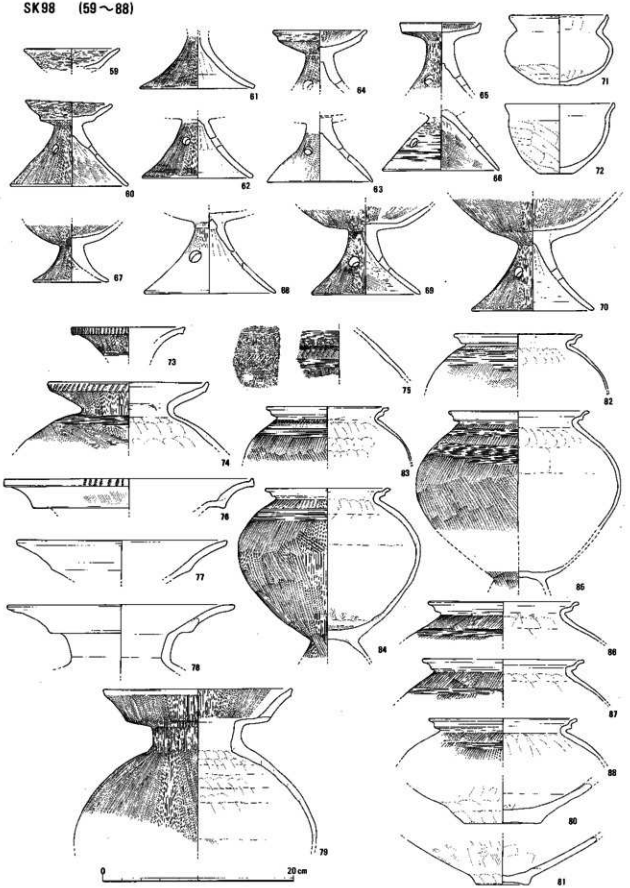


第33図　第１次調査区出土遺物（1）縄文土器（1：2）

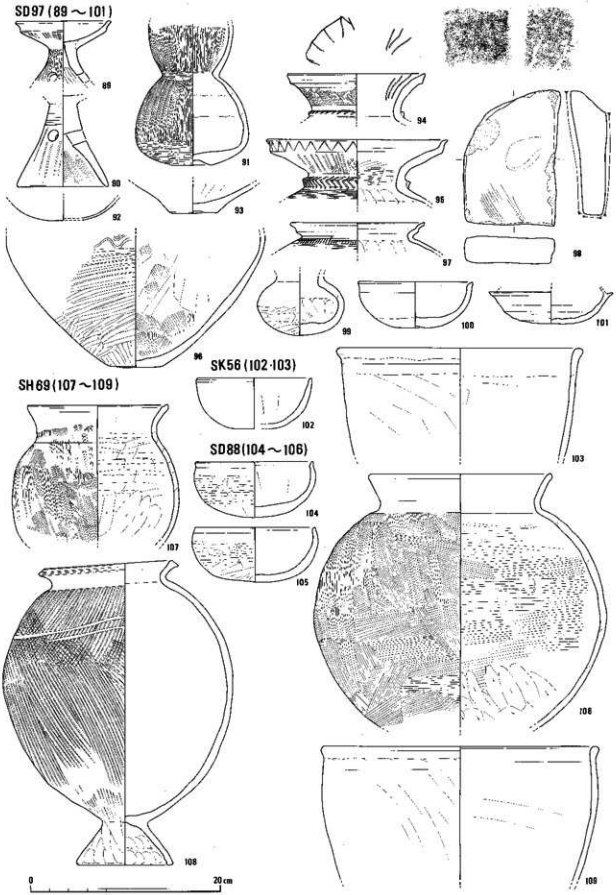


第34図　第１次調査区出土遺物 (2) (1：4)

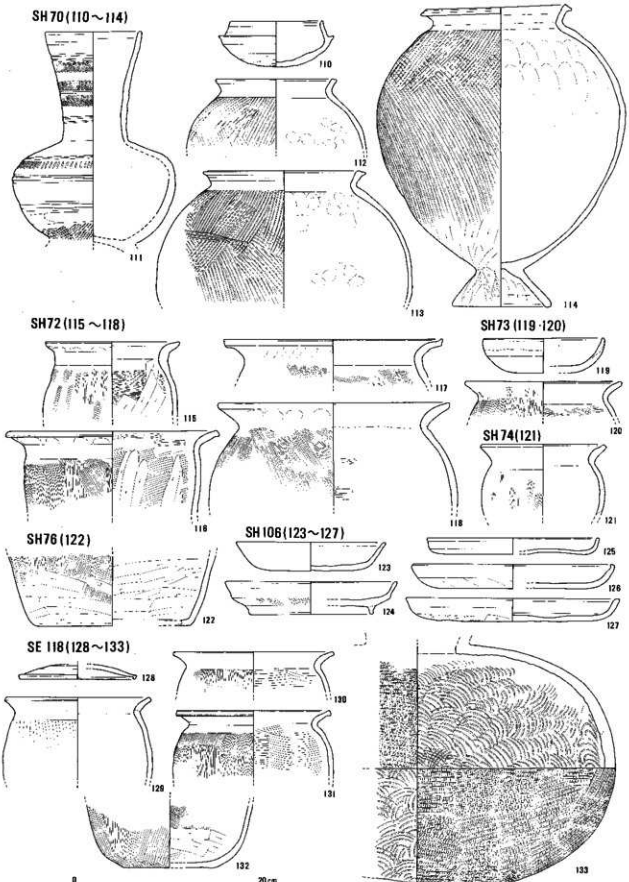
SK98　(59～88)



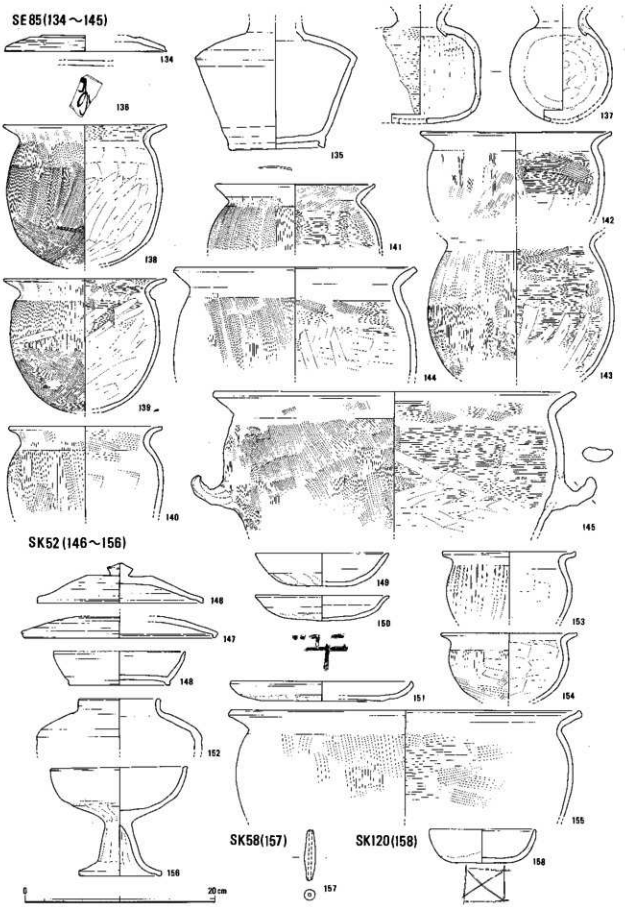
第35図　第１次調査区出土遺物 (3)（1：4）



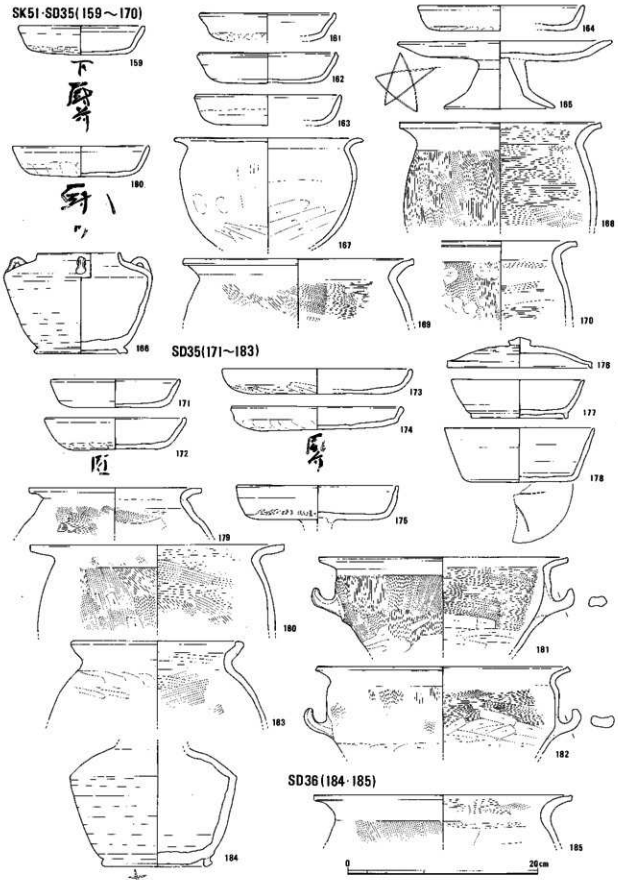
第36図　第１次調査区出土遺物（4）（1：4）



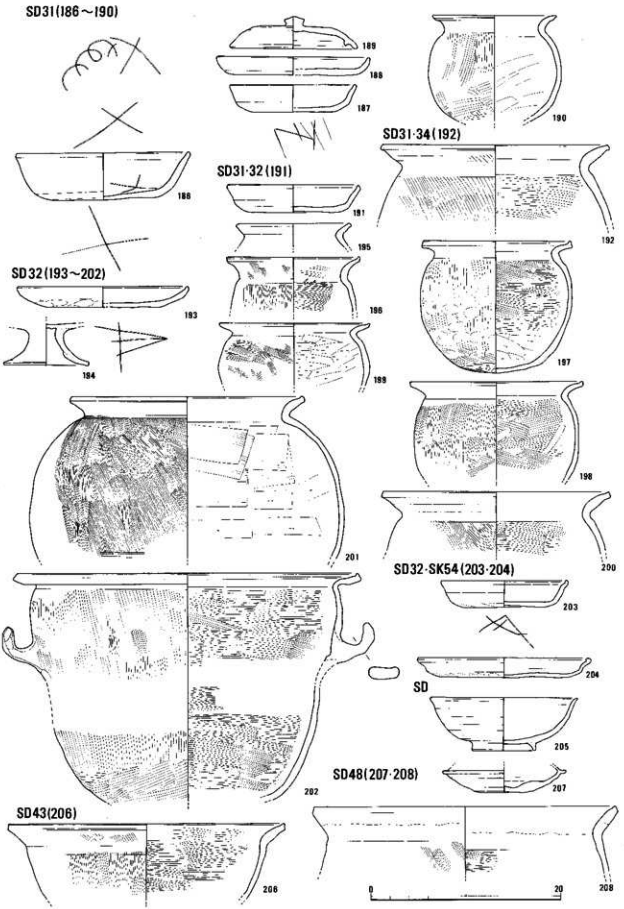
第37図　第１次調査区出土遺物（5）（１：４）



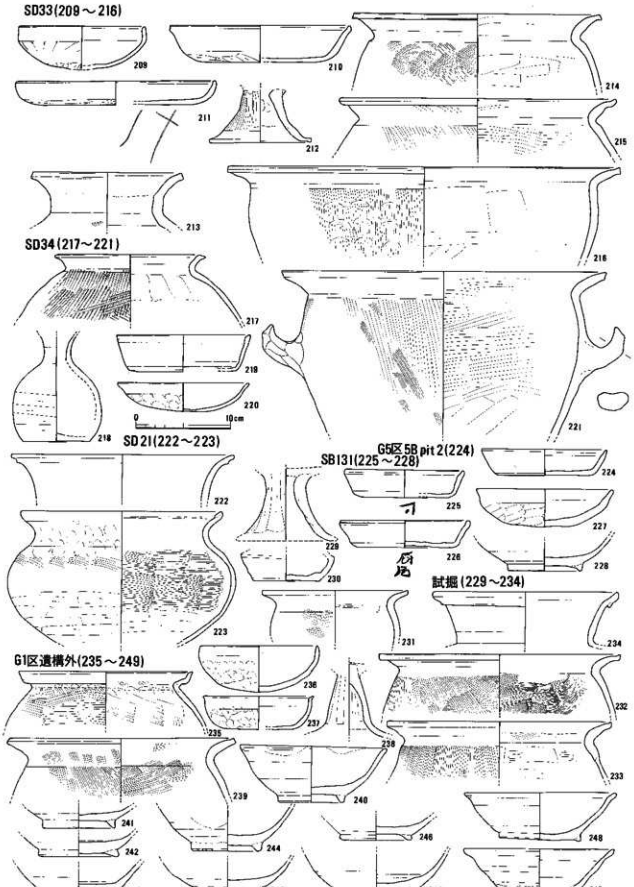
第38図　第１次調査区出土遺物（6）（1：4）



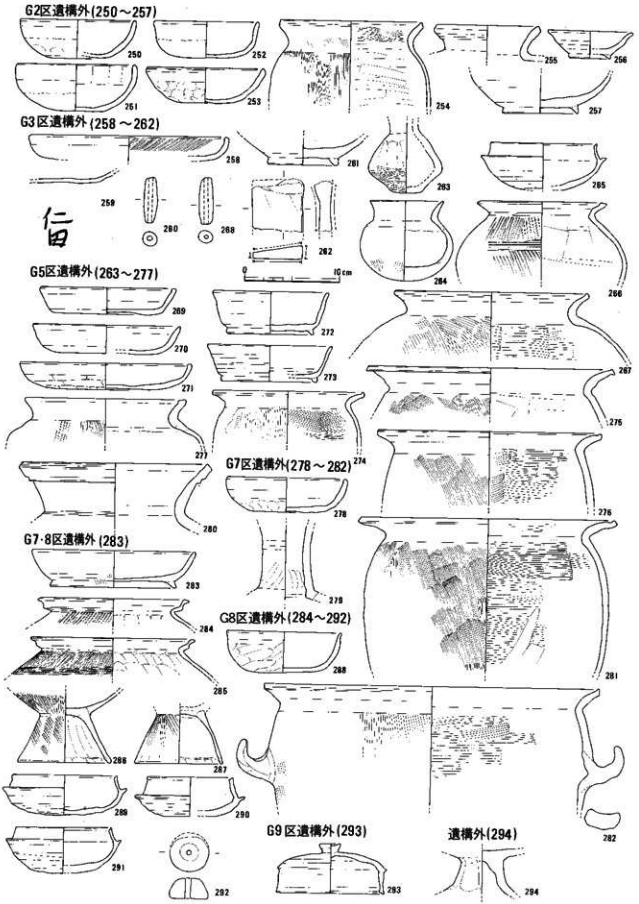
第39図　第１次調査区出土遺物（7）（１：４）



第40図　第１次調査区出土遺物（8）（1：4）



第41図　第１次調査区出土遺物（9）（1：4）



第42図　第１次調査区出土遺物（10）（１：４）

番号	実測番号	種・質	器種など	層位	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	6601	縄文土器	深鉢	G4		SD28 二層		外:[illegible] 内:[illegible]	密	にぶい橙	体部片	中期前葉
2	6602	縄文土器	深鉢	G4		SD28 二層		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい橙	体部片	中期前葉
3	6703	縄文土器	浅鉢	G5	13B	SD41		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい黄橙	体部片	[illegible]
4	5801	縄文土器	深鉢	G8	17C	SD42	–	外:[illegible] 内:[illegible]	密	にぶい黄褐	体部片	[illegible]
5	5603	縄文土器	深鉢	G4		SD28	–	外:[illegible] 内:[illegible]	密	[illegible]	体部片	[illegible]
6	5704	縄文土器	深鉢	G5		SD29	–	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	灰白	体部片	[illegible]
7	5702	縄文土器	深鉢	G4		SD28		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい黄橙	口縁部片	[illegible]
8	6603	縄文土器	深鉢	G4		SD28		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	褐灰	口縁部片	[illegible]
9	6607	縄文土器	深鉢	G4		SD28		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	灰黄	口縁部片	[illegible]
10	5707	縄文土器	深鉢	G4		SD28	–	外:[illegible] 内:[illegible]	密	にぶい黄橙	口縁部片	[illegible]
11	5705	縄文土器	深鉢			SD28	–	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい黄橙	口縁部片	[illegible]
12	5604	縄文土器	深鉢			SD11	–	外:[illegible] 内:[illegible]	密	浅黄橙	口縁部片	[illegible]
13	5708	縄文土器	深鉢	G4		SD28		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	浅黄橙	口縁部片	[illegible]
14	6606	縄文土器	深鉢	G4		SD29		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい黄橙	口縁部片	[illegible]
15	6608	縄文土器	深鉢	G4		SD28		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	褐灰	口縁部片	[illegible]
16	5701	縄文土器	深鉢	G4		SD28	–	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	浅黄橙	口縁部片	[illegible]
17	5601	縄文土器	鉢	G4		SD28	–	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	灰黄褐	口縁部片	[illegible]
18	5805	縄文土器	深鉢	G8	17C	SD12	–	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい褐	体部片	[illegible]
19	6603	縄文土器	深鉢	G4		SD28		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	浅黄橙	体部片	
20	5706	縄文土器	深鉢	G4		SD28		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい橙	体部片	[illegible]
21	6606	縄文土器	深鉢			[illegible] No.1		外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい橙	口縁部片	[illegible]
22	5607	縄文土器	深鉢	G4		SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	密	[illegible]	口縁部片	[illegible]
23	5602	縄文土器	深鉢	G4		SD29	–	外:[illegible] 内:[illegible]	密	にぶい黄橙	体部片	[illegible]
24	5808	縄文土器	[illegible]?	G4		SD28	[illegible]	外:[illegible]	粗	灰黄	[illegible]	[illegible]
25	5002	土師器	小形鉢	G1~3		SD25	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい橙	口縁4/12	
26	5102	土師器	[illegible]	G1~3		SD25	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	灰黄	[illegible]	
27	5103	土師器	[illegible]	G1~3		SD25	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや粗	にぶい黄橙	[illegible]	
28	5105	土師器	[illegible]	G1~3		SD25	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや粗	灰黄	[illegible]	
29	5003	土師器	[illegible]	G1~3		SD26	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや密	灰白	[illegible]	
30	5001	土師器	壺	G1~3		SD26	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや粗	浅黄橙	口縁4/12	
31	5004	土師器	[illegible]	G1~3		SD26・27	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや密	浅黄橙	口縁3/12	[illegible]
32	4701	弥生土器	[illegible]			SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい黄橙	口縁2/12	
33	6504	弥生土器	壺			SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい黄橙・灰黄	[illegible]	
34	1004	土師器	鉢			SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや密	灰白	[illegible]	
35	4903	弥生土器	壺	G4		SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	密	にぶい黄橙	[illegible]	[illegible]
36	1001	弥生土器	壺			SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや密	浅黄橙	口縁1/12	
37	1002	土師器	小形鉢	G4		SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや粗	にぶい黄橙	口縁6/12	
38	1003	土師器	小形鉢	G4		SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや粗	にぶい橙・橙	口縁5/12	
39	6506	土師器	[illegible]	G4	10D	SD28	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	[illegible]	口縁4/12	
40	801	弥生土器	[illegible]	G6	10B	SD29	[illegible]	外:[illegible] [illegible] 内:[illegible]	やや密	にぶい橙・灰白	口縁8/12	[illegible]
41	1005	弥生土器	[illegible]	G5		SD29	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	やや密	橙	[illegible]	
42	6401	土師器	[illegible]			SD29	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	にぶい黄橙・灰黄	口縁2/12	[illegible]
43	2906	土師器	[illegible]	G5	6B	SD29	[illegible]	外:[illegible] 内:[illegible]	粗	灰白・黄灰	[illegible]	

第10表　第1次調査区出土遺物観察表（1）

番号	遺物番号	区名	調査地点	地区	グリット	遺構・遺名等	遺物(cm)	遺物・遺構の特徴	器上	色調	胎土	特記事項
41	1002	上田市	西新	G5		SD29	[illegible]	[illegible]	灰	褐	黒雲母/白川花崗岩	表面に黒点[illegible]有
42	1003	上田市	宮	G5		SD29	[illegible]	[illegible]	灰	[illegible]	白雲母/15 白川花崗岩	内面に炭化物付着
43	1102	上田市	小泉	G5		SD29	[illegible]	[illegible]	中灰褐	黒	白雲母/12 [illegible]	外面に[illegible]による被熱痕[illegible]
47	1052	塩尻市	宮	G5		SD29	[illegible]	[illegible]	褐	灰白	白雲母/12	内外面に付着物
48	1104	塩尻市	都市	G5		SD29	[illegible]	[illegible]	中灰褐	灰白	白雲母/15	
49	1103	塩尻市	都市	G5		SD29	[illegible]	[illegible]	中灰褐	灰	白雲母/12 [illegible]	
50	5106	佐久市	宮	G4		SD30	[illegible]	[illegible]	灰	褐	白雲母	
51	5105	佐久市	宮	G4		SD30	[illegible]	[illegible]	褐	赤褐/[illegible]	白雲母/12	
52	1503	上田市	宮	G8	26C	SD93	[illegible]	[illegible]	褐	赤褐	白雲母/12	
53	2604	上田市	西新	G8	1B	SD93	[illegible]	[illegible]	中灰褐	褐	白雲母/12	
54	2603	上田市	今付東	G8	2B	SD93	[illegible]	[illegible]	中灰褐	白川花崗岩	白雲母/15	外/[illegible]褐
55	2602	上田市	今付東	G8	2B	SD93	[illegible]	[illegible]	中灰褐	灰褐	白雲母/12	外/[illegible]褐
56	2601	上田市	新屋	G8	2B	SD93	[illegible]	[illegible]	中灰褐	黒褐	白雲母/12	外/[illegible]褐
57	1503	塩尻市	新屋	G8	2B	SD93	[illegible]	[illegible]	褐	灰白	白雲母/12	
58	1603	塩尻市	宮	G8	2B	SD93	[illegible]	[illegible]	褐	灰白	白雲母/12	
59	3204	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	白雲母/12	
60	1405	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	灰褐/褐	白雲母/12 [illegible]	
61	3202	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	褐	白雲母/12	
62	3203	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	褐/赤褐 褐/[illegible]	白雲母/12	2/3残存[illegible]
63	3205	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	白川花崗岩	白雲母/12	2/3残存[illegible]/[illegible]有[illegible]
64	3206	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	白雲母/12	2/3残存[illegible]
65	3305	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	白川花崗岩	白雲母/12 [illegible]	
66	3701	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	黒雲母/15	内面[illegible]/[illegible][illegible]
67	1102	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	褐/黒褐	黒雲母/12 [illegible]	
68	2102	上田市	西新	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	褐	黒雲母/白川花崗岩/14	2/3残存[illegible]
69	2102	上田市	西新	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	黒雲母	黒雲母/12	2/3残存[illegible]
70	3103	上田市	西新	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	黒雲母/白川花崗岩/白雲母/15	[illegible]/[illegible]付着
71	3003	上田市	小泉東	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	褐/白川花崗岩	白雲母/12	外面に[illegible]付
72	1404	上田市	小泉東	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	灰白	白雲母/12 [illegible]	
73	2002	上田市	宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	灰白/灰	白雲母/12	赤色顔料?
74	1303	上田市	宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	黒褐/褐	白雲母/15	外/[illegible]褐
75	1604	上田市	宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	褐	白川花崗岩	
76	7002	上田市	二本木[illegible]	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	[illegible]/褐/赤褐 [illegible]	白雲母/12	
77	3401	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	白雲母/12	平面の凸、表面へ[illegible]
78	3402	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	褐/白川花崗岩	白雲母/12 黒雲母/12	平面の凸、表面へ[illegible]
79	2001	上田市	西宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	褐/赤褐	白雲母/12	
80	7003	上田市	宮	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	褐/白川花崗岩	白雲母/12	
81	303	上田市	今付西	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	白川花崗岩	白雲母/12	外/[illegible]褐
82	1101	上田市	今付西	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	白雲母/12	内平面[illegible]
83	1402	上田市	今付東	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	白雲母/12	外平面[illegible]
84	7201	上田市	今付東	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	白川花崗岩	白雲母/12	外/[illegible]褐/内面に炭化物付着
85	1403	上田市	今付東	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	褐	白川花崗岩	白雲母/12	外/[illegible]褐
86	2201	上田市	今付西	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	褐/白川花崗岩	白雲母/12	外/[illegible]褐
87	2202	上田市	今付西	G8	25C-D	SK98	[illegible]	[illegible]	中灰褐	褐/赤褐	白雲母/12	外/[illegible]褐

第11表　第1次調査区出土遺物観察表（2）

番号	遺構番号	種・類	種類など	地区	グリッド	遺構・遺物名	出土層(cm)	遺構・遺物の特徴	形状	色調	保存状態	特記事項
98	3382	土師器	台付甕	G8	21C-0	SK98	(-19.0)	口ハケメ→胴部ヨコハケ→ケズリ 外面ハケ調整→ケズリ→ヨコハケ	壺	褐系	山陽1/12	外面煤付
99	3386	土師器	器台	G8	21C	SD97	(-18.0)	口縁部ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ 外面ハケ調整→ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ	壺	褐系	山陽1/12	外面煤付、
99	3383	須恵器	甕	G8	21B	SD97	(20.0)	口ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	壺	灰白系・黒褐系	山陽1/12	外面煤付、
91	3389	土師器	甕	G8		SD97	(-13.0) (-1.0)	口ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐系	山陽1/12	外面煤付
92	3392	土師器	甕	G8	20C-22C	SD97		ヨコナデ ヨコ	小甕	褐系	山陽	外面煤付、内面コゲ・外面煤付
93	3393	土師器	甕	G8		SD97	(-20.0)	口ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ	壺	褐	山陽完形	
94	3400	土師器	甕	G8	21C	SD97	(-20.0)	口ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐系	山陽完形	
95	4397	土師器	甕	G8	21C	SD97	(-18.0)	口ハケメ→ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ	壺	白系・黒褐・赤	山陽1/12	口縁部内面に黒色の付着
96	3391	須恵器	甕	G8		SD97	(-20.0) (-20.0)	口ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ	壺	外面白系・内面・黒系 内面	山陽完形 内面1/12	内面の黒色は炭素の吸着か
97	3402	土師器	台付甕	G8	20C-22C	SD97	(-24.0)	口ハケメ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	外面白系・内面褐系 内面	山陽完形 内面1/12	外面煤付
98	3396	砂石	砥石 転用敲石	G8	21B	SD97	(8.0) (4.5) (4.5) (1.5)	表裏・側面・端部敲打による				粗砂岩
99	3400	土師器	小型丸底壺	G8		SD97	(8.4) (8.0)	ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	壺	白系・褐	山陽1/12 外面完形	
100	3403	土師器	小甕	G8		SD97	(-19.0)	ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐	山陽1/12	
101	3405	須恵器	壺	G8	23B	SD97	(20.0)	ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ	壺	外面白系 内面灰白	山陽1/12	内面コゲ付
102	99	土師器	小甕	G5	8B	SK98	(-23.0) (6.0)	ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐	山陽1/12	
103	99	土師器	鉢	G5	8B	SK98	(-25.0)	ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・褐系	山陽1/12	
104	3408	土師器	小甕	G8		SD98	(-22.0) (-22.0)	ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	壺	褐	山陽1/12	
105	3411	土師器	小甕	G8		SD98	(-22.0) (-22.0)	ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ		褐・明赤褐	山陽1/12	
106	3414	土師器	壺	G8	24B	SD98	(-19.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・黒褐・明赤褐	山陽1/12	
107	3503	土師器	壺	G6	3C	SD99	(-24.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐系	山陽完形	
108	3504	土師器	台付甕	G6	3C	SD99	(-18.0) (8.0) (8.0)	ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・褐系	山陽1/12 外面完形	外面に煤及び黒褐色ムラ付・黒褐
109	3505	土師器	鉢	G6	3C	SD99	(-20.0)	ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・褐系・黒褐系		
110	192	弥生時代	甕形	G6	4C	SH170	(19.0) (12.0) (8.0)	ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ケズリ	壺	赤褐	山陽1/2 ほぼ	外面に煤付・口縁部上1/3黒褐
111	192	弥生時代	台付甕	G6	4C	SH170	(-18.0) (8.0)	ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ケズリ	小甕	白系・褐	山陽1/12	
112	1192	土師器	壺	G6	4C	SH170	(-19.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	壺	白系・褐	山陽1/12	外面煤付
113	1720	土師器	壺	G6	4C	SH170	(-21.0) (26.0)	ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	壺	白系・褐	山陽1/12 ほぼ1/2	外面煤付
114	1721	土師器	台付甕	G6	5C	SH170	(-15.0) (8.0) (8.0)	ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐系・白系・褐系	山陽1/12 内面1/12	外面コゲ付
115	1728	土師器	甕	G7	14B-C	SH172	(-14.0)	ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	明赤褐・白系・褐系 内面褐系・明赤褐系	山陽1/12	外面コゲ付
116	1601	土師器	甕	G7	14B-C	SH172	(-22.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・褐系	山陽1/12	
117	3601	土師器	甕	G7	14B-C	SH172	(-19.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ	壺	白系・褐系	山陽1/12	
118	1729	土師器	壺	G7	14B-C	SH172	(-17.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐系	山陽1/12	
119	3506	土師器	甕	G7	14B	SH173	(-12.0)	ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ	壺	白系・褐	山陽1/12	外面に煤付
120	1646	土師器	壺	G7	14B	SH173	(-16.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ	小甕	褐系	山陽1/12	外面に煤付
121	1602	土師器	甕	G7	14-15B	SH174	(-18.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ	小甕	白系・白系・褐系 内面褐	山陽1/12	外面に煤付・内面コゲ付
122	1601	土師器	鉢?	G7	15C	SH179	(22.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ	小甕	白系・褐	山陽1/12	
123	3501	土師器	椀A	G9-10	38C	SH106	(-23.0) (8.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ	小甕	褐	山陽1/12	内面の黒・黒色不明瞭
124	3503	土師器	皿B	G9-10	38C	SH106	(18.0) (2.5) (2.5) (2.5)	ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	壺	白系・褐 内面白系・褐	山陽1/12	
125	3505	土師器	皿A	G9-10	38C	SH106	(-7.0) (2.5)	ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・褐	山陽1/12	内面コゲ付
126	3502	土師器	椀A	G9-10	38C	SH106	(-7.0) (2.5)	ヨコナデ→ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	褐	山陽1/12	外面一部煤付
127	3601	土師器	椀A	G9	38C	SH109	(-7.0) (2.5)	ヨコナデ→ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコナデ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・褐	山陽1/12	
128	3529	土師器	鉢A型	G10	33B	SH118	(-12.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ	小甕	白	山陽1/12	内面に煤付・強度低下
129	1382	土師器	壺	G10	33B	SH118	(-20.0)	ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ→ヨコナデ	小甕	白系・白系・明赤褐系 内面白系・褐系	山陽1/12	
130	3603	土師器	壺	G10	33B	SH118	(-20.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ	小甕	白系・褐系	山陽1/12	
131	1520	土師器	壺	G10	33B	SH118	(-22.0)	ヨコハケ→ヨコナデ ヨコハケ→ヨコナデ	壺	白系・褐系	山陽1/12	

第12表　第1次調査出土遺物観察表（3）

番号	遺跡番号	区・郡	都市名	地区	グリット	遺構・遺物名等	長軸(cm)	遺構・遺物の特徴	遺土	色調	保存度	特記事項
132	1402	行政区	秀	G10	5B3	SK1138		角ハガキ 外:ハケメ→ケズリ	中々密	黒茶~黒褐	良好/12	
133	7201	新宿区	榎町	G10	5B3	SK1138	100.8 (80.0)	角:ヨコナデ 外:指ナデ(指圧痕)	粗	灰	劣悪/12	
134	6702	第四区	新宿区	G8	18~19C	SK85	110.0	角:ヨコナデ 外:指ナデ	密	明茶 内:黒褐	良好/12	
135	5301	新宿区	新区	G8	18~19C	SK85	50.0	角:ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ 外:指ナデ	中々密	灰	良好/11~12	外面に白色粒目立
136	703	千代田区	四ッ谷	G8	18~19C	SK85		角:ナデ 外:ナデ	密	明	良好/11	底に木葉痕、底面内等4月
137	702	千代田区	麹町	G8	18~19C	SK85	90.0	角:ナデ(一部ヨコナデ)→ヨコナデ 外:ナデ(ヨコナデ)→ヨコナデ→指押さえ	粗	白茶~黒褐		底いたに穿孔あり
138	2002	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	110.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	中々密	黒褐	良好/12	
139	2102	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	170.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	中々密	明茶/黒褐 内:黒褐/明茶/黒褐	良好/12	
140	9902	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	110.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:指ナデ→ケズリ	粗	淡黒褐~明茶/黒褐	良好/12	外面に指押痕
141	2101	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	110.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	中々密	灰白	良好/12	
142	7001	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	140.0	角:ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	中々密	灰黄褐	良好/17	
143	1903	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	110.0	角:指ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ 外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	中々密	灰黄褐	良好/12	
144	5701	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	110.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	粗	灰白	良好/12	
145	7301	千代田区	秀	G8	18~19C	SK85	170.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	粗	明茶/黒褐 内:白	良好/12	
146	1604	第三区	千代田	G8	8B	SK52	110.0 (50.0) (100.0)	角:指ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:指ナデ	中々密	灰白	良好/12	
147	1604	第三区	千代田	G8	8B~8B	SK52	110.0	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:指ナデ	密	灰白	良好/12	
148	4307	新宿区	榎町	G8	8B	SK52	140.0 (50.0) (100.0)	角:平行ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ	密	灰	良好/12 底部/12	
149	903	千代田区	四ッ谷	G8	8B	SK52	110.0 (50.0)	角:ナデ→ヨコナデ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ	中々密	白	良好/12	
150	6802	千代田区	四ッ谷	G8	8B	SK52	140.0 (50.0)	角:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→指押さえ	粗	灰白~明茶/黒褐	良好/12	底いたに籾圧痕あり、外面に指押痕
151	7006	千代田区	四ッ谷	G8	8B	SK52	140.0 (50.0)	角:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ	中々密	灰	良好/12	外面に指押痕あり
152	1603	第三区	四ッ谷	G8	8B~8B	SK52	110.0 (40.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:指ナデ→ヨコナデ	粗	灰	良好/12 底部/12	
153	902	千代田区	麹町	G8	8B	SK52	110.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:指ナデ→ヨコナデ→ケズリ	中々密	白茶~黒褐	良好/12	
154	7806	千代田区	小石川	G8	8B	SK52	130.0	角:ヨコナデ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ	密	白茶~黒褐	良好/17	
155	2801	千代田区	麹町区	G8	8B	SK52	170.0	角:ヨコナデ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ	粗	白茶~明茶~白茶~黒	良好/12	
156	902	千代田区	四ッ谷	G8	8B	SK52	(80.0) (90.0) (80.0)	角:平行ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:平行ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	中々密	明茶	良好/17 底部/17	
157	9406	千代田区	上野	G8	2B	SK56	(90.0) (90.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	粗	白茶~黒褐	良好/12	底部に木葉痕
158	302	千代田区	四ッ谷	G10	5B3	SK120	110.0 (90.0)	角:ナデ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白茶~黒褐	良好/12	底部に木葉痕、外面に指押痕
159	104	千代田区	四ッ谷	G8	8B	SK51~SK55	170.0 (90.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	密	明	良好/12	底部に木葉痕(下駄痕)
160	301	千代田区	四ッ谷	G8	8B	SK51~SK55	110.0 (90.0)	角:指ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	密	明	良好/17	底部に木葉痕(下駄痕)あり
161	6001	千代田区	四ッ谷	G8	5B	SK51~SK55	140.0	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白茶~黒	良好/12	
162	8002	千代田区	四ッ谷	G8	5B	SK51~SK55	110.0	角:指ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白茶~黒	良好/12	
163	6003	千代田区	四ッ谷	G8	5B	SK51~SK55	170.0	角:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白茶~黒	良好/12	
164	6004	千代田区	四ッ谷	G8	4B	SK51~SK55	110.0	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白	良好/12	
165	301	千代田区	四ッ谷	G8		SK51~SK55	140.0 (80.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白	良好/12 底部/12	底部に木葉痕(下駄痕)
166	101	新宿区	四ッ谷	G8		SK51~SK55	140.0 (70.0) (110.0)	角:平行ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ 外:ヨコナデ→ヨコナデ	密	灰白	良好/12 底部/12	外面に指押痕
167	4304	千代田区	秀	G8	4B	SK51~SK55	140.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ケズリ	中々密	淡黒褐	良好/12	底部の凸、平坦部
168	9903	千代田区	秀	G8		SK51~SK55	110.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白茶~黒褐	良好/12	外面に黒化物付着
169	6902	千代田区	秀	G8		SK51~SK55	170.0	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	明茶/白茶~黒褐 内:白茶~黒褐	良好/12	外面に指押痕
170	9603	千代田区	北千住	G8		SK51~SK55	110~	角:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	白茶~黒褐		
171	4302	千代田区	四ッ谷	G8	1B	SK55	140.0 (100.0) (90.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ	中々密	白	良好/12 底部/12	一部焼成している
172	703	千代田区	四ッ谷	G8		SK55	110.0 (80.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ→指押さえ	粗	白	良好/17	底部に木葉痕あり
173	2301	千代田区	四ッ谷	G8	1B	SK55	140.0 (100.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ	中々密	白	良好/12	外面、底部にスス不明瞭
174	202	千代田区	四ッ谷	G8	3B	SK55	140.0 (100.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ	粗	白	良好/12	外面に黒斑(ススか)
175	1103	千代田区	四ッ谷	G8	1B	SK55	140.0 (80.0)	角:ヨコナデ→ヨコナデ→ケズリ→ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヨコナデ	中々密	白	良好/12	全体に摩耗激しい

第13表　第1次調査出土遺物観察表（4）

番号	実測番号	種・質	器種など	地区	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
176	1105	須恵器	杯B蓋	G5		SD35	(口)15.2 (高)3.7	[illegible]	やや粗	灰白	口縁1/12	天井部新羅か?
177	4103	須恵器	杯B	G5	3B	SD36	(口)12.2 (高)4.6 (底)10.2	[illegible]	粗	灰白	口縁1/12	
178	4104	須恵器	杯B	G5	3B	SD36	(口)15.4 (高)[illegible] (底)11.8	[illegible]	やや粗	灰白	口縁3/12 底部3/12	底部にヘラ描きあり
179	6403	土師器	甕	G5		SD36	(口)16.6	[illegible]	密	浅黄橙	口縁2/12	
180	7001	土師器	甕	G5	1B	SD35	(口)26.0	[illegible]	やや粗	にぶい橙・浅黄橙	口縁3/12	
181	4401	土師器	把手付鍋	G5	3B	SD35	(口)26.6	[illegible]	粗	橙	口縁3/12	
182	4402	土師器	把手付鍋	G5	1B	SD35	(口)36.6	[illegible]	粗	橙	口縁1/12	
183	6203	土師器	甕	G5		SD36	(口)16.8	[illegible]	粗	灰黄褐・にぶい黄橙	口縁2/12	
184	7101	須恵器	[illegible]	G5	1B	SD36	(口)11.6	[illegible]	やや粗	灰白・灰	底部4/12	底部にヘラ記号あり
185	6201	土師器	甕	G5	2B・3B	SD36	(口)27.6	[illegible]	密	にぶい黄橙・にぶい黄褐	口縁3/12	
186	2904	土師器	杯A	G5	9C	SD31	(口)16.7 (高)4.6	[illegible]	密	にぶい橙・橙	口縁6/12	底部にヘラ描きあり・外面に煤付着
187	2905	土師器	杯A	G5	9C	SD31	(口)15.7 (高)3.3	[illegible]	粗	橙	口縁4/12	底部にヘラ描きあり
188	6302	土師器	皿A	G5	6C	SD31	(口)16.8	[illegible]	粗	にぶい黄橙	口縁3/12	内面に炭化物あり
189	103	須恵器	杯B蓋	G5	9B	SD31	(口)15.6 (高)3.1	[illegible]	粗	灰白	口縁完存	
190	2902	土師器	甕	G5	9C	SD31	[illegible]	[illegible]	粗	にぶい黄褐・褐灰	口縁1/12	
191	1203	土師器	皿	G5		SD31・32	(口)11.6 (高)2.3	[illegible]	密	橙	口縁11/12	
192	2901	土師器	甕	G5	9C・9B	SD31・34	(口)21.0	[illegible]	密	にぶい黄橙・浅黄橙	口縁2/12	
193	6303	土師器	皿A	G5		SD32	(口)18.6 (高)1.7	[illegible]	粗	橙	口縁3/12	底部にヘラ記号
194	3307	土師器	高杯	G5	1C・2C	SD32	(脚)8.8	[illegible]	粗	橙	脚部10/12	
195	2804	土師器	甕	G5	6C	SD32	[illegible]	[illegible]	粗	灰黄褐・にぶい黄橙	口縁4/12	
196	4101	土師器	甕	G5	7B	SD32	(口)16.6	[illegible]	粗	浅黄橙	口縁3/12	
197	3301	土師器	甕	G5	6C	SD32	(口)16.0 (高)15.3	[illegible]	密	にぶい橙	口縁・体部2/12	外面に煤付着
198	6902	土師器	甕	G5	2C	SD32	(口)18.1	[illegible]	やや密	にぶい黄橙	口縁4/12	
199	3602	土師器	壺	G5	4C	SD32	(口)15.5	[illegible]	粗	浅黄橙	口縁3/12	
200	2802	土師器	甕	G5	6C	SD32	(口)24.0	[illegible]	粗	浅黄橙	口縁2/12	
201	2201	土師器	甕	G5	5C	SD32	[illegible]	[illegible]	やや粗	外:にぶい黄橙 内:灰白	口縁2/12	
202	4201	土師器	把手付鍋	G5	7B	SD32	(口)26.1	[illegible]	やや粗	橙	口縁3/12 底部6/12	外面と底部の内面に煤付着
203	3503	土師器	杯A	G5	5C	SD32・SK34	(口)13.2 (高)2.8	[illegible]	密	橙	口縁4/12	底部にヘラ記号
204	6603	土師器	皿A	G5	5C	SD32・SK34	(口)16.7 (高)2.1	[illegible]	やや密	橙	5/12	
205	303	土師質土器	椀	G5	5C	SK54	(口)15.8 (高)5.0 (高台)6.2	[illegible]	粗	にぶい橙	口縁9/12 高台完存	[illegible]
206	3801	土師器	鍋	G8	17C	SD43	(口)29.6	[illegible]	粗	にぶい黄橙・浅黄橙	口縁2/12	内面に炭化物付着
207	3905	須恵器	杯身	G8	17C	SD48	[illegible]	[illegible]	粗	灰白・灰	受部1/12	
208	3901	土師器	甕	G8	17C	SD48	(口)33.6	[illegible]	粗	浅黄橙	口縁2/12	
209	6705	土師器	小型鉢	G5	11C	SD33	(口)13.3 (高)5.5	[illegible]	やや密	にぶい橙	口縁2/12	
210	6703	土師器	杯A	G5	11C	SD33	(口)19.6 (高)4.6	[illegible]	やや密	橙	口縁3/12	暗文不明
211	6602	土師器	皿A	G5	11C	SD33	(口)21.1 (高)1.8	[illegible]	やや粗	橙・にぶい橙	口縁1/12	内面の暗文不明
212	4302	土師器	高杯	G5	7B	SD33	(脚)10.7	[illegible]	粗	橙	脚部2/12	柱側にキザミ入れている
213	6402	土師器	皿	G5	9B	SD33	(口)16.8	[illegible]	粗	浅黄橙	口縁1/12	混入か?
214	6202	土師器	甕	G5	7B	SD33	(口)35.6	[illegible]	粗	にぶい黄橙・浅黄橙	口縁1/12	
215	3901	土師器	甕	G5	10B	SD33	(口)29.6	[illegible]	密	にぶい黄橙	口縁1/12	
216	3801	土師器	鍋	G5	10B	SD33	(口)41.3	[illegible]	密	にぶい橙	口縁1/12	外面に薄く煤付着
217	6201	土師器	台付皿	G5	13C	SD34	(口)15.9	[illegible]	粗	灰白	口縁2/12	S字状口縁
218	401	灰釉陶器	椀	G5		SD34	(口)[illegible] (高)[illegible] (底)6.3	[illegible]	粗	灰白	口縁1/12 高台完存	
219	6602	須恵器	杯A	G5	12D	SD34	(口)11.6	[illegible]	粗	灰	口縁9/12	

第14表　第1次調査区出土遺物観察表（5）

番号	実測番号	種・質	器種分類	地区	グリット	遺構・層名等	遺存度(%)	調整・技法の特徴	新旧	色調	焼成度	特記事項
220	5960	土師器	杯A	G5	BC	SD34	100以上 (復元)	外:ナデ/ヘラケズリ/ヨコナデ 内:ナデ/ヘラミガキ	新	黒褐/黄灰褐	白磁2/12	
221	6001	土師器	皿T形高	G5	BB	SD34	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ	新	灰黄褐/にぶい黄橙	白磁1/17	
222	6201	須恵器	甕	G1～B		SD24	100以上	外:平行叩き 内:平行叩き	不明	黒	白磁1/12	
223	6301	土師器	鍋	G1～A	11B	SD24	100以上	外:ナデ/ヘラケズリ/ヨコナデ/ヘラミガキ 内:ヨコナデ/ヘラミガキ/ヘラ切り	不明	にぶい黄橙	白磁3/12	鍋?/器台 外面に煤付着
224	6301	土師器	杯A	G3	3B	G3SD31 pit 2	100以上 (復元)	外:ナデ/ヘラミガキ 内:ナデ/ヘラミガキ	不明	褐灰褐	白磁1/12 (復元) (復元)	焼成は不良 表面剥落 内面に煤付着
225	165	土師器	杯A	G5	BB	p08(SB131)	100以上 (復元)	外:ナデ/ヘラミガキ 内:ナデ/ヘラミガキ	新	黒	白磁3/12	焼成は不良(復元内容不明)
226	201	土師器	杯A	G5	BB	p08(SB131)	100以上 (復元)	外:ナデ/ヘラミガキ/ヘラケズリ 内:ナデ/ヘラミガキ/ヘラ切り	新	黒	白磁1/12	焼成は不良(復元)
227	3865	土師器	皿	G5	BB	p08(SB131)	100以上 (復元)	外:ナデ/ヘラケズリ/ヨコナデ/ヘラ切り 内:ナデ/ヘラミガキ/ヘラ切り	新	にぶい橙	白磁1/17	
228	3882	土師器	鉢	G5	BB	p08(SB131)	不明(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ	新	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内系(にぶい黄橙を呈する)
229	2703	土師器	高杯			住居跡No.7	残存12.2	外:ヨコナデ/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	灰白/にぶい橙	黒斑 定不	
230	2709	須恵器	壺類			竪穴住No.7	残存(復元) (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	灰白/にぶい黄橙	白磁2/12	焼成良好
231	2710	土師器	甕			竪穴住No.7	(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ 内:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ	不明	橙/にぶい橙	白磁1/12	内面に炭化物付着
232	2711	土師器	甕			竪穴住No.8	(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ 内:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ	不明	黒褐/にぶい橙	白磁1/12	外面に煤付着
233	3001	土師器	壺			竪穴住No.8	100以上	外:ヨコナデ/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ/ヘラ切り	不明	黒褐/橙	白磁1/17	
234	3002	土師器	甕			竪穴住No.12	100以上	外:ナデ/ヘラケズリ/ヨコナデ 内:ナデ/ヘラケズリ/ヨコナデ	不明	褐/黒褐	白磁10/12	
235	6202	土師器	鉢	G1		包含層	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ 内:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ	不明	灰白/黒	白磁2/12	受口鉢
236	6101	土師器	小型鉢	G1		包含層	100以上 (復元)	外:ナデ/ヘラケズリ/ヨコナデ 内:ナデ/ヘラケズリ/ヨコナデ	新	黒褐/橙	白磁1/12	
237	6202	土師器	杯G	G1		包含層	100以上 (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ 内:ナデ/ヘラケズリ/ナデ	不明	にぶい黄/黒	白磁3/12	
238	6303	土師器	高杯	G1		包含層	残存(復元) (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ヘラミガキ/ナデ	新	黒	黒斑10/12	
239	5401	土師器	土製品	G1	9B	河川跡	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ 内:ヨコナデ/ヘラケズリ/ナデ	不明	灰黄褐/黒	白磁3/17	
240	5406	土師器	鉢	G1	3B	河川跡	100以上 (復元) (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ/ヘラ状工具ナデ 内:ヨコナデ/ヘラミガキ/ナデ	新	黒/灰白	白磁2/12 ※ 白磁2/12	山茶碗 畿内
241	6206	須恵器	鉢	G1		包含層	残存(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	黒褐	白磁3/12	畿内系(焼行 胎土 内面研磨)
242	6208	土師器	鉢	G1		包含層	残存(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内 内面研磨
243	6209	土師器	鉢	G1		包含層	残存(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ/ヘラ切り/ナデ	不明	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内
244	6210	土師器	鉢	G1		包含層	残存(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ/ヘラ切り/ナデ	不明	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内 内面に煤付
245	6101	土師器	鉢	G1		河川跡	残存(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ/ヘラ状工具ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内
246	6103	土師器	鉢	G1		河川跡	残存(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内
247	6203	土師器	鉢	G1		包含層	残存(復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内系(焼成 胎土 内面研磨)
248	6205	土師器	鉢	G1	1B	包含層	100以上 (復元) (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内系(焼成 胎土 内面研磨)
249	6204	土師器	鉢	G1	1B	包含層	100以上 (復元) (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内系(焼成 胎土 内面研磨)
250	6207	土師器	鉢	G1		包含層	100以上 (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内系(焼成 胎土 内面研磨)
251	5402	土師器	小形鉢	G2		河川跡	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	黒	白磁1/17	
252	5404	土師器	小形鉢	G2	1B	河川跡	100以上 (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	灰黄褐/黒	白磁3/12	
253	6005	土師器	杯A	G2		包含層	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	にぶい黄橙	白磁3/12	内面に炭化物?
254	6101	土師器	鉢	G2		包含層	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ/ヘラ状工具ナデ/ヘラ状工具ナデ/ヘラ状工具ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	にぶい黄橙	白磁3/12	
255	6102	土師器	鉢	G2	1B	包含層	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	灰白	白磁3/12	山茶碗 畿内
256	6103	土師器	小形鉢	G2		包含層	100以上 (復元) (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	灰白	白磁2/12 ※ 白磁2/12	焼成 内面に炭化物
257	6205	土師器	鉢	G2		河川跡	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	灰白	白磁3/17	山茶碗 畿内系(焼成 胎土 内面研磨 外面に煤付着 口縁部に炭化物 (復元))
258	6006	土師器	壺A	G3		河川跡	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ/ヘラ状工具ナデ/ヘラ状工具ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	褐	白磁3/12	
259	203	土師器	杯	G3		包含層		外:ヨコナデ/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	不明	橙	白磁3	焼成に歪み付 口縁
260	6906	土師器	土錘	G3		包含層	100以上 (復元) (復元)	指ナデ(ヨコ)/ヘラ状工具による溝	新			重311.37g
261	6104	須恵器	鉢	G3		包含層	100以上	外:ヨコナデ/ヘラケズリ/ヘラミガキ/ヘラ切り/ナデ 内:ヨコナデ/ナデ	新	灰白	白磁1/12	焼成良好
262	3003	石製品	紡錘	G3	1BC	包含層	残存(復元) (復元) (復元)	側面:研磨 研磨痕あり			残存長 ※	残存重 約370g
263	304	鉄製品	小刀?	G3	3C	河川跡	100以上 (復元) (復元)	外:ヨコナデ/ヘラケズリ 内:ヨコナデ/ヘラケズリ	新	灰白/黒褐	錆膨れ(不明) ウキ	

第15表　第1次調査区出土遺物観察表（6）

番号	発掘番号	遺跡	器種/法量	時代	グリッド	遺構・層位名等	量(個or[illegible])	特徴・観察のポイント	保存	出土層	現状度	特記事項
264	3396	上海西	小皿/底径[illegible]	GS	9J	包含層	[illegible]	[illegible]	良	黒褐・褐灰層	白磁1/12	
265	3397	江南西	椀/[illegible]	GS	7D	包含層	[illegible]	[illegible]	良	黒褐・灰	白磁2/12 白磁1/12	
266	3398	上海西	台付鉢	GS	8BC	包含層	[illegible]	[illegible]	良	褐灰層・黒灰	白磁1/12	内面[illegible]、外面に煤付着
267	4001	上海西	壺	GS	7H	包含層	[illegible]	[illegible]	良	黒灰・褐	白磁1/12	
268	4296	千鶴氏	一鉢	GS	10C	包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰・褐灰層	2/12	底径8.7cm
269	3865	千鶴西	椀A	GS	7H	河川層	[illegible]	[illegible]	良	褐	白磁8/12	
270	4300	上海西	椀A	GS	8D	包含層	[illegible]	[illegible]	良	黒灰・褐	白磁4/12	内面に[illegible]付着
271	4000	上海西	椀A	GS	6H-5H	包含層	[illegible]	[illegible]	良	褐	白磁2/12	
272	3881	西北海	椀B	GS	7H	包含層	[illegible]	[illegible]	良	黒灰	白磁6/12 白磁2/12	
273	3882	西北海	椀B	GS	8H	包含層	[illegible]	[illegible]	良	黒灰・褐	白磁2/12 白磁2/12	底径7
274	4306	千鶴西	壺	GS	4H	包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	褐灰層・黒灰・褐灰層・褐灰	白磁3/12	
275	3867	千鶴西	壺	GS	7H	河川層	[illegible]	[illegible]	悪	黒灰・褐灰	白磁2/12	
276	4002	上海西	瓶	GS	6H-5H	包含層	[illegible]	[illegible]	良	褐灰層	白磁3/12	
277	1101	上海西	鉢	GS		包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	褐灰層・黒灰・褐灰	白磁2/12	
278	360	上海西	椀G	GT		包含層	[illegible]	[illegible]	良	褐灰・黒灰・褐灰・褐灰層	白磁3/12	外面に[illegible]付着
279	450	西北海	椀K	GT	12H	包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰・褐	白磁12/12	
280	480	風早西	壺	GT		河川層	[illegible]	[illegible]	やや悪	灰白	白磁3/12	
281	450	千鶴西	壺	GT		河川層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰・褐	白磁3/12	
282	4002	上海西	下手付鉢	GT		包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰・褐	白磁1/12	
283	4502	千鶴西	椀H	GT-8H	8H-7HK	包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	褐	白磁1/12	内面に[illegible]痕あり、底径7.8cm
284	7101	上海西	台付鉢	GR	25C	包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	褐灰	白磁2/12	外面に煤付着
285	1400	上海西	台付鉢	GR	A	包含層	[illegible]	[illegible]	悪	黒・黒褐・褐灰・褐灰層	白磁2/12	外面に煤
286	7103	千鶴西	台付鉢	GR	24C	包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰・褐	やや[illegible]	外面に煤付着、一部[illegible]
287	7104	千鶴西	台付鉢	GR	25C	河川層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰・褐灰・黒灰・褐灰層	白磁7/12	外面に煤
288	7006	上海西	椀C	GR	23C	河川層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰	白磁3/12	
289	7101	江南西	椀C	GR	23C	包含層	[illegible]	[illegible]	やや悪	黒灰	白磁1/12 白磁1/12	
290	3102	西北海	椀C	GR	22C	包含層	[illegible]	[illegible]	良	灰白	白磁[illegible]/12 2/12	
291	4403	西北海	椀C	GR	20C	包含層	[illegible]	[illegible]	良	灰	白磁[illegible]/12 3/12	
292	303	千鶴西	底椀F	GR	23B	包含層	[illegible]	[illegible]	悪	黒灰褐	青磁底 7/12	
293	1007	江南西	椀E	GS	7BC	河川層	[illegible]	[illegible]	やや悪	灰	白磁1/12	
294	1102	上海西	椀E	不明	7HK	包含層	[illegible]	[illegible]	良	褐	白磁1/12	

第16表　第1次調査区出土遺物観察表（7）

Ⅴ　調査のまとめと検討

1　時期別の遺跡変遷

４次にわたる発掘調査により、琵琶垣内遺跡は縄文時代頃に遺跡の兆候を見せ、中世前期にまで至る遺跡であることが判明した。当遺跡全体の動向を知るために、まずは調査成果に即して大まかな変遷を辿っておこう。なお、報告書は刊行されていないが、すでに調査が終了している第３次調査の成果についても必要に応じて触れておく。

縄文時代　遺構は見られないが、中期から晩期にかけての土器片が少量見られた（第１次）。当遺跡のやや上流にある山添遺跡からは前・中期の竪穴住居などが確認されている[11]が、人の生活痕跡は当遺跡にまでは及んでいないものと考えられる。

弥生時代　前期の遺物は見られない。中期中葉から後葉頃になると、少量ながら比較的良好な土器が見られる（第１次）。とくにまとまった出土ではないが、周辺に小規模な居住地が存在する可能性が考えられる。また、当遺跡の丘陵寄りでは方形周溝墓が見られ（第４次）、丘陵寄りに集落の展開していることが推測される。これは、後期に至って琵琶垣内遺跡の西に隣接する天王山遺跡[12]に集落が形成されることへとつながっている可能性がある。

古墳時代　前期初頭頃の土器が、当遺跡内を北流する流路内からまとまって出土している（第１次）。この流路は弥生時代後期頃に開削された可能性が高いもので、最終的には古墳時代後期頃まで一部機能を残すものの、後述するように当該時期に本来の機能をほぼ停止している。前期段階の竪穴住居は今のところ確認されていないが、先述の天王山遺跡では前期初頭頃までは集落の形成が確認できる。なお、山添遺跡からも当該時期の溝が確認されている。

中期の様相は判然としないが、後期前葉頃になると、竪穴住居が確認できる（第１次）。当遺跡で明確な居住を示す最初の時期といえる。ただし、集落は数件程度の小規模なものと考えられる。

飛鳥・奈良時代　飛鳥時代（７世紀）のものは少ないが、奈良時代（８世紀）になると、遺跡全体に大量の遺構・遺物が広がる。竪穴住居・掘立柱建物・井戸などが確認でき（第１・３・４次）、集落の形成が明らかである。後述のように、奈良時代末期頃には「厨」の文字が見える墨書土器が多く出土しており（第１次）、官衙との関係が想定できる。

平安時代　この時期の前半期には、前代から継続する集落が形成されている（第１次）が、その規模はやや小さくなっているようである。後半期にも建物の存在は確認できる（第１次）が、集落の広がりは不鮮明となる。西方の丘陵裾部には、導水路と思われる溝も開削されている（４次）。

鎌倉時代以降　13世紀前半頃までの土器類が確認できる（第１・４次）が、集落の状況はやはり明確ではない。13世紀中葉から15世紀代の土器類は出土していないため、この段階の当地は集落地としては利用されなかったものと考えられる。なお、15世紀末から16世紀にかけての集落は、隣接する山添遺跡で確認されている。

2　古墳時代以前の大溝とその意義

a　導水路としての大溝

琵琶垣内遺跡では、ＳＤ28・29・30・96・97などの遺跡を北流する溝が確認された。古墳時代以前の時期で、当遺跡を最も特徴付ける遺構といってよいであろう。これらの溝は、次のような特徴がある。

①断面形は、整った逆台形ないしはＶ字形を呈する。
②埋土は砂礫層で構成されており、水流のあったことが確実である。
③台地上の黒ボク土を開削されている。
④溝は蛇行し、かつ、複数の溝が交わらずに平行して走っている。

以上のことから、これらの溝は人工的に開削されたものであり、その機能は水路と考えてよいであろう。平行して走る複数の溝という状態からは、これらはかなり計画的な意味を持って開削されたと考えられる。

水路と見た場合、基本的には導水路と考えられる。第１・４次の調査区土層を見ると、砂礫層の上部に

黄色系粘質シルトと黒色土（黒ボク）の堆積が見られる。この様相は、やや粘性が強いものの、明野台地の一角である斎宮跡の堆積土と大きな差はないように思われる。つまり、琵琶垣内遺跡の地質は、単純な氾濫平野のそれではなく、台地縁辺部を含んでいる可能性が高いことを物語っている。[3] このように見ると、湧水の少ない地に対する灌漑用水路として開削されたのがこれらの溝であり、やや上流の櫛田川から引水し、下流の灌漑用として利用されたものと見られる。

以上の状況を前提にすれば、ＳＤ97の規模がひときわ大きいことの意味が読み取れる。つまり、ＳＤ97は幹線導水路であり、そこから支線として分かれるのがＳＤ96・28などと考えられるのである。

では、溝を蛇行させることにはどのような意味があるのであろうか。これについては、水流を緩やかにするという目的も考えられるが、ＳＤ28が最も東に膨らむ位置（Ｇ４区）は、地形的に見ると西側丘陵尾根が突出する位置に相当しているため（第２図参照）、地形的な制約も絡んでいると考えられる。

以上のように、琵琶垣内遺跡で確認された大溝は、灌漑用導水路と見られる。したがって、地形的に見て、調査区付近あるいはやや下流に水田などの可耕地が存在するものと推測できる。

b　大溝の時期

出土遺物の状況から判断すると、大溝は弥生時代中期頃に開削された可能性も考えられるが、遺物量が少なく、断定できない。遺構に入る遺物の中心が古墳時代前期後半であることから、おそらくは弥生時代後期頃から古墳時代前期前半にかけての時期に開削され、古墳時代前期前半の段階では機能していたものと考えられる。

3　古墳時代前期の土器類

この時期の土器は、ＳＺ98に良好な資料がある。この遺構出土土器は、Ｓ字甕では赤塚次郎氏分類[4]のＣ・Ｄ類を中心としている。高杯は脚柱部が短く、緩やかに外反しながら開くもので、「堀田式」の特徴は備えていない。Ｓ字甕には若干の型式差が見られるものの、出土状況から見る限り、廃棄時の一括性は高く、前期中葉頃の良好な資料として扱うことができるであろう。

この土器群に後続するのが、古帷通りＢ遺跡井戸ＳＥ53出土資料[5]である。この土器群も一括性が高いが、高杯が欠如している。そのため、明確に判断しにくいが、Ｓ字甕はＤ類である。古帷通りＢ遺跡の資料は、雲出川流域に見られる「堀田式」に併行するものと考えられ、前期後半のものと見てよいであろう。

琵琶垣内遺跡では第１次調査の66・79などのような、近畿地方との関係を伺わせる資料がある。古帷通りＢ遺跡の資料中にも、近畿地方の布留系甕が３点出土している。これらの布留系土器類は、布留式そのものではないであろうが、極めて密接なつながりを想定させるものである。

この一方、雲出川流域では、雲出島貫遺跡[6]や堀田遺跡[7]などに布留式土器そのものが見られるものの、いずれも前期前半頃のものである。前期後半の雲出川流域では、布留式を融合させた土器群（「堀田式」[8]）の成立が見られるものの、琵琶垣内遺跡を含む櫛田川流域では、「堀田式」と同様な融合現象は確認できない。

以上のことは、同じ伊勢中部地域とはいえ、雲出川流域と櫛田川流域の土器相は同一視できないことを示唆すると考えられる。それは、とくにＳ字甕Ｄ類併行期以降の時期に顕在化するように思われる。

櫛田川流域における古墳時代前期の土器類は、その初頭頃の資料は充実している[9]ものの、それ以降の資料は少ない。資料が充実した際には、東海地域というマクロレベルでの異同だけでなく、伊勢地域内での異同をも視野に入れた検討を深化させる必要があろう。

4　墨書土器「下厨前」と古代の集落

a　古代伊勢道・飯野郡条里と琵琶垣内遺跡

琵琶垣内遺跡は、古代の国郡郷制では飯野郡櫛田郷内に相当すると考えられる。隣接する多気郡では、斎宮跡をはじめとする古代の遺跡が多数調査されているものの、飯野郡内の古代遺跡は、堀町遺跡以外はあまり知られていない。琵琶垣内遺跡を代表する時期がこの時期であり、この点からも、当遺跡は注目できる資料を提示している。

この時期の当遺跡における集落は、出土土器を見る限り、奈良時代前期（斎宮編年[20]Ⅰ－３、都城編年[21]では平城Ⅲ併行期）にはじまり、奈良時代末頃（斎宮Ⅰ－４）にそのピークを迎え、平安時代前期（斎宮Ⅱ－２）頃に衰退しはじめる、という状況と考えられる。

当遺跡の状況を考えるなかで看過できないのが、古代伊勢道と飯野郡条里の存在である。古代伊勢道は飯野郡条里方向に合致するもので、遺跡北部を東西に貫く旧参宮街道がその跡地と考えられている[22]。両者の主軸はＥ15°Ｓである。

伊勢道および飯野郡条里に合致する主軸となる建物にはＳＢ131・138・139・146があり、いずれも第１次調査区である。このうち、時期的に最も遡ると考えられるのはＳＢ146で、奈良時代の範疇で考えられる。所属時期が明確なのはＳＢ131で、これは平安時代後期末頃である。以上のことから、古代伊勢道および飯野郡条里に合致する建物は、奈良時代から平安時代後期末頃までの間に見られるということができる。ただし、検出した建物には、古代伊勢道および飯野郡条里に合致しないものの方が多いことには、注意が必要である。

第１次調査区のＧ３区とＧ５区間は、古代伊勢道のすぐ近隣にあたるが、この間は発掘調査されていない。残念と言うほか無いが、少なくとも出土遺物が減少していた区域だったのであろう。これらの状況も踏まえれば、琵琶垣内遺跡と伊勢道とは、それほど密接に関連しあっているとは言い難いと言わざるを得ない。

b　出土土器の傾向

古代における琵琶垣内遺跡の出土土師器は、斎宮跡で出土する土器類にほぼ一致している。とくに杯皿類・甕類の傾向は、同一傾向を示すと見てよいであろう。第１次調査区の187・193・203・211などの土師器杯皿類に見られる焼成前ヘラ記号は、斎宮跡第７次調査区のＳＫ8740・8782に見られる記号[23]と類似したものである。

斎宮跡出土の土師器類は、大きくは古代の有尓郷域内で生産されているものと考えられる。したがって、琵琶垣内遺跡は有尓郷産土師器の供給地域と考えて大過ないと考えられる。

有尓郷産土師器については、この地内で数多く確認されている二等辺三角形状を呈した土器焼成遺構に注目が集まり、生産遺構の集中という側面からの研究深化が著しい[24]。これに関わり、有尓郷産土器と考えられる６・７世紀頃の丸底甕に関する分布の検討も深化を見せている[25]。しかし、８世紀以降の有尓郷産土師器に関する分布論的検討はほとんど深化していない。これは、この時期の土器研究が斎宮跡で自己完結している状況も大いに関係している。近年の調査によると、有尓郷産土師器は、おばたけ遺跡（旧志摩国、三重県鳥羽市）[26]や西肥留遺跡（旧伊勢国一志郡、三重県松阪市）[27]からも出土が確認できる。

有尓郷産土師器は、その色調や口縁部形態など、比較的認識しやすい要素が揃っており、分布を追いかけるには適した資料である。古代の土師器分布域を検討することは、有尓郷産土師器の供給エリアを知ることはもちろん、古代における「流通」の問題にまで踏み込むことができる非常に重要な課題であると認識する。

c　墨書土器「下厨前」

琵琶垣内遺跡では、第１次調査区を中心に多数の墨書土器が出土している。なかでも、「下厨前」・「厨前」・「厨酒」などといった墨書が見られることが注目できる。土器の示す時期は、斎宮Ⅰ－４期からⅡ－１期に併行する時期であり、概ね８世紀末から９世紀初頭頃と見てよい。

「厨」は、一般的には厨房を示す語であるが、ここでいう厨とは「御厨」、すなわち、政務的・宗教的機関への貢納品を生産する地を示していると考えられる。具体的には、神宮ないしは斎宮寮に関わる御厨に関係すると考えるのが自然であろう。

「厨」墨書土器の出土地点は、第１次調査区のＧ５区に集中しており、隣接する第４次調査区での出土は見られない。つまり、かなり局地的に出土しているといえる。なお、第１次調査区のＧ５区付近は、小規模ながらも建物跡が確認されている場所である。

さて、飯野郡地内の神宮領御厨には「櫛田河原御厨」がある。斎宮寮御厨は明確ではない。櫛田河原御厨は、『神宮雑例集』[28]・『神鳳鈔』[29]・『外宮神目録』[30]などに記載があり、外宮領と考えられる。

櫛田河原御厨に関係する可能性がある地名とし

て、山添町付近にある「上川原、下川原」の小字が注目できる。この小字地名が御厨と関係しているとするならば、当遺跡とは少し距離が離れており、直接結びつけることは妥当ではない。

以上のように、文献史料に記載された御厨にそのまま発掘資料を当てはめるのは無理がある。したがって、墨書土器「下厨前」が具体的に何を示すのかは、今のところ結論を保留せざるを得ないのが現状である。

しかし、墨書された土器がいずれも有尓郷産土師器と見られることや、当遺跡と斎宮跡とが古代伊勢道で直接つながっていることを踏まえるならば、「下厨前」が斎宮寮に関係した施設を示す可能性は残しておくべきであろう。いずれにしても、当遺跡は神宮ないしは斎宮寮に貢納する供物の供給地として機能していたものと考えておく。

5　琵琶垣内遺跡発掘調査の意義

琵琶垣内遺跡の発掘調査は、今回報告する２次分を含めて合計４次にわたっている。旧飯野郡内の平地部を調査した事例としては、極めて大規模なものといえる。

発掘調査によって明らかとなったのは、主に古墳時代前期前後の導水路、古墳時代後期の集落跡、奈良時代後期から平安時代後期にかけての集落跡である。この３時期については、近隣の遺跡との関係を、とくに注目していく必要があろう。

古墳時代前期の動向は、近年不時発見され、発掘調査の結果、弥生時代後期を中心とする大規模環濠集落であることが判明した村竹コノ遺跡との関係が注目できる。弥生集落の廃絶期に前後して形成される大規模導水路は、飯野郡低地部、とくに櫛田川近傍地域の開発と密接に関わっていると考えられる。

琵琶垣内遺跡の古代集落は、まさにこのような動向を背景としたものと見ることができる。すなわち、古墳時代のはじまり頃を契機に、櫛田川近傍地域の開発が進展していった。琵琶垣内遺跡とは櫛田川を挟んで対岸にあたる古曽通りＢ遺跡で確認された精緻な井戸も、大局的にはこの状況と無縁ではなかろう。そしてその後に、それに目を付けた神宮ないしは斎宮寮によって、墨書土器「下厨前」に代表される供物供給地として展開していったのではないだろうか。

琵琶垣内遺跡の発掘調査成果をもとに、この地で人々がいかに暮らしてきたのかを以上のように見てみた。もちろん、人の歴史が平穏に進歩のみを示すものではなく、その間には様々な苦難があったに違いないが、それを克服することで、今へと繋がっていることは確かであろう。

今後は、この発掘調査資料から得た貴重な情報をもとに、いかなる歴史を紡いでいくのかが我々に問われているのである。　（伊藤）

＜註＞

（1）平成13年度三重県埋蔵文化財センター調査

（2）三重県埋蔵文化財センター「天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告」（2006年）

（3）地質学的な見地からは、当地は氾濫平野にあたるとされている（建設省国土地理院『土地条件調査報告書（伊勢湾西部地域）』1969年）

（4）赤塚次郎「廻間式土器」（『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990年）

（5）三重県埋蔵文化財センター「古曽通りＢ遺跡・古曽通り古墳群発掘調査報告」（2000年）

（6）三重県埋蔵文化財センター『嶋抜』Ⅲ（2001年）

（7）三重県埋蔵文化財センター「堀田第３－５次調査」（2002年）

（8）伊藤裕偉「伊勢における古墳時代前期後半の土師器に関する覚書」（『研究紀要』第14号　三重県埋蔵文化財センター　2005年）

（9）この時期の資料は、近年調査が進展している村竹コノ遺跡（松阪市上川町、三重県埋蔵文化財センター調査）で良好である。

（10）斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ（2001年）

（11）都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

（12）古代伊勢道と飯野郡条里については、伊藤裕偉「斎宮寮・伊勢道・条里」（『斎宮歴史博物館研究紀要』14　2004年）を参照されたい。

（13）斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡平成14年度発掘調査概報』（第７次調査」　2004年）

（14）上村安生「各地域の土師器生産と土師器焼成遺構・東海」（『古代の土師器生産と焼成遺構』1997年）

（15）考古学フォーラム座談会３「長胴甕とその時代」（『考古学フォーラム』11、1999年）

（16）三重県埋蔵文化財センター「おばたけ遺跡（第５次）発掘調査報告」（2006年）

（17）平成16年度三重県埋蔵文化財センター調査資料。

（18）『神宮雑例集』（『群書類従』第一輯神祇部）

（19）『神風鈔』（『群書類従』第一輯神祇部）

（20）「外宮神領目録」（『続々群書類従』第一）

調査前風景（東から）

ＳＸ505（西から）

上層面西半部完掘状況（東から）

上層面東半部完掘状況（西から）

下層面西半部完掘状況（東から）

下層面東半部完掘状況（東から）

SB594（北から）

SX581（南から）

耕作溝群（東から）

耕作溝断面（南から）

SD545断面（北から）

SD573・592断面（北から）

SD590断面（北から）

SD591断面（南から）

写真図版8

第四次調査区　遺物(1)

6

16

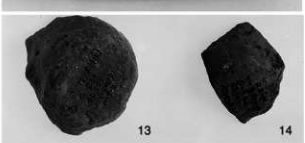
17

19

20

12

33


13 14

39

21

46

52

55

61

62

69

94

71

105

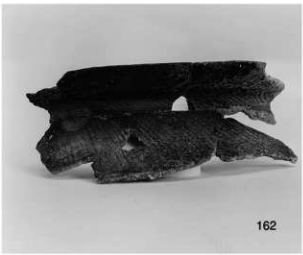
106

115

121

157

130


162

調査区を南西上空から望む（右上は櫛田川）

調査区全景（北上空から）

写真図版12

第一次調査区　遺構(2)

G1～3区全景（北から）

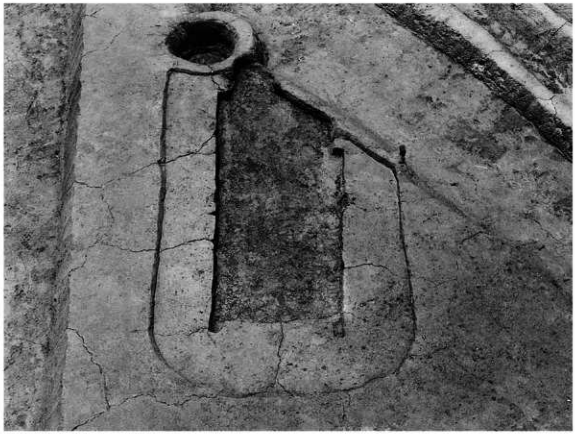
G5区全景（北から）

G9区全景（南から）

G4区南端SD28土層断面（北から）

G6・7区全景（北から）

G6・7区全景（南から）



G5区木棺墓SX84（北から）

G8区全景（北から）

G10区全景（北から）

G10区全景（南から）

28

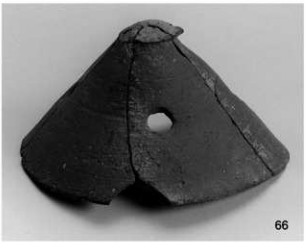
46

40

54

45

60


66

74

72

79

95

91

98

105

111

107

114

115

135

158

137

159

138

160

166

174

189

191

197

201

218

205

220

226

234

263

272

293

289

報 告 書 抄 録

ふ り が な	びわがいといせき（だい１・４じ）はっくつちょうさほうこく
書 名	琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	三重県埋蔵文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	271
編 著 者 名	伊藤裕偉・奥 義次・新名 強
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　ＴＥＬ　0596（52）7031
発 行 年 月 日	2005年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村	 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
琵琶垣内遺跡 （びわがいといせき） （第４次）	松阪市豊原町 （まつさかしとよはらちょう）	24204	a 756 （13A－26）	34度 32分 47秒	136度 34分 39秒	20040520～ 20040924	3,757	平成16年度 道路改築事業 （－）松阪環状線（豊原～上川）
琵琶垣内遺跡 （びわがいといせき） （第１次）	松阪市豊原町・山下町・安楽町 （まつさかしとよはらちょう・やましたちょう・あんらくちょう）			34度 32分 47秒	136度 34分 43秒	19870507～ 19870926	3,800	昭和62年度 県道御麻薗・豊原線道路改良事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
琵琶垣内遺跡（第１次）	集落跡	古墳前期 古墳後期 奈良～平安前期 平安後期～鎌倉	溝 竪穴住居・溝 竪穴住居・井戸・溝 掘立柱建物	縄文土器・弥生土器・土師器・二重口縁壺・須恵器・墨書土器・志摩式製塩土器	奈良時代末期頃の「厨」の文字の見える墨書土器が多数出土。
琵琶垣内遺跡（第４次）	集落跡	弥生時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	方形周溝墓 掘立柱建物・溝 溝・井戸・土坑 墓・溝	石鏃・土師器・須恵器・ミニチュア土器	古墳時代前期から鎌倉時代にかけての溝を多数確認。

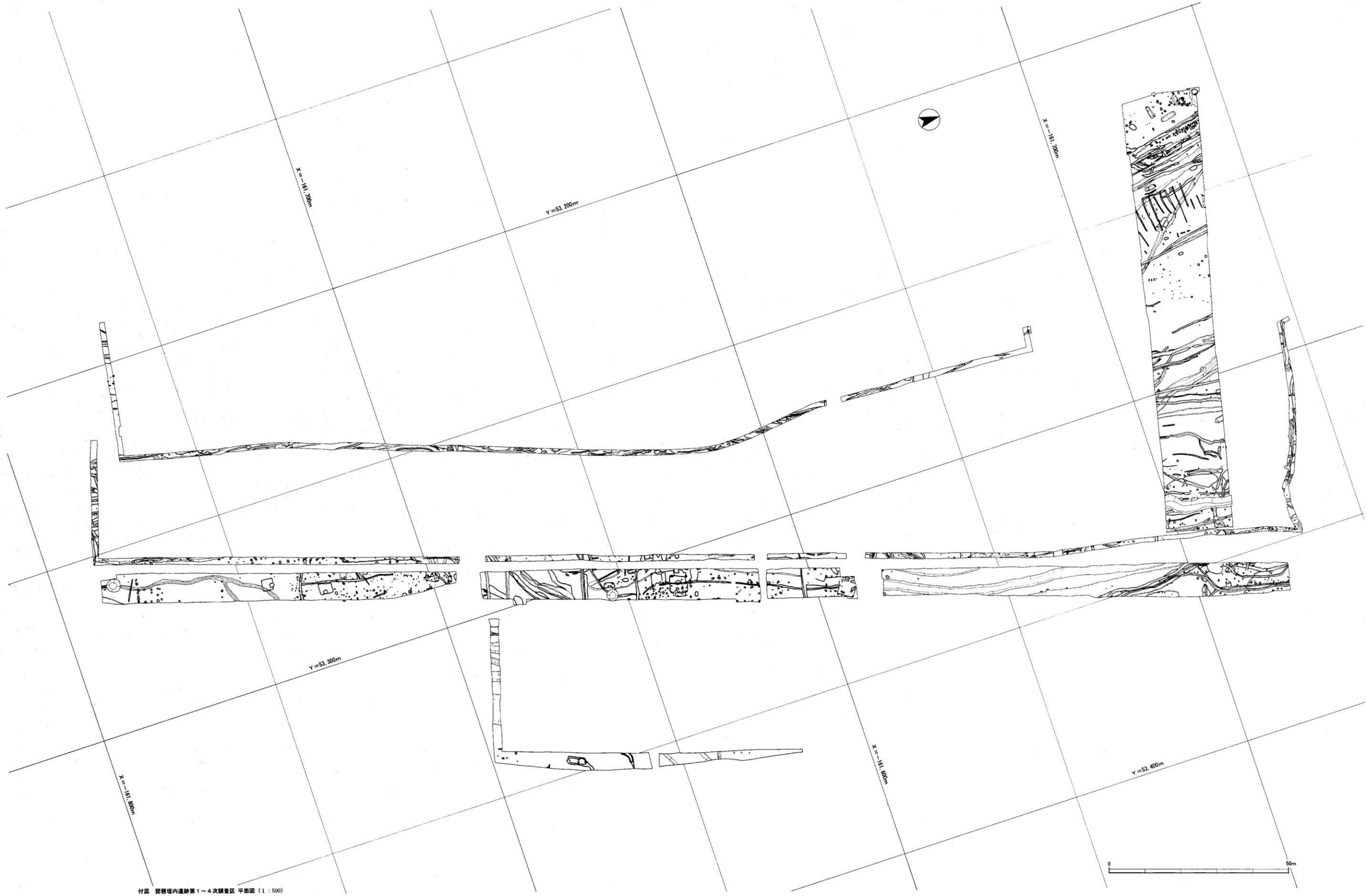
要約

第１次調査および第４次調査では、古墳時代前期から鎌倉時代にかけての多数の溝群を多数確認し た。これらの溝群は、調査区周辺および下流域の開発に伴う灌漑用導水路であると考えられる。また、ＳＺ98で確認された古墳時代前期の土器群は一括性が高く、櫛田川流域の土器群を考える上で重要である。奈良時代には、末期頃の墨書土器に「厨」という文字が多く見られ、琵琶垣内遺跡が官衛に関連する遺跡である可能性が考えられる。第４次調査では、波板状土坑や道路状遺構も確認されており、溝群を含め、琵琶垣内遺跡は櫛田川左岸地域の土地開発を考える上で重要な遺跡である。

三重県埋蔵文化財調査報告 271

琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告

２００６（平成１８）年３月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　東海印刷株式会社



付図　琵琶塚内遺跡第１～４次調査区 平面図（1：500）